

市民文芸

令和 5 年度
函館市民文芸
第 6 3 集



函館市中央図書館

指定管理者 図書館流通センター・
マルエイヘルシーサービス共同事業体

目 次

◇随筆（対馬 俊明 選）

【入選】

非日常の中の日常……………佐藤 健	1
献身……………山野 みちこ	3
ふるさとの味は、土の旨い香りとともに	

……………水 関 清	5
------------	---

山の友……………元 木 いづみ	7
-----------------	---

長生きの秘訣……………武 田 勉	9
------------------	---

【佳作】

ジンギスカン キチナ カン オモ
成吉思汗〜吉成リテ、汗ヲ思ウ

……………高 橋 剛 治	11
--------------	----

【選評】

……………	13
-------	----

◇小説（安東 璋二 選）

【入選】

気になること……………畠 田 農	15
ヨシフ・アントノヴィチ・	

ゴシケーヴィチの離任

……………山 本 大	26
------------	----

『後北游日乗』・異聞……………水 関 清	40
----------------------	----

【佳作】

さあ、行こう……………佐藤 健	55
-----------------	----

昭和期の回想……………園 部 敏 恵	71
--------------------	----

◇文芸評論（安東 璋二 選）

【入選】

孔子を巡る物語……………高 橋 剛 治	87
短歌における「私性」とは何か？	

……………水 関 清	103
------------	-----

【選評】

……………	118
-------	-----

◇ノンフィクション（木村 裕俊 選）

【入選】

あの水舞台に帰る日……佐藤 健
手書きの手紙……小島 栄 樹
134 121

【佳作】

川上理容院 でも気持ちは「床屋」

俳句の力……外山 聖 武
末永 玲 子
150 141 137

【選評】

◇詩（鷺谷 みどり 選）

【入選】

コンポスト……西 野 きぬえ
153

【佳作】

負ケナイデネ!! 雨ニモ風ニモ……梅 村 美 保
160 156

【選評】

◇短歌（山縣 庸美 選）

【入選】

清水牧子・柴田泰子・菊地利春……
162

【佳作】

三本木萌・石寄章枝・竹田光彦・水関清・
清水法雄……
164 163 162

【選評】

【選者詠】

……
164 163 162

◇俳句（能澤 三太郎 選）

【入選】 千葉誠一・清水法雄・斉藤よし子・

【佳作】 竹田光彦・富樫けんじ・菊地穂草・小坂彩幸・

見春妙子・

【選評】 ・

【選者吟】 ・

165

168 166 165

◇川柳（白井 靖孝 選）

【入選】 石本美恵子・犬石恭子・石岡繁雄・

【佳作】 岩本真穂・本間総子・大山徒史子・鍋倉英諒・

山館函美・

【選評】 ・

【選者吟】 ・

169

172 170 169

◇審査員紹介・あとがき・

173

非日常の中の日常

佐藤 健

「よーい、で食へ始めてください」

私の目の前にはトレレーに載った皿や小鉢の料理が並んでいる。今、私はテレビドラマの撮影現場にいる。湯の川温泉にある某ホテルの食事会場でボランティアエキストラとして参加しているのだ。

私の座るテーブルから二テーブル後方に男女の役者さんが向かい合って座り、ホテルでの夕食シーンを撮影しているのがある。

エキストラ募集情報は、登録している函館フィルムコミッション経由のメールで知らされる。コロナ禍でここ数年はめっきり少なくなっており、加えて六〇歳代男性の募集はなお少ない。

今回の募集内容は次の通りである。

○六月十四日（水）

時間・八時五〇分から十六時三〇分

（昼食有）

設定・旅行者、夕食・ビュッフェのシーン
季節・春（五月～六月）

服装・旅行に行く服装（浴衣に着替える
ので襟のないシャツ希望）

持ち物・ご自身の飲み物

この時点では、ドラマのタイトルや内容、出演者の情報は一切ない。

当日集合したのは全部で三十人ぐらい、

そのうち男性は五人。

エキストラ担当スタッフのFさんに案内されホテル二階の卓球場に着くと、そこで浴衣に着替えるように指示を受ける。

着替えが終わった頃にFさんが来て、ここで初めてドラマのタイトルと共演者が

が明かされた。

主演は、今から二七年前に彼女が十九歳

のときに主演した看護師を題材にしたドラマで知っている女優さんだった。先輩ナースとのコミカルな掛け合いが面白かった。ネットで検索すると連続ドラマ主演を三〇年間毎年務めた記録を持っているらしい。

一方、相手役の男優の名前が聞き取りにくく「吉沢」と聞こえたように思えたので、二〇二二年の大河ドラマで渋沢栄一を演じた俳優を勝手に想像した。現場で見かけた名前が出て来ない。でも、テレビでよくお見掛けする顔ではあった。

「ドラマは日常の場面を切り取るものであり、そのためにエキストラの皆さんの協力が必要なのです。普段通りの動きでお願いします」

説明と注意事項の最後に、Fさんが言つた。おそらく、こちら側のモチベーションを上げるためのものだと思う。

撮影現場に入ると、助監督らしき人の指示で、それぞれがテーブルにつく。巷で一時流行つた「相席居酒屋」のようだ。私が指定された席には、二十歳代と思われる二人の女性が座つていた。聞いてみると姉妹だという。

「この組み合わせって何だろうね」

と私が話しかけると妹さんの方が、

「お父さんとの家族旅行？」

と言つて笑つた。姉もうなずいている。私の髪はまだ黒々としており、後ろ髪も多少伸ばし気味なので、後ろ姿だけなら会社の同僚の設定でも行ける気がしたが、黙つておいた。

私が振り返つた視線の先にはテーブルで向き合う二人がいて、例の女優さんがこちら側に顔を向けていた。大勢いるスタッフの皆さんはマスクをしていて、誰が監督なのかさえもわからず、誰もが忙しく動いている。

カメラが女優さんに向けられた撮影時が私たち側の待ち時間だ。お陰様で彼女のお芝居を間近でじっくりと見ることにできた。

同じ場面を画角を変えて何度も撮る。その度に、役者は同じセリフと動きを繰り返している。そして、ついに私たちに声が掛かる。

「本番のときだけ、実際に食べてください」

さあ、いよいよこちら側にカメラが向けられる番である。対面の二人は、きれいに盛り付けられた小さめの寿司セットの中から初めに何を食べようかと相談している。

「お醤油が欲しいわね」

あちらこちらから囁きが聞こえる。私のメイン料理は肉料理で味が付けられていた。

「本番。よーい、スタート」

娘二人と楽しく夕食を食べる父親役を背中で見せる。肉に箸を伸ばしながら、ふと母親はどうしたんだろうなどと考えるりする。

「カット」

がかかるまで黙々と食べた。これが私の普段の行動だ。家族と外食した際に、自分だけさつさと食べ終えて、妻に叱責されることが多い。何度か繰り返すうちに完食した。

撮影現場という特殊な環境の中で普段通りの行動するのは難しい。エキストラと言えども環境に慣れる時間と訓練が必要だと思う。それを瞬時にできるのが俳優という職業なのかも知れない。

それはあたかも、コロナ禍の世界で日常を取り戻すために試行錯誤を繰り返したこの三年間と重なった。

献身

山野みちこ

昨2022年2月23日勃発したウクライナ戦争。世界のほとんどの人は一日も早い終戦を祈ったが、夏が過ぎ、秋が過ぎて終わる気配はなく、冬を迎えた。

ロシアの爆撃をうけ住まいを失った人々は、寒い冬をどうやって過ごすのだろうか。発電設備も破壊されているのだから満足な暖はとれないだろう。北海道と同じくらいの緯度のウクライナの気温は、大きくマインスになることも珍しくないはず……。ニュースが流れるたび、暮らしの様子に注意が向いた。

ウクライナの人々は戦時下であってもそれまでのような「ふつう」の日常をおくろうと努力している、とのナレーションで映し出されるキーウや都市部の情景は――家族や恋人と手をつなぎ楽しげに街

歩きしている人々。女性はちゃんと化粧をし、マニキュアも塗っている。お洒落で美人が多いなあ〜などと思いながら、私には計り知れない苦悩をかかえて「ふつう」に振舞っているのだろうと心の内を想像する。

ほとんどの人が厚手のキルティングコートを着ている。デザインはさまざまだが、日本でも多くの人が着用しているのと同じだ。親近感をおぼえながら厳寒期であることを確認する。日本、とくに北海道は冬と雪景色は切り離せないが、ヨーロッパは気温が低くても積雪はさほど無いので、映像の乾いた舗道だけ見ると季節の判別に戸惑うこともある。けれど身につけているものから、真冬であることがしつかり伝わってくる。

若いときヨーロッパやアメリカの冬の光景をニュースで見て感じたことを思い出す。毛皮のコートを着て、毛皮の帽子を被っている女のひとが沢山写っていた。映画雑誌ではハリウッドの女優さんたちが、豪華なミンクのロングコートをまとって微笑んでいた時代。毛皮イコールお金持ちと刷り込まれた私は、アチラは豊かな人が多いんだなあと思っていた。だが、やがて、寒い国では毛皮のコートは必需品なので、母から娘、さらに孫へと、大切に手入れして伝えているのだと知った。

欧米の女優さんたちが、動物愛護の観点から今後わたしは毛皮を着ません、という声を出し始めたのは40年前？ いや、もっと前だったろうか……。長いあいだシルクの薄いドレスにふかふかの毛皮をまと

ってファンを魅了してきた彼女たちの表明は衝撃だった、というより彼女たちも何かから影響をうけての行動だったのだろう。世界の意識が、動物の尊厳を重んじる方向へ移行していた。日本の捕鯨がヤリ玉にあがったのも同じラインなのか、いま私には正確に分からないが、衣服に関しては毛皮に代わって、軽くて暖かい新しい素材が出現したのとリンクするとも思う。

今年は「卯年」だ。

年明けの北海道新聞『読者の声』欄に、私と同世代の方の、うさぎにまつわる話が載っていた。春、父親が拾ってきた仔うさぎ。姉妹で可愛がって育てた。年末、小屋からうさぎの姿が消えた。その夜、鍋の具は……姉妹で泣きながら、でも、おいしいねと言って食べたという思い出だった。

夫も読んで、「おれの家だって同じだったよ、鶏も飼ってたし、山羊や馬もいて、最後は人間のために命をもらった」

私が経済家畜という言葉を知ったのは最近だ。人の暮らしに役立ち、とりわけ経済的利益、つまり現金収入をもたらすもの

が家畜だった。夫の親たちも、農作業を助けてくれた馬を老いたら業者に売った。なんらかの心の痛みはあっただろうが当り前の行為だった。

そんな家畜との関係に、今、動物福祉という考えも導入されている。たとえば食用として育てている鶏であつても生きているあいだは気持ち良いよう、鶏舎の1羽あたり最小スペース基準が示されている。動物園の動物たちにも、出来るだけストレスを感じないように自然に近い環境を設けなければならぬ。食肉として命をもらうときも苦痛は出来るだけ与えないように。動物園は治る見込みがなければ安楽死させる。西洋発祥の考えだから合理的すぎる点もあると思いつながら、おおすじ賛同する私は、毛皮のコートを拒否した女優さんはベジタリアンになった人も多いようだ、ありがたきお肉をいただいている。

じつは私、うさぎのハーフコートを持っている。日本がバブルにむかっていたときはミンクやキツネには手が届かない庶民にメーカーが、うさぎのコートを提供したの

だ。そのころ、マイナス20℃になる道東にすんでいた私に、母が買って送ってくれた。数えるほどしか着なかったが凍てついた風を感じさせない暖かさだった。それが、まだ押入れの中にある。不用品整理を始めているが、母の思い出と、何匹かのうさぎの命と交換でつくられたと思うと処分する決心がつかない。

戦いがおこって二度目の冬を迎えそうなウクライナの女性たちも、祖母や母が身につけた毛皮をどこかに仕舞っているかもしれない。

ふるさとのは、土の匂い香りとともに

水 関 清

四国山脈の南側にある、標高一三三六メートルの不入山（いらずやま）に源流を持ち、深い山並みの間を縫うようにして、逆

S字を描きながら蛇行を繰り返して、三一九本もの支流を集め、高低差の少ない流れとなつて太平洋に注ぐ四国最長の川が、四万十川である。

源流部から、山々からの水を集めて突出する山塊に沿つて、律義に蛇行を繰り返す流れを下ると、いつしか両岸に迫つていた山塊が遠のいて、広い河原が目立つ中流域へと至る。私の親族の故郷に近い、この明るい中流域に流れ込む支流は、鰻の住処であり、食料になるだけでなく、貴重な現金収入となつていた。

鰻獲りには、仕掛けを準備して、それを据える流れの中の場所を読み、朝早い収獲

場面では、獲物を取り逃さない確実な手技が必要のため、小学校高学年迄は見習いに終始した。

「川の幸」と同様な習熟期間を求められる「山の幸」は、ヤマイモ掘りだった。きつい身体労働と神経の細やかな働きの双方が必要な作業であり、良質なヤマイモは貴重な現金収入となつて暮らしを支える切実な側面もあつたため、その真剣勝負への参加は小学校卒業前の子どもたちに限られた。

ヤマイモ掘りは、葉が枯れ落ちたイモの蔓が、左巻きに絡みつく木の幹を探すことから始まる。イモの蔓を見つけて丁寧に辿っていくと、やがて土の中から僅かに顔を覗かせたイモの先端に辿り着く。イモの上の石を除き、覆い被さる木の根を根気よく

動かし、イモの顔を、掌で撫でるようにして周囲の土を払う。

イモの顔を丸裸にした後、掘り始めるのだが、これが難しかった。地中でのイモの埋まり方を想像し、曲がりに合わせて周囲の土を立体的に移動させるには、どこから手を付けるとよいか、と考える構想力が求められた。イモの曲がりに合わせて柔軟に掘る重労働であり、頭のほうも集中力の持続が必要なのだ。

緊張する作業の果てに本命のイモが収穫されると、小学校低学年の子どもにも場は解放される。イモを掘ったばかりの穴からは、土の香が立ち昇ってくる。思わず深く吸い込むと、その滋味あふれる旨い匂いに、身体の深いところが反応する。時には掘り損ねて途中で折れたイモの切れ端が

穴の側壁に残り、旨そうなネバネバが沁み出す。周囲を掘ると直ぐ収穫できそうだが、イモの曲がりや複雑で、常に途中で折れてしまう。そんなイモでも、持ち帰って掘り鉢でおろすと、出し汁で薄めても塊となつて持ち上げられるほどに、強い粘りを示した。折れたところに混じる泥のために、口の中がジャリジャリしたが、自分で掘つた「切れ端イモ」の味は格別だった。

そうした見習い期間の子どもたちにとつての慰めは、河原を見下ろす周囲の山の中にあつた。土中作業の集合力が必要なヤマイモ掘りにくらべて、「かずら梨」「しゃやぶ」「こごぶ」などの木の実を探す時には、頭上で混み入つた枝々の間に見え隠れする実りを、きちんと見分ける判断力と、適切な収穫ルートからアプローチする機動力とが求められた。

とくに、赤茶色をした蔓に隠れるようにして稔る、緑色をした「かずら梨」の実を採し出すことは楽しみだった。大人の親指ほどの大きさの実を二つに割ると、キウイフルーツのようなジューシーな緑の果肉

が現れる。中の種は小さく、味もキウイフルーツそっくりで、甘い。山の動物たちの好物であることから、「サルナシ」とも呼ばれる。

「しゃやぶ」の実は、鮮やかな赤や黄色で、木のグミの別名を持つ。枝からぶら下がる細長いサクランボといった風情で、よく熟したものは甘酸っぱい。その風味の良さにつられて食べ過ぎると、口の中がザラザラした。

「ムベ」という別名を持つ「こごぶ」の実は、一個でも、子どもの掌を覆うほどに大きい。鶏卵ほど大きさの赤紫色をした実を割ると、中には半透明のゼリー状の果肉の中に、種がいっぱい詰まっており、一見すると「アケビ」にそっくりである。しかし、冬になると葉が枯れ落ちてしまい、熟すと実の中央が割れるアケビとは異なり、

「こごぶ」の実是一年中緑を保ち、自然に割れることはない。

ゼリー状の果肉をまとつた種のまもりを、口の中でゆつくりと転がして、少しずつ離していく。そして、種を一つずつ、

しゃぶるようにして裸にしていく気長な作業の中で、種の周囲にある透明なところ、独特な甘さを味わうのである。太陽を求めて上へ上へと伸びてゆく「こごぶ」の蔓の長さは、ゆうに一〇メートルを超え、そこから小さな柄が出てその先に実をつけるため、蔓を引つ張り過ぎて実を落とさないことが収穫のコツである。

里山の秋は、地道に頑張れば確実に収穫できる実りに満ちていた。故郷の味は、そのような旨い土の香りとともにあり、そして上級生たちの背中の方こう側には、「自分も大きくなれば、ヤマイモ掘りや鰻獲りに参加できる。」という、成長に対する無邪気な信頼がしっかりと見えていたのである。

山の友

元木 いづみ

酷暑の悪戯か、例年、庭を賑わせているマリーゴールドは、二度の種播き・発芽も虚しく絶えてしまった。今年の種は採れなかった。

七月半ばから、頭重・ふらつきに見舞われた。外出を控え、家事・読書・習いごとからも遠のいた。

横たわりながらも、気分転換の方法を考ええた。そうだ、花の写真を眺めよう、と本棚の一番下にしまい込んであったポケットアルバムを数冊取り出した。

数年前に整理していたとは言え、漠然とした思い出として繭の中にくるまっていた。

その思い出は、野山歩きを始めたばかりの三十年ほど前に遡るものだ。

超アナログ人間の私は、使い勝手の良い

一眼レフカメラをぶら下げ、シャッターを押ししていた。

アルバムを開くと花暦がめくられ、残雪の谷間のコバイケイソウ・ナニワズに始まり、白や薄紫色のキクザキイチゲ・カタクリ・シラネアオイ・コジマエンレイソウ・ネジバナ・ミヤマオダマキ・イワギキョウ・イワブクロ・エゾオヤマノリンドウ・ウメバチソウと名前を呟くだけでわくわくする花たちが私を待っていたかのように、そよ風に揺らめく。いつでも、あるがままに受け入れてくれる花たちは変わらぬ友である。

「シラネアオイを知っていますか」という道内の山々を登っていた草花にも詳しい同僚の言葉は、未知の世界のドアをノックさせる力があつた。仕事しか知らない四

十歳直前の時だった。

日常の中で少し立ち止まるだけで見える別世界がある。きつかけは些細なことでもいい。通勤途中に眺めていた駒ヶ岳へのひとり登山が始まった。偶々、家族で取得していたアマチュア無線機は万が一のための装備だった。

地図・登山用具・植物に関する資料を随時提供してくれた同僚は、一番先にひとり目の指南役となつた。雪が降つた十二月の駒ヶ岳に登つて下山した時、駐車場であ会つた方が同僚の友人で更に人の輪が広がった。

そのような縁で、翌年一九九二年の二月、指南役二人と初心者私の三人は、函館山で壺足登山をしていた。続いて、七飯岳はシールの取り外しやビンディング扱い

が伴う山スキーの指導を受けた。とりわけ「三点支持」を堅持するストック操作は、岩稜歩きの手足運びに繋がる重要な基礎だった。三月の駒ヶ岳、四月の羊蹄山と山行メンバーは増え導かれた。

青空、白い雲、雪山、寒さで緊張した面持ち、笑い声、珈琲の香りまでもが写真から立ち上がり、八月を迎えても伏せがちな私を包んでいた。只々、楽しかった日々を想う。その「山をこよなく愛する会」のリーダーの諸諸の計らいは有難かった。次の日も次の日も、時折目を瞑りながらも出かけた山々や花のアルバムを手にしていた。

一枚の写真を前に、つうーと涙が流れ落ちた。それは、リーダーの職場の青年と私のために計画された、コマクサに出会う大雪山縦走（テント泊三泊四日）の山行写真だった。霧雨の中、這い蹲る格好で何とかコマクサと一緒に撮ろうとした瞬間のものだった。同行の六人は有頂天だった。私も珍しく山女を気取り頭に赤いバンダナを巻いていた。それは後にも先にも、そ

の時だけだった。

その時の青年は、召され、今はいない。四年前の三月末に小さな文字が詰まった葉書が届いた。進行性胃癌で一月に全摘し、自宅療養で抗癌剤治療が続いているというのと、「療養の励みにメールに御連絡を頂ければ嬉しい限りです。コミュニケーションの機会が少なくなることで寂しさを感じております。」と記されていた。一九九四年の彼の転勤時の挨拶状から年賀状へと長年続いていた。

返信が病の負担になりはしないかと躊躇いつつも逸る思いで二日後にメールを送った。七月まで三回の返信と共同執筆し四月に発行された「裁判のギモン」のブックレットが送られて来た。関西で弁護士として少年事件やいじめ問題に関わってきた情熱が窺い知れた。

静かな交流の中で、子どもを取り巻く問題について共通の認識を抱いていたことを知った。二十五年の月日の隔たりは、哀切が伴う懐しさに姿を変えた。

近郊の山歩きや高山の岩稜歩きの内容

者・同行者、出会った花や動物たち、自然界全てが友であり師でもある。

平穏な日々が続いていると自分の姿が見えにくくなる。自由を奪われ動くことが出来ない状況に陥った時に想い出しい、ではなくて、想い出もあるじゃないかと気づく。

葉の揺らぎに心を奪われ、不調から脱け出る兆しが現れたのは、虫の音が響き渡り、エゾノコンギクが寄り添って咲く頃だった。

長生きの秘訣

武田 勉

人生五十年と言われていた時代から、いつの間にか長足の進歩を遂げて、近ごろでは百年長寿とか言われるようになり、二倍も長生きできる世の中になってきた。

家庭の中には家電製品やハイテク機器が溢れ、暮らしは便利になった。ひと昔前にはなかったインターネットなどが出現し、SF映画の中だけだったテレビ電話が現実のものとなった。テレビ電話よりさらに高度化したスマホに問いかけると、どんな難問でも答えてくれるいい時代になった。

都内に住む娘が結婚して子どもが生まれてから、スマホで頻繁にやり取りするようになった。娘は孫の顔を見せることが親孝行と考えているようだ。初めて女の子を出産したときは病室からリアルタイムで

母子の様子を伝えてきていた。家族が暮らすアパートでの様子を見てみると、遠距離にかかわらずまるで二世帯住宅に住んでいるかのようなようだ。

スマホの画面の中で遊んでいる孫娘の顔が娘の子どものころの顔に似てきて、わが子のように思えたりすることがある。そのころは初めてのことであり無我夢中で子育てをしていた。夜半に娘が熱を出し急いで救急病院に駆け込んだこともあった。

娘が二歳のころだったろうか。絵本を読み聞かせる担当になった。見知らぬ異国を訪ね、鳥になり空を飛び、ラクダになって砂漠を旅した。お姫様やライオンやネズミたちが踊り出すと、布団の上でいっしょに踊り回っていた。魔法のジュウタンに乗っ

て世界中を飛び回り、驚きや喜びの声を上げなかなか寝付いてくれなかった。ひとわり騒いだあとと静かな寝息を立てて眠るまで絵本は大活躍していた。娘とともに冒險した日々は瞬く間に過ぎ、魔法が解けて担当を終える日がくるなど考えもしていなかった。

いま娘夫婦の都内のアパートは、流行りのパステルカラーのおもちゃで溢れている。スマホの映像には孫娘のご機嫌な顔と前夜に空を飛び回ったのか何冊もの絵本が床に散らばっている。

今年は何かがおかしい。北国でも猛暑日が続く、高齢者には身に応えた。戸外では日に照らされた道路に陽炎が立ち昇っている。部屋の中は高温のサウナ風呂になり額から汗が吹き出してくる。南風と言うに

は暑すぎる。熱帯地域のような熱風が扇風機から吹いてくる。常時回していても一向に涼しくならない。来年は新型コロナの感染の心配より、クーラーを設置する方が先かもしれない。

あまりに猛暑が続き、日が沈むころになると冷えたビールに手が伸びる。喉を流れる落ちる滝のような涼感がしおれた体に命を吹き込み、祭りの夜の熱気に似た勢いがわき上がる。

幼少期の浴衣を着た思い出や、中高生の元気で悩み多き時期、大人になってからの人との出会いと別れがグラスの中でプツプツと音を立て始める。楽しかった日々が脳裏を駆け回り、忘れがたい人たちの顔が思い浮かぶ。スマホに保存している鮮明な画像のように記憶は次から次へと止めどなく現れては泡の中に消えて行く。さらに酔いが回り出すと、血気盛んで何事も恐れずに突き進んでいた若き日の自分の姿が見えたりする。夢や希望を胸に押し込み、視線の先には明るいはずの未来が遠くに霞んで揺らめいていた。

きつと正気ではいられないような異常な暑さのせいなのだろう。来年は懐の痛みに耐えながら猛暑や疫病から逃れられることを願ったりしている。冷房の効いた快適な寝室で、絶滅の危惧される白クマの夢でも見ているだろうか。厳しい気候をやり過ごし、多くは望めないものの多少でも寿命が延びれば元は取れそうだ。

都内の遊園地からリアルな映像が送られてきた。ひ弱に思えた娘はすでに三人の子どもの母親となっている。一歳になる長男を抱っこひもで胸に抱え、広場を走り回る二人の子どもにスマホを向けている。学生の子どものスリムな体形から一回り大きくなってたくましさを感じさせるようになってきた。五歳と三歳になった孫娘が笑顔で手を振っている。

「そこは楽しいの」と呼びかけると、どこで知ったのか人工知能を搭載したスマホが人の一生を丁寧に教えてくれたりする。

ハイテク機器などない時代に育ち、それなりに錆び付いてきてはいるものの、自前

の知能でいくつもの荒波を乗り越えてきた。行方も知れない人生の狭間を漂い、気付けばとつくに古希も過ぎていた。ふと目を上げると、満天の星の煌めきがいつもと変わらず故郷の夜空で瞬いている。

海峡からの潮風が心地良い。

了

成吉思汗ジンギスカンと吉成キチナリテ、汗カンヲ思オモウ

高橋 剛治

コロナ五類移行を機に、いとこ達と外での飲会を持つ事にした。四年振りになる。

日本全体で集団免疫を獲得したのでも弱毒したのでもない。更には特効薬が出たわけでもない為、その日を境に大丈夫というムードには少し不安も感じるが、久々の

飲会は単純に嬉しいと思えた。夜の街へは出ていなかったが、昼の散歩で休業や閉店の所を多く見ており、行啓通りの新装店の「旭川成吉思汗」の看板は目を惹いた。ジンギスカン店は函館市内では方々にあり、自宅近くにもあるが、感慨深かったのは表記が漢字だった事だ。

五十年程も前の事になるが、中学校の級友であったFが、次の様な話を持ってきた。「源義経が、襲撃された衣川こしもがわから北海道に逃れ、更に大陸へ渡りジンギスカンにな

った、と言う説があるのを知っているか」Fとはムーやアトランティスの超古代大陸伝説やナスカの地上絵等のオパーツ、歴史についての異説や珍説等の話をしていた。

「義経の叔父の為朝も流罪先の大島から琉球に渡り、王朝の祖になったと言う伝説があつて、滝沢馬琴が「椿説弓張月」と言う小説を書いている。義経は東北北部から道内に北行史跡が多く、日高の平取に義経神社もある」

と続けたが、Fは卒業前に転校し、その後会う事もなく、その出典を聞きそびれる。

高校に入り、高木彬光の歴史推理小説「成吉思汗の秘密」を手にする。そして次に記す最終章の漢字名の謎解きに魅了された。

『成レ吉思汗と吉成リテ、汗を思フ』

吉とは義経と静御前が別れた吉野山で、汗を偏ひとへと旁に分けるとサンズイと干、水干となり、白拍子の装束、つまり静御前になる。

「吉野山で互いに交わした誓いが成り、水干姿の静を思っている」との義経の想いを「成吉思汗」の名に盛込んだと言うのである。』

義経やその北行伝説に関する書物は、その後も随分と読んだ。詳細の全ては書き切れないが、纏めると義経人気と日本人の北方に向かう野望が、この奇説を形成したと言えた。

これが最初に歴史書に登場するのは江戸前期の「本朝通鑑」で、幕府による蝦夷地進出が背景にあった。彼らがアイヌ人と

公的接触をする前の民間交流、室町期の淨瑠璃等により、既に義経伝説は蝦夷地に伝播していたのだが、新たに探訪する彼らの前には史的事実として、それは立ち現れる。更に江戸中後期のアイヌ人の反乱が蝦夷地への関心を高め、「金史別本」等の偽書の流布に因り、義経伝説は大陸渡海へ進む。幕末に間宮林蔵による義経Ⅱジンギスカンの記述をシーボルトが「日本誌」で欧米に紹介する。これが明治になり、翻訳逆輸入され、漱石の「吾輩は猫である」でも言及される程、一般に知られた。

やがて大陸に進出する帝国日本を時代背景に、大正十三年に小谷部全一郎が「成吉思汗ハ義経也」を發刊、ベストセラーになる。それが今からでは想像できない程の社会現象を巻起し、論争は日本の政界、学会も揺さ振る事になる。この本は、この奇説の集大成であり、戦後出た高木の作品の種本でもある。

大学の頃もこれについて話す相手もいなかったが、私的な好奇心の探求は続いた。社会人になり、勤務先の後輩に作家と同姓

同名の高木君がいた。彼はその為、同氏の作品の多くを読んでいて、特にこの小説の愛読者だった。彼はこのロマンを信じたがつていたが、「静のエピソードは鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』に劇的に詳しいが、これは静を助ける北条政子にライトを当てる描写で、義経には衣川まで逃避行した正妻の郷御前がいた。彼女の記述は、その一族に関連して意図的に省かれている。仮に義経の自署名だとしても、そこに記されるとしたら静ではなく、郷になるのではないか」と私は懐疑的理由を話した。

その後「蒼い狼」等ジンギスカンの小説や評伝も読んだが、そこで思い浮かぶのは十年程前に勤めていた会社の部下で、大連から来ていたモンゴル系中国人の何君の事だ。彼は留学して日本の大学を卒業していたが、日本人と話をしていた、多くの人が中国人の自分より中国史（特に三国志）に詳しい事に驚くと言ひ、ジンギスカンについて、

「少し前までモンゴルでは、彼は歴史から排除されていたよ」と語った。

社会主義国だったモンゴルでは、ロシアの影響下で、ロシアの仇敵であったジンギスカンの実績はタブー視され、歴史から排除されていた。一九九二年のモンゴルの民主化により、民族の英雄として復権したのだ。

何君は私が定年退職した少し後、帰国の為に辞職し、以後会っていない。勿論、義経の事も、その奇説も知らなかった。高木君とも私が転職してしまい、その後会えない。

「みんな、元気でいるだろうか」

「成吉思汗」から想起された彼らの事を思い出しながら、私はそこから離れた。

(了)

選 評

対馬 俊明

コロナの流行が治まって応募数が増えるだろうと期待していたが、随筆部門の応募は10作品。心に温めていたと思われる作品が多く読み応えがあった。以下に、入選・佳作について選評を記す。

入選「非日常の中の日常」 佐藤 健

題名がものものしいが、ドラマの撮影現場に、ボランティアエキストラとして参加した時の話である。役はどうやら、二人の若い女性と父親役の私が、主役の女優の背景となつて、食事をしている場面の撮影ということらしい。作者は、リハーサルを含めた演技について、「コロナ禍の世界で日常を取り戻すために試行錯誤を繰り返したこの三年間と重なった」と結んでいる。ボランティアエキストラとして演技に参加しながら、演技の進行を客観的に見ている視点がおもしろい。題名が内容と合致している所もよい。

入選「献身」 山野 みちこ

ウクライナ戦争が勃発した後の、キウウや都市部の情景としてお洒落した家族や恋人との町歩きの様子がテレビに映し出される。話題は若い時ハリウッドの女優たちがミンクのコートをもとってほえんでいた時代から動物愛護の観点によって毛皮の着用が排斥されるようになった変化を描き、「じつは私、うさぎのハーフコートを持っている」との告白に至る。話は転々とするが、それが随筆の醍醐味でもあるだろう。

入選「ふるさと」の味は、土の旨い香りと もに」 水関 清

四国最長の四万十川の中流域は、鰻の収穫場所として有名であるが、山の幸としてその収穫には、習熟期間を求められるのがヤマイモ掘りであったとして、その詳細を描いている。豊かな自然に没入していく少年時代の体感が見事に再現された作品である。

入選「山の友」 元木 いづみ

酷暑の中、頭重・ふらつきに見舞われ横たわりながらも、三十年ほど前に遡るポケットアルバムを取り出す。四十歳直前、駒ヶ岳への一人登山を始める。その後指南役は増え、函館山での垂足登山。七飯岳ではススキー。三月の駒ヶ岳、四月の羊蹄山と山行メンバーは増えた。一枚の写真を前に涙がこぼれる。コマクサに出会う大雪山縦走の山行。その時同行した青年は今はい。勤務先から送られてきたブックレットによって、赴任先の関西で少年事件やいじめ問題に関わってきた情熱が窺い知れた。自然全てが友であり師でもある。重厚なテーマを仲間との山行を通して語った秀作である。

入選「長生きの秘訣」 武田 勉

百年長寿と言われる時代。ハイテク機器が溢れ、スマホの普及で、都内に住む娘とやり取りするようになった。スマホの映像には孫娘のご機嫌な顔と床に散らばった

絵本が見える。来年は懷の痛みに耐えながら猛暑や疫病から逃れられることを願ったりしている。

都内の遊園地からリアルな映像が送られてきた。娘はすでに三人の子どもの母親、孫娘が笑顔で手を振っている。ハイテク機器などない時代に育ち、それなりに錆び付いてきてはいるものの、自前の知能でいくつもの荒波を乗り越えてきた。気が付けば古希も過ぎていたと、老いの自負で結んでいる。

佳作「成吉思汗ジンギスカンく吉成リテ、汗ヲ思ウキチナカンオモ」

高橋 剛治

語られているのは、巷間に伝わる義経伝説のひとつと思われるが、その由来となる資料の提示など随筆の範疇を超えて、歴史挿話・論考の一部として書かれたものと読んだ。随筆としては場違いの感があるが、おもしろいので佳作として、掲載作に入れておく。

気になること

畠 田 農

夕飯の時、テレビの画面に交通事故映像が出てきた。アナウンサーの説明だと、「高齢者がブレーキとアクセルと間違えて、コンビニの入り口に突っ込んだようです」と言っている。

また、父の口癖が始まると思つて、わたしは急いで食事を済ませ、二階の部屋に行こうと立ち上がったとき、

「ジージもこの頃、車を壁にこすった跡や、車のバンパーが潰れているのが、目につくようになってきたけど、大丈夫が」

「なーに、たいしたごとねーって。走るには何ともねから」

「そなこと言つたつて、この頃多くなつてないが」

「長年車に乗つてたら、そういうことだつてあるべよ。事故なんて、道路歩いていだって、上がらななが、落ちてくることだつてあるべし、遊んでいだって事故は起きるんだ」

「その話、すり替えてるつて。いまは車の運転のことを言つてるべ」

祖父は悔しまぎれに、へり口を言つてるようだ。この頃、父に年齢のことや、運転のことを言われることが、多くなつてきていた。それだけに、よつぽど悔しいみたいだ。

「タクシーの運転手でも、小さい事故が三回を超えたら、会社

やめてもらうつてど、あるつて言うど。大きな事故、起さねうちに、年なんだし、車やめたらいいんでねが。取り返しがつかねくなる前に」

「おらは、七十年近くも車に乗つてゐるんだ。まんだ、ボゲも来てねし運転には自信あるつて」

「そんなこと言つたつて、八十六にもなるんだし、老化してることは確かなんだから。バーバもそう思つてるべ」

急に振られて、祖母も戸惑つてゐるのだろう、湯呑茶碗を手に立ち上がった。

車や運転免許のことは、高齢ドライバーの事故があるたんびに、父はうるさいくらい言つてゐる。わたしは毎朝、祖父の車で大学まで送つてもらつてゐる。いまのところ走つていて、特に危ないと思うようなことはない。

今年の三月までわたし達家族は、「祖父母、父母、それにわたしと妹の六人」は、この家で暮らしていた。

この春、父の転勤で、母と高校一年の妹は、札幌の方に引っ越した。わたしは地元の大学の一年生なので、祖父母と三人暮らし

しだ。

「うるさいのがいなくて、せいせいする」

初めのころ祖父は、こう言っていた。父からも、まだ落ち着かないのか三、四日電話がない。

「母さんも美代も、慣れねとこで元氣でいるべが」

と、気にするようになった。

ところが、半月ぐらいもすると、父からしよつちゅう電話が来るようになった。それに地元の町に住んでいる伯母さんも、電話で祖父の車のことを、言うようになってきたようだ。

離れて暮らしているので、心配なことはわかるけど、他の用事で電話が来ても、最後は必ず祖父に、受話器を回すことになった。

祖父は「父さんや利恵から電話が来ても、言うことはわがってるから、おらは出なくていい」と言ってるけど、「せっかくジージを出してて言ってるのに、そういうわけにも、いがねべ。早く、ほれ」と、祖母が受話器をのべるので、ししぶ出ている。

ときには、『いま手離せね』とが、『おもでに出でる』とが言ってくれ』と、出ないこともある。

ある日、黙って受話器を耳にあててると思っていたら、突然怒鳴った。

「しばらくは、今まで通り運転することになってたべ。まんだ、

ぶり返しやがって、いい加減にしろ！言えてーとあるなら利恵(伯母)に言わせねで、直接おらに電話よせ。ひとの気もしらねで！」

その後、二三日は祖父の機嫌が悪い。

聞いてて気になったことがある。それは「ひとの気もしらねで」とは、なんのことを指してるのだろう。

わたしが電話に出ると、父は決まって祖父の運転のことを聞いくる。毎朝大学に送ってもらっているので、気になることがあっても、父には言えない。争いのタネになったら大変だ。

父は高齢者の自動車事故を、「テレビニュースで見たり、よその人の話を聞いた」と言っては電話をしにくる。

「おらは、六十年以上も、運転してんだと。まだ事故もおこしてねーし、ボケも来てねー。ダメだと思つたら、おめに言われなくたって、きつぱり車、やめてやるつて！」

こう言つて、はね返している。

そういう祖父も、最近は車庫に入るときは何度もやり直しをするようになったし、どこかに出かけて、駐車をする時も白線に沿うより、白線に逆らつて停めるようになってる。

「これでも、白線の中だから、いいことにするべ」
つて笑っている。

父が転勤してから、伯母からの電話も多くなったような気が

する。

「あいつら二人で組んで、おらから車取り上げる気だ。よく言えば、心配しているように聞こえるけど、事故を起こしたら自分だちに迷惑かかると思ってるだけだよ。結局はどいつもどいつも、自分のごときか考えでいねんだ」

吐き出すように言う。

「そんなこと、まさか。おらどのごと、心配してくれでるんだから、あんまり悪い方に取らね方がいいよ。動けねくなったら、面倒見でもらわなくちゃなんねんだから」

祖母は、こう言ってなだめている。

「こんなどこにいで、車やめだらおらどの暮らし、困るってこと少しも考えてねべ。たんだ『やめろ、やめろ』と言っただげだよ。やめだら明日から、おらどの暮らし困るってこと、言っただげとあるが」

ぼやきが止まらない。

「おめだつて、半月に一回は血圧で、病院さ行ってるべ。膝で整形にも通わねばなんねし。車やめたら、どうすんだ。バスだら病院にかがる時間や、病院の待ち時間を入れたら、一回の通院で早くて半日。遅いどきは一日はかがつてしまう……。確かに車やめたら、車の事故は起きねくなるけどな」

「車がなくなつたこと考えると、どうしたらいいもんだべ」

祖母は、独り言のように言っている。祖父の「気になること」って、これに違いない。

父や伯母は、こんなことを頭に入れた上で、車をやめさせようとしてるのだろうか。暮らしのことなんて、耳にしたことがない。これでは、祖父が怒るのも無理がないような気がしてくる。

そんなある日。

「覚悟しておかなきゃなんねーな」

テレビを見ていたら、祖母の独り言が聞こえた。

「バーバの言う、覚悟って、なにさ」

「あれ、聞こえだが」

こう言って笑ってから、

「おら、これまで滅多にバスに乗ったこともねんだ。本当のごと、一人でスーパールに行くの、心ペーなんだ。いつも、ジージの車でばっかし、買い物行つてたからな。近所で車やめた人の言うこと聞くと、バスの数も少ないと言うし、買い物に時間かがつてしまうと、帰りのバスに時間が合わなくて、歩いて帰るんだつて。おらは膝も悪くて、ほがの人みたぐ歩けねし……」

「そんなに心配しなくても。ジージ、まだ車やめそうもないから」

「あの人、ああしてじよつぱりしてるけど、車やめるの、案外早くなるかも知れねーよ。ああ見えでも、決断の早えー人だから」

こう言ってる声も弱々しい。

「買い物行くと、おれも一緒に行くから。土、日と、大学休み

の時なら、いつでもついていくから」

こんなことがあつてから、バスで帰った時には、降りてから時刻表をよく見るようになった。通勤や通学の人を利用する数は、二十分から三十分おきくらいの間隔なのに、それが過ぎると、一時間に一本に、減ってしまうことがわかった。

このことを祖母に話すと、

「タケシ、今度バーバとバスで買い物に行つてみねが」

「いいよ。一緒にバスに乗つたの、小学校に入る前のころだよ」と言つと、祖母は喜んでゐた。

祖母が朝食の後片づけや、洗濯が終わるのは、十時を過ぎてしまう。

その日は祖父は風邪気味で、元気がなかった。熱を測つたら三十七度を超えていた。

「ジージは、ひとり置いていつて大丈夫がい。きょう日曜日だしタケシとバスで、買い物に行つてこようと思つていたけど」

「なあに、このくれの熱、何ともねつて。行つてこい。何があつたら電話よこせば、すぐ迎えに行つてやるから」

スーパーは九時開店だった。十時過ぎのバスに乗ろう。祖母の顔は、心配してたよりも嬉しそうだ。おそらく帰るのは十二時過ぎになるだろう。

スーパー前のバス停から、スーパーまで自分の足だと、五分もあればいいのだけど、祖母の歩みは、膝が悪いこともあつて、

十分以上かかった。

買い物時間は、どのくらいかかるか見当もつかない。

「ジージと一緒にするときなら、三十分から四十分くらいかかったみたいだけど。今度の店は、あまり来たことねーからわがらね」
自信なさそうだ。

いつも祖父と行つてゐるスーパーは、坂の上のほうにあつた。ここはバスを降りてからも、坂道なので祖母の足なら無理だ。その点、このスーパーは、バスを降りてからは、平地なので、少しは歩きやすいと思う。

買い物が終わつて、十二時の十五分のバスに間に合わせようと、バス停に行くと老人の乗客が二人いた。一人は膨れたリュックサックを背負つた人と、両手にいっぱい入つた袋を持った人がいた。

その袋を持つていた人が、祖母を知つてゐると見えて、

「ちよつとの遅れで、バス行つてしまった。その腹立つこと……」

笑つて言う。

つぎのバスは午後一時二十分だ。ここで一時間も待つのは大変だ。

「タケシ、ジージに電話してきてもらうべ」

祖母が言うので、電話をかけた。

「心配してたんだ。いまどこだ」

「スーパーの前のバス停」

「迎えにいぐ。どこにも動くなよ。じゃ」
十分も経たずに祖父は来た。

「ほら、佐藤のばっちゃんも乗せていぐべ」

祖母が言つて一緒にのつた。

「ありがてな。便利だね車は。家の人、車やめてから、どこに行ぐにも困る」とばかりだ」

「あのあど、旦那どうしてる？」

祖父が聞いた。

「ジジ、すっかりしよげでしまつて。このままボケでしまうんでないかと、心配してるんだ」

「ところで、壊れた車どうした」

「孫にやろうとしたけど、直すに巨万円以上もかかると言ふし、そのまま車屋に持つていつてもらったんだ。突き破った車庫もあのままにしておげねから、大工に頼んで直してもらふことにした。物置にでもするべつて言つてる」

佐藤さんは車庫に車をしまふ時、アクセルとブレーキと間違えて、後ろの壁を突き破つて、車の後ろ半分外に出てしまったと言ふ。

「まだ元気だから、車は大丈夫だと思つていたんだけど、あのことで、ジジは『おら、もう車は乗らね』と言つて、免許も役所に返してしまつたんだ。いまでは、他人様に迷惑かげなかつただけよがつたつて言つてる」

「そのあど、元気なんだべさ」

「おがげさんで、いまのどころはね……」
そう言つて、佐藤さんのばあさんは笑つていた。

車庫に車を入れて家に入った。

「佐藤のばあさんの話、身にこたえたな」

祖母が言つた。

「それよりも。バスで買い物に行くの、ゆるぐねべ。バス停まで歩いて、降りてからも歩いて。その膝じゃな」

祖父はそれ以上、佐藤さんの話には触れたくないようで、話題を変えた。

一段落すると、祖父は言い出した。こんな静かな声を聞くのは、久しぶりのような気がする。

「おらが子供のどぎ。小学生から中学のどぎくらいだな。アメリカでは三軒に一軒は自動車を持つてるといふ話聞いて、びっくりしたもんだ。その頃、近所ではどこの家にも、車はながつた。

でもな、近所には米屋だの果物屋だの文房具屋、魚屋、菓子屋、衣料品店だのがあつたから、不便なことはながつた。

そのうちに、車がだんだん出回つてきた。便利だもんだから、一家に一台車を持つてるようになってくると、少し離れたところに大型のスーパーができてきた。そこには何でも売つていて、品物も豊富だった。車があるから、少しくれ遠くにあつても、苦

労しねで行ける。まあ、スーパーに行けば、なんでも揃っちゃうという便利もあつたからな。

それによつて、近所の小さい小売り店は、商売にならなくなつて、店はなくなつて行つた。だれもが「世の中が進歩した。豊かになった」と思つたんだな。

ここに住んでる人も、若いときは不便だと思わなかつた。いま住んでる人は、年寄りばかりになつてみると、足が動かなくなる、車も運転できない。それで、スーパーに買い物に行けなくなる。

人が減つてバスの本数も減つた。年寄りは、バスにも乗り降りも大変だ。情けねことで自分の身に起こつてきて、初めて、こんなこと考えるなんて、情けねこつたな。

この頃のテレビニュースだと、バスの運転手が足りなくて、減便するとか。バス路線を、廃線にするところもあるとが……。

ここには若い人も少なくなつて、住んでゐるのは老人夫婦や、独り暮らしの年寄りばかり。

確かに年寄りが車を運転するのは、危険が多くなるが、車をやめれば生活できないという事情もあるんだ。

ほんとに、不便な世の中になつてしまつて、年寄りから車取つてしまつたら、年寄りは早く死んでしまへつてことだべな。

ある市町村では、年寄りの為に、小型のバスを走らせているところもあるようだけど、ここはまだまだ先のことだべ。

こんなになるまで、なんがやることねがつたもんだべが。

おらはときどき、こんなこと考えるようになったんだ。
タケシ、ジージまぢがつてるのがな――

聞いていて、なんだか、しんみりしてしまつた。

ベッドに入つても、眠れなかつた。祖父の言い方が静かだつたのに、激しく心をえぐられたような気がした。

この家では、祖父が車をやめたらしわ寄せを負うのは祖母だ。買ひ物が一番の難儀だし、暮らしていけないことになる。

わたしが免許のことを父に言つた時は、一喝されたけど……。

あの時は、友達が運転免許があつたら就職に有利と言つてゐたのを聞いて、それならという気持ちになつてゐた。

電話で父に怒鳴られて、しばらく免許のことは考えなかつたが、いまは免許を取つて、大学を卒業するまで、祖父母の役に立ちたいという気持ちが強くなつてゐる。

ここでの暮らしを考えるなら、やつぱり免許を取るしかない。費用はどうする。父には話せない。話したら、「大学をやめろ」と言われるかもしれない。

友達が夜のコンビニで、バイトをしてるやつがいる。彼が言つてるのを、聞いたことがある。

コンビニの深夜のバイトだと、割合時給も高いそうだ。何とか夏休みからでもバイトをやつて、費用を貯めたい。時給千円になると言つてゐた。夜の十一時から、朝の六時までとして、七時間で七千円。免許を取るには、三十万円くらいかかるそうだ。

から、日数で言う、四十日以上かかることになる。休みがあったとしても、二か月バイトをしたら何とかなるかもしれない。

バイトのことは、父母には知られたくない。祖母母は賛成してくれるだろうか。

わたしを大学まで送って行く時のことだ。

「おらの運転は、まだ大丈夫だろう」

祖父に聞かれたけど、すぐに応えられなかった。祖父と父が対立しているの、どう答えても、どっちかに味方するように思っただけだった。これは、考えすぎだろうか。

でも、この間も、車庫に入れる時、運転席の反対側のバンパーを、壁にこすってしまった。大きく潰れはしなかったけど、そこは色が変わっている。

「これぐらいいたしたことネー。あとで塗料買ってきて塗っておくさ」

この頃は、父に言わなくてはならない時が来そうな気がして、その頃、その勇氣はまだない。

話のついでに、ちらっと祖母に耳打ちしたことがある。

「そのうち、自分から車やめると言うべよ。ああ見えても案外、そのどぎ来たら、すっぱりやめるすけ」

こう言ってから、祖母が独り言のように

「やめたら、買い物どうしたらいいが……」

呟いていた。

祖父が車をやめるまでに、できたら運転免許を取りたい。そ

して、祖父に運転のことや車のことなど、いろいろ教えてもらおう。そしたら、祖父も、安心して車をやめられるのではないだろうか。

いつも電話に出るのは祖母だけれど、ひとしきり話をする、決まって「これ、ジージだ」という。祖父は「変わりないと言っておけ」と、出たがらない。それでも、三回に一回は受話器を取っている。いつも「ちゃんとやってるから、心配しなくていい」と、はねつけている。

そんなある日。

大学から帰ったら、祖母が待ってたように、玄関にとび出して来た。

「ジージ、昼飯のあと出て行ったきり、まだ戻らないんだわ」心配そうに言った。

「どこに行っても、いつもは一時間か二時間で帰ってきてだのに。ジージ、タケシになんが言ってたなかったがい」

「いつもと、変わらなかったけど」

「なにがあったのがな。それにしても、遅くなるなら、なるって電話でもしてよこせばいいのに」

外は、もう薄暗くなっている。

用意ができていた夕食を一人で食べた。祖母は、落ち着かないのか、時々窓から外を見ている。

七時ころ、家の外にライトの光と車のエンジン音がして、二人とも外に出た。

「おらもタケシも心配してゐること、わがんねのがい。こんなにおそぐまで」

祖母は怒った。

それには答えず「ほら、土産」と言つて、テーブルの上に紙袋をおいた。袋には「長万部のカニめし」と書いてある。

「なに、こんな高いもの買つてきて」

「車やめる前に、一回見ておごうと思つて、大沼まで行つたんだ。あんまりいい景色なもんだから、森まで足を延ばした。そこまで行つたら、どうせ見納めなら、長万部まで行つてしまえ……。このカニ飯が、その証拠だ。今度バーバもタケシも連れて行つて、どこで温泉にでも入つてくるべし……」

「そんなことで、ごまかされねんだから。さんざん心配させておいで、今度連れて行つてやると言つても、ごまかされねんだから」

祖母は怒っているものの、終りの方は語気はだいぶ和らいている。

「いいべや。みんな寄つて集つて、おらから車も免許も取り上げでしまふんだからな」

こう言つたきり、黙つてしまった。

それから、やんわりと、

「これ、晩飯の代わりに三人で食うべし」

「もう用意できているんだよ。タケシは食べてしまつたんだ」
「そうが、仕方ねーな。そしたら、タケシは夜食にすればいい。おらどは、これ食うべし。タケシも一緒に食うべし。若んだから、これぐらい入るべよ」

祖母は、仕方なさそうに袋からカニ飯を出して、タケシの分まで置いた。

「カニ飯、しばらく食つてねがつたから、うめと思うぞ」
祖父はこう言つて笑つた。確かに、いい味がした。

二階の部屋に戻つて満腹になった体で、ベッドに横になった。祖父が長万部まで行つてしまつたという気持ちが、わかるような気がした。

そして、そろそろ車をやめようという気持ちだが、湧いてきているような気がした。

もしそうだとしたら、早く免許を取つて、祖母の買い物の役に立ちたい。祖母の買い物の心配がなくなる。

前に、費用のことを調べたことがある。免許を取るには、三十万円くらいかかるそうだ。安く上げるには、「速習科」というのがあつて、高校生や大学生は二十日間で、二十万円とか。

コンビニの深夜のバイトだと、一時間千円にはなるらしい。十時から朝の六時までだと、八時間で約八千円。ひと月二十五日働いたら、二十万円になる計算だ。

思惑通りに行くだろうか。やってみなくてはならない。

これを実行するには、誰にも言わずにやるしかない。でも、深

夜のバイトをするには、祖父母に言わないわけにはいかない。

「父には内緒にして」と頼んでおかないと、バレたらアウトだ。

祖母から聞いたのだろう。

祖父が

「タケシ、自動車の免許取りたいんだって。そのために夜なかにバイトやるって。バーバから聞いたけど、ジージが車やめたら、買い物困ると思ってるんだべ。費用は、おら出してやるから、バーバも、なに言われるがわがんねもな。父さん、頭固いから、車やめたら困るってことまで、考えられないんだ。『やめろやめろ』って言うけど。こつそり、自動車学校さ行つて。取つてしまつてから、びつくりさせてやるべ」

祖父の笑顔を見るのは、しばらくぶりだった。

また、父からの電話みたいだ。

「おまえは、この老いぼれから車を取り上げたら、それはいい気分だろ。けどな、おらとバーバは、これからどう生きていけばいいんだ」

やつぱり、電話の相手は父だ。

「父さん、悪気で言ってるわけでねんだから。もう、やめだら」

そばからバーバが口を出したけど、祖父の怒りが収まらない。持つてた湯呑を勢いよくテーブルの上に置くと、お茶がこぼれた。祖母が台所に走つてフキンを持ってきたて拭いてる間、気ま

ずい時間が停まつたままだ。

電話が終わつたみたいだ。

「あいつ、二人で来るって。まあ、言いたいことは、わがつてゐる。なん回も言われでるからな。車やめたら、買い物はどうする。バスだって本数も減つた。歩いて行ぐたつて、遠いし、バーバの足では一日がかりだ」

「リュックサックしよつて、行ぐさ。近所で車やめたところはみんなそうしてるんだ」

祖母が、口をはさんだ。

「大きな事故起こさないうちにやめた方がいいと思うけどな。起きてしまつたら、大変なことになるぞ」

タケシは危うく「おれが免許取ればいい」と言いそうになつた。父に知れたら、火に油を注ぐようなものだろう。それに問題は祖父から、わたしに移つてきて、父はますますカッカしてしまふに違いない。

免許をとつていれば、これから大学卒業するまで二年はあるから、祖父母の役にも立つし、就職だつて有利になるだろうし、いい解決方法だと思ふけどな。

早いもので秋に入つていた。

「出張で函館行く」と電話が来た。

きて最初の晩は、近くに住んでゐる伯母も来るという。

「今度は、みんなでおらの車のごと、決着つける気だんだべ」
祖父は苦々しい顔つきになっている。

祖父の車のことも言わず、夕食はしばらくぶりに賑やかだった。

夕食が終わると、

「みんな揃って、ジージ・バーバになんがくれるのがい。それなら歓迎するけどな。みんなで、おらがら、車取り上げる魂胆で集まったんだべ」

父母は、顔を見合わせている。

「だったら、その前におらがら先きに言わせてもらおう。その方が、面倒なことも起きねべと思つてな。おらは、近々車をやめることにした」

父母も伯母も顔を見合わせている。

「……と言つても、こゝひと月、ふた月ぐらいは続ける。それも、タケシが車の運転にすっかり慣れるまでな……」

父母も伯母も目を丸くしている。とりわけ父の顔は、目どころか、全身で怒つてるように見える。

「それって、どういうことになってんだ。タケシが運転免許取つたとしても言うのが」

「そういうことだ」

祖母は、にやにやしてる。

「そんなの俺、聞いてねーど。この前、電話で駄目だつて怒つたら、タケシ！」

「まあ、おらの話聞けつて、タケシはおめだちに内緒で、夜のコンビニでバイトして金貯めで、免許取ろうとしたんだ。理由はな、『この年寄りの役に立ちたい』と言つて。『それなら、おらが金出してやる』つて言つても、ながなが、うんと言わねで困つただけだな……」

少し間をおいて、

「あれは、バイト始めて五日くらいたったころ、『やめねば、父さんに知らせる』と言つたんだ。『そしたら、言うこと聞くから、父さんには、絶対言わないでくれ』と、約束までさせられた。それでやつてだバイトやめて、自動車学校さ行つたというわけ。大学は一日も休んでねど……と、そういうわけだ。これでも、ながんが言うことあるが」

だれも何も言わない。祖母はエプロンで涙を拭いている。

「おめだちは、おらの車を取り上げることばかりで、タケシの言うようなこと、一言でも言つてくれだが。おれは腹が立つて、年甲斐もなく、意地を張つてしまけどな……つというわけだ」
祖父はこう言つて笑つた。

父も伯母も黙つて、ビールのコップを前に、テレビの方に顔を向けている。母と祖母は台所で後始末をしている。

しばらくして、伯母は帰つて行つた。

「明日、駅まで父さんと母さんば、タケシの運転で送つてやれ。そしたら、父さんも安心するべよ」

父母は家で二泊した。

昼の特急で札幌に帰る。

車に乗っても、父母はなにも言わない。

「すっかり運転なれたみたいだね」

母が、沈黙を破った。

「ベテランのジージに仕込まれてるから」

駅が近くなると、

「まだ、子どもだと思っていたら、タケシも大人になったものだな」

運転免許のことを、知らせなかったから、怒っているとかかり思っていた、父の声は笑っていた。

車から降りるとき、母が

「しばらくジージもバーバも、タケシ頼んだからね」

言いおいてから、駅舎に向かって行った。後ろ姿が見えなくなつてから、アクセルを踏み込んだ。

終わり

ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケーヴィチの離任 山本 大

船着き場のある海岸から実行寺へとつづく、ぬかるんだ坂の途中で、ちらちらと大粒の雪が舞った。ヨシフは立ち止まり、前面にそびえる山と、その後方の空合いを眺めた。山頂はまだ厚い雪に覆われ、中腹の辺りは溶け残った雪が、田毎の月のように白いまだら模様を描いている。

「たいした降らねえから、大丈夫ですよ」飯屋の店先で一服している顔馴染みの店員がヨシフに愛想よく声を掛けた。重たげな灰色の雪雲はどこにも見当たらず、明るいままの空が煙管を口の端に咥えた男の意見を裏付けた。ヨシフは流暢な日本語で、ひと言ふた言交わすと歩みを再開し、男はまた休憩に戻った。

寝不足と空腹のせいで不貞腐れたような重い身体をどうにか坂の上まで運んだ。感心するほど手入れの行き届いた境内に着くと、ヨシフは住職に温かく出迎えられ、ほっと息をついた。

「そろそろお見えになる時分と思っていました」

ひと足先に挨拶に訪れていた義息のウラジーミルが、父の来訪の旨を言い置いていたようだ。

一八八三年、合衆国ペリーの浦賀来航に端を発する日本の開

国にともない、ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケーヴィチは駐日ロシア領事として箱館に赴任した。ヨシフの妻エリザヴェータとその連れ子ウラジーミルを含む十数人での来箱だったが、領事館や居宅の用意はおろか、領事館地区さえ定まっておらず、箱館奉行との煩雑な交渉が着任したヨシフの最初の仕事だった。その際、当面の間の仮寓となったのがこの実行寺だった。

それから足かけ七年、開港を許された五か国のうち、江戸ではなく、ここ箱館に領事館を置いた唯一の国、ロシア帝国の代表としてこの町でヨシフは働き、そして今日、ロシアへの帰途に就く。

ヨシフ一行がこの寺の一隅で止宿した期間は半年にも満たない。それでも、互いに――主にヨシフ側が多く――不満を内包していたため、一刻も早く離れたい気持ちに先に立ったが、いまではそれも笑い話、住職を含む数人の日本人とは、同国人の誰よりも親しく話せるようになっていた。

「職員のみなさんに伝えてください、いつでも歓迎します」といつぞやの申し出を住職は蒸し返した。

「せつかくのお心遣いですが、遠慮しますよ」とヨシフが答へ、ふたりは声を揃えて笑った。茶を運んできた寺の小僧が不思議そうな顔をした。それはヨシフと住職の間で通じる符丁だった。

あちこちですきま風の吹き込む寺院のなかでも、比較的暖かく、一種の応接間になっている部屋で茶を馳走になりながら、常のごとく、寛いだ調子でふたりは話をした。茶は熱く旨く、湯たんぽを抱いたような温もりがヨシフのすきつ腹に広がった。

住職には、帰国の理由を包み隠さず打ち明けていた。

「町の人たちは、またすぐ戻ってくると思つていろいろですが」自嘲気味にヨシフは言つた。任期中、箱館を留守にして江戸へ出張することは度々あったが今回は違う。後任の領事もすでに着任しており、再び箱館に戻ることはないだろう。だが、ヨシフは町人の誤解を敢えて訂正しなかった。

領事の任にほとほと嫌気が差していたヨシフは、昨年のように離任願を本国に發送していた。素っ気ない通達事項のような承認の返事が届くまで、それから数か月を要した。隣接する英国領事館からの類焼で、二階建ての領事の家を含む数棟が焼け落ちたのは、その矢先の出来事だった。底冷えのする北国の冬、途方に暮れるヨシフたちに、住職はかつての止宿所の提供を申し出てくれた。だが、不幸中の幸いで全焼とはならず、応急措置で間に合わせることができた。陰気な読経とネズミの襲来に四六時中悩まされるくらいなら、煤けた臭いのする粗末な仮設住

宅のほうがマシだというのが、領事館スタッフの一致した意見だった。それを伝えるのは当然、領事館の代表たるヨシフが担った。気の重い仕事だった。

だが、せつかくの親切を辞退するために寺を訪れたときの、どうにも切り出しにくくそうにしているヨシフの表情をひと目見て、住職はすべてを察し、鷹揚に笑った。そして、ヨシフが氣に病むことのないように罪のない諧謔を弄した。ヨシフは、あらためて住職の心の広さに感じ入り、その茶目つ氣に親しみを覚えるとともに、これしきのことでもたつくような自分に、よくも一国の領事など務まったものだ、いまさらながら呆れたものだ。

「寂しくなりますね」住職はしみじみ言つた。

「本当に」茶を啜つて、ヨシフは目を伏せた。はじめてこの寺の境内地に足を踏み入れた頃よりも、眼窩の影が濃いことに住職は気づいていた。

「誰にとつても難事だったのですから、ご自分を恥じてはいけませんよ」ヨシフの心中を慮つて住職はそう言つた。それが巧言でないことはヨシフにもわかつていたが、立ち込めるイワシ油の臭気のように、後ろめたさはまとわりつた。

日露修好通商条約を締結したプチャーチン提督は、これから国交を開く日本人に対して、軍事関連のみならず、天文学や地理や医学、ロシア語などの技術供与を通して、両国の融和を図るべきと提言、すでにプチャーチン使節の長崎、下田来航時に通訳

として随行し、外交の現場に接していたヨシフに白羽の矢が立った。

ロシア帝国と日本の国交は、あくまで交易の拡大と強化が本懐であり、その妨げとなるような不審の念、たとえば日本の内政干渉への下心などは微塵もないと確信させること。そのために友好的な信頼関係を築き、あらぬ誤解を与えることがないよう、くれぐれも用心すべし。それが交易開始に伴う日常的な雑務以上にヨシフに期待されていた任務だった。その訓令を心に掛けて懸命に働いた。

突風が薄い障子の戸を叩いた。気まぐれのように風向きを変える風に乗せられて、大粒の雪が舞い踊っている。いまごろ、町人たちは雪の話をしていることだろう、とヨシフは思った。じつさい、箱館のひとたちはよく雪を話題にする、それもどこかしら嬉しそうに。夜半のうちに膝まで埋まりそうな大雪が降ると、やんや、と独特の悪態をつきながら、朝から雪はねに精を出す。そして、ちょうどいまのように春先に雪が降れば、根雪にはなんねえべ、と期待を込めて言い合うのだ。ヨシフはそんな町人の表情と声に素朴な温かみを感じた。いつしか、ヨシフ自身も口にするようになっていた。

友好的な信頼関係を築くべし、という外交方針。ヨシフはその方針をよく遵守した。ありがたいことに、それは難しいことではなかった。

図らずも、領事館の建設はその手始めになった。建造の過程

で、ひとの輪の広がりやをヨシフは感じた。多分に日本家屋の要素を含む、独特な建築構造はその証だった。

着任したその年の暮れには、ロシア式のクリスマス「ヨルカ祭」を役人も町人も一緒に祝った。誰もが心から楽しんだ。

誰が言い出したのか、ヨシフの風貌に由来してつけられた「白髪領事」というあだ名も好意的に受け取ることができた。

最前、茶を運んでくれた小僧とも小さな交流があったことを思い出した。まだこの寺に止宿していた頃、彼に言葉を教わったのだ。彼はもう覚えてはいないだろう、ヨシフもいまのままで忘れていた。

あどけない坊主頭の少年は、急須から湯呑に茶を注ぎ、変声期特有の低い声で、「チャ」と言うと、ヨシフの顔を覗いた。先を促すように、ヨシフは小さく頷いた。少年は淹れたての熱い湯呑に指を入れ、すぐに引つめると、「アツイチャ」と言い、それから、すっかり冷めた別の茶を指さし、「ツメタイチャ」と言った。そして、きよろきよろしながら、手を広げてみせて、「ツメタイ」と言った。お手上げのポーズに似ていたが、じつさい、そんな気持ちだったのだろう。ヨシフは、合点した証拠に大きく頷いてみせ、「ツメタイ」と言いながら大きな手のひらで自分の二の腕をさすり、ぶるぶると震えてみせた。少年も嬉しそうに真似した。概念を指さすのは難しい。その難しさにはじめて直面した人間が誰しも見せる困惑からの安堵。言葉を教わる

とき、いつも出会うこの無防備な笑顔がヨシフは好きだった。「ツメタイ」は「サムイ」と同様に、温度そのものを表す名詞であり、また形容詞でもある、ヨシフは紙にそう記して、満足した。

だが、激しく揺れ動く政情の只中において、学術的な交流で絆を結ぼうという試みは、硬軟織り交ぜては、するりとこの国の中枢に食い込んだ諸国、とりわけ英国の外交戦略の前では、いささか牧歌的だった。加えて、海兵並びに海軍省の嫌がらせと横暴がヨシフの足を引っ張った。

プチャーチンの考えに依拠するならば、東洋の言語や文化に造詣が深く、ましてや世界初の日露辞書である『和魯通言比考』を、橋耕斎の協力のもと編纂し、ロシア帝国アカデミーから金メダルを授与されたヨシフにおいて他に適任者などいなかった。だが、文官であるヨシフが箱館駐在ロシア領事選ばれたのが、海軍省には面白くなかった。結果的に、事あるごとに外務省を蔑ろにして、独自の判断で外交の舵を取りたがった。きわめつけが、対馬における、あの事件だろう。

おかげでロシアは、主権と安全を脅かす外敵として日本人の目に映ってしまった。もし、ヨシフが海軍省所属ならば、イギリスの挑発に乗るのは悪手だという進言も聞き入れられたかもしれない。

「両国の懸け橋たらんと来箱したもの、ふたを開けてみれば、海軍との間で板挟みでした」

ヨシフのアイロニカルな言葉を、住職はやりわりとたしなめた。そのとき住職が口にした言葉にヨシフはふと当惑した。

「どうしました？ どこか具合でも？」 気もそぞろな様子のヨシフを住職は心配した。

「いえ、なんでもありません。どうも、思い出が胸につかえたようです」ヨシフは正気づくくと、笑いにまぎらせた。

噂をすれば影、「ツメタイ」坊主が盆に茶を三つ載せて現れ、その後ろから浦川要作が顔を見せた。領事館や聖堂の建設の際、たいそう骨を折ってくれた請負師の男だ。気風のいい男で、仮宿舎の建設にも快く手を貸してくれた。

「やあ、コンシル、探したでや」彼にも息子が先触れを務めたのかとヨシフは思ったが、そうではなかったようだ。ヨシフに会うために、方々探しまわったようだ。

「坊やは？」浦川は息子を『坊や』と呼ぶ。ウラジーミルの愛称である『ヴォーヴァ』の発音に手こずった末の、妥協の産物だった。

「友だちにさよならをしに行ってるよ」

今朝、ウラジーミルはそう言って、船を降りていた。本当は自分を避けているのだと、ヨシフは察していた。妻の死後、義息との関係はぎくしゃくしていた。無理からぬことだとヨシフは理解していた。幼くして実父を亡くし、見も知らぬ男が新たな父親となり、その男の仕事で言葉も通じない極東の島国で暮らすことになり、新しい環境によりやく慣れた矢先、母を失い、いま

また故郷に帰るといふのだ。大人の身勝手な都合のせいで、多感な時期に目まぐるしい変化の波に晒されてきた。

それから浦川を交えて、懐旧談が続いた。

「コンシルがいなくなったら、ハリスト教会はどうなるのさ？」
浦川は名残を惜しんで言った。

「大丈夫、ニコライ司祭がいれば」そう答へながらも、ヨシフは複雑な心境だった。

※

ヨシフは実行寺を辞した。仕事へ戻る浦川と境内の入り口まで歩いた。なんも心配いらねっから、と浦川は請け合つた。それはもちろん、単に降雪の話なのだが、ヨシフは温かみのあるそのイントネーションに慰められた。

境内を出ると、ヨシフは真つすぐ領事館へは向かわず、大きな台場を横目に見ながら早い勾配を注意深く下つた。雪はほとんど止んでいた。身を切る冬は少しずつ、しかし確実に春の陽気に押しやられ、風は温みと汚泥の匂いを帯びて、屋根に石を積む、骨ばつた家々の建ち並ぶ通りを渡る。ヨシフは船着き場の辺りを眺め、不揃いな大きさの釘を撒き散らかしたような群れの中から、乗船する商船を目ざとく見つけた。船はまだ静かだった。

ここ数週間、ヨシフは停泊している露米会社の商船モノマー

フの客室で寝起きしていた。火災による居宅の焼失と、後任領事の到着がその理由だった。

ツイウイリコフ九等文官への引き継ぎのため、家移りして数日は船から領事館に通つた。彼はそつがなく、スムーズに任務の要領を呑み込んだ。ツイウイリコフは、当館における現在の窮状をヨシフひとりの監督不行き届きと考えてはいなかったが、それでも原因のうち少なくとも一部分は、日本の主権に対して、あるいは欧米諸外国に対して散見されるヨシフの押しの弱さが我が国の外務省にも発揮された結果と見做していた。

「本国への支出額報告書はこれでよろしいでしょうか？」慇懃に尋ねるツイウイリコフの顔は、申し分ないとすでに断定しているようだった。当てこすりだろうかと思つたが、ツイウイリコフは過労を理由に帰国するヨシフに関心はなく、ただ自分の有能を誇示し、認めさせたいだけなのだと気づいた。ヨシフはその承認欲求を無視し、用事があれば遠慮なく声を掛けてくれたまえ、と寛容に言つて、翌週には領事館への通いを辞めた。以降、ツイウイリコフからの呼び出しは一度もなく、もはや領事館地区に居場所はないのだとヨシフは覺つた。

帰還までの時間をヨシフは無為に過ごした。窓を開け、新鮮な空気を入れ替へるような、気持ちの切り替え方を見つけられない自分をぼんやりと意識した。船の客室は快適とはいえず、停泊中でも感じられる横揺れには辟易させられた。船が海軍省のものでないのがせめてもの救いだった。商船の乗組員たちは、

ヨシフがここに住みつくに至った経緯を詳しく知らず、また尋ねようともしない。当てこすりや嫌味よりかは幾分マシな無関心にヨシフは大半の時間、晒された。なめした皮のように固い顔の皮膚を、潮風が撫でるように。

あてがわれた船室を、現在のヨシフの脆いアイデンティティを護るバリケードと見做すことは困難だった。そうするには、よすがとなるものが少なすぎた。ヨシフが写真術を伝授し、いまは町はずれで写真場を営む足袋職人の男に習作として撮らせたいくつかの写真も、草の根を分けて採した植物の標本も、江戸へ出張した折、買い求めた古訓古事記、古事記、旧事記、日本書紀、近郷図、袖玉武鑑、武蔵図、農家益、日本山海名産図絵、農家業事、地名便覧といった稀覯本の数々も、すべて焼失していた。むしろ、彼の痕跡はこの港町のそこかしこに、星座を縫う星々のように点在していた。

縦横に区画された通りはあみだくじのようだった。ヨシフはライスクラッカーの色をした犬に吠えたてられながら、足の赴くまま歩いた。だが、恣意的に選んでいるつもりはこの経路が、自らの臭跡をたどる小さな旅だとはつきり気づいたのは、海岸でウミネコとカラスが一匹の魚をめぐる喧嘩しているのを見たときだった。やわらかい土を踏みつけて歩きながら、ヨシフは領事として着任するために、この海岸に入港した日のことを思い返していた。

一八五八年、晩秋の澄んだ空の下、白い砂浜には煮詰まった

対局のように、ウミネコとカラスの一群が距離を保ちながらじつとうづくまっていた。

中国の文化にも造詣が深いヨシフは、囲碁の手ほどきを受けたことがあった。囲碁はひとつずつ石が増えていく、それまでもなかった場所で、丁寧な線を引いていく、交互に重なる言葉と行動で。それは国と国の交流そのものだと、ヨシフは感じていた。

日本は、諸外国を相手に慣れないゲームで多面指しをさせられていた。どこか一国だけに勝つてはいけない、という厄介なハンデまで背負いながら。ロシアが差し出しているのはチェスボードではなく、碁盤だと、それが我が皇帝陛下のご意思なのだと信じさせられるかどうか、成否はそこに掛かっている、と砂上の盤面を眺めてヨシフは思った。

「あそこから黒が巻き返すのは難儀だな」ナジモフ海軍大尉は不機嫌にそう吐き捨てた。彼はゴシケーヴィイチから離れて甲板に立ち、むつりした顔で駒のポイントを数えていた。

やがて、命令する怒声が聞こえ、砲術手がそれに答えた。軍艦から居丈高な礼砲が続けざまに発射されると、癩癪持ちのチャンピオンがひっくり返したように、白と黒の駒は散らばった。

等級も年齢も上のヨシフに対して、あからさまではないにしても、軽蔑の色を覗かせるナジモフ、ヨシフ一行を箱館まで送り届けるという任務を放棄して勝手に帰還した軍艦アメリカ号のムラヴィヨウフ総督、延いては海軍省全体から発せられる反

感にヨシフは不安を覚えていた。残念ながら、その不安は的中してしまつた。

一八六一年、対馬事件。約半年の間、ロシア軍艦ボサードニク号が、船体修理のためという口実で対馬に居座つた。抵抗した地元住民との間で衝突があり、日本人ふたりの犠牲者を出した。

対馬の占拠は、ほとんど海軍の独断専行的に行われた。ロシアの外務省はこの件に関して口出しを避けた。そして、外務大臣はヨシフを巻き込まないようにとの配慮から彼を蚊帳の外に置いた。おかげで初動が遅れた。箱館奉行村垣範正から抗議を受けたヨシフが、幕府の抗議と江戸における外交使節団の不評と反発を伝え、提督リハチヨフがようやく対馬からの撤退を決定したのは六月末のことだつた。

そもそものきっかけは英国だつた。英国軍艦アクティオン号が対馬に不愉快なちよっかいを出し、すっかり浮足立つたロシアの海軍省が対馬に居座つてでも占有すべきだと主張し、強行した。それは明らかに悪手だつた。誘ひ込まれて墓穴を掘つた。この一件で翻弄されたのは日本ばかりではないと、江戸の一部の者は気づいただろう。海軍の頑なさは、余裕のなさの表れでもあつた。

損失は計り知れない。それまでも、海軍の荒くれ者が酒に酔い、町中で傍若無人に振る舞うたびにヨシフは尻拭いしてきた。酔つ払いの乱痴気など港町では特に珍しくもない。だが、事が

外国人絡みとなると、やはり鎖国を解くべきではなかった、という雰囲気はあつという間に醸成されてしまう。小さな暴力沙汰でさえデリケートなのだ。まして、対馬の件はそれらとは比べ物にならない。

失つた信頼を回復するのは生易しいことではない。ヨシフは奔走した。リハチヨフ提督が撤退を決意する少し前、箱館で大規模な火事があつた際には、停泊中の海兵を動員して消火活動に当たらせた。クリッパー艦の乗組員の半数以上が、手に手に斧やバール、果ては甲板用のポンプまで携えて、積極的に参加した。だが、幕府をも巻き込んだ大事件の前では、江戸から遠く離れた地での慈善活動も、それこそ焼け石に水だつた。

強引に陣地を奪うつもりも、ましてや彼らのキングを奪うつもりもないと、ヨシフは友好的な仕事をつづけようとした。だが、いまや勤皇派も佐幕派もキングを蔑ろにしているという点では大差ない。そもそも、自分はゲームの指し手なのだろうか？　そういう虚しさを感じはじめたのは、この頃からだつた。

ヨシフは再び、船に目を転じた。うんざりするほど実用一辺倒の商船。そこには、間に合わせとはいへ、正十字の軍艦旗をはためかせ来箱したときの物々しさは微塵もなかった。

※

聖堂の白い鐘塔が見えてきた。その下側から、急ぎ足で坂を

下る人影があつた。黒い服に身を包んだ、遠目からも大柄とわかるその男はニコライ司祭だつた。司祭は左手から領事館のほうへ歩いてくるヨシフには気づかず、一目散に海のほうへと向かつた。

正門の石段を登ると、ヨシフは領事館の端の木陰に設えた床几に腰かけて、息を整えた。ひと心地つくと、ヨシフは来た道を目でたどり、汀線がカーブを描く、まぶしい海岸に目を細めた。離れていく感傷からそう思うのではない、この町が好きだつたと、あらためて思った。

さつきからぼんやり眺めている場所がロシアホテルだと気づき、空腹感がぶり返した。寝泊まりしている商船の船員たちは、もっぱら船着き場にほど近いホテルで食事をする。誰も好き好んで船上で食事などしないものだ。ヨシフは今朝、朝食をとらず陸に上がった。寝不足も空腹も船酔いに良くない、だが、食べるならもつと早く腹に入れておくべきだつた。

やがて、外套も身につけず、黒い司祭平服を着ただけのニコライが坂の下に見えた。頭を振って、やわらかく縮れた長髪を払いのけた拍子にヨシフと目が合った。ニコライはぬかるみを避け、固く歩きやすい道を拾いながら上ってくる。スカートのように長い裾を風に翻す足取りは自信に満ちている。その姿にヨシフは現実感を失つた。

あの日から四年、いろいろなことが様変わりした。日本も、箱館の町も、ヨシフも。だがニコライ司祭は初対面のあの日と同

じようにこの坂を登っている、澁瀬と。一八六一年六月、ヨシフはニコライを乗せた船が波止場に到着するのをこの場所から見ていた。そのときのヨシフは、対馬事件解決のために忙殺されていて、ニコライを出迎える余裕もなかった。

サンクトペテルブルクから箱館までの過酷な旅。気の遠くなるほど広大なシベリアを横断するという難業を、ニコライはタシケントと呼ばれる直列二頭立ての馬車で陸路を行き、バイカル湖を船で渡り、アムール川を小舟で下り、やつてのけたのだ。

随行する人数も道程も違うが、ヨシフとてサンクトペテルブルクから苦勞してはるばるやってきた。だが、ニコライの旅をどこか冒険譚たらしめているのは、ひとえに、彼の存在感そのものによると、ヨシフは思っていた。ヨシフも小柄ではないが、この男の威容には及ばない。六尺五寸もある偉丈夫で、長い髪と、立派な髭を蓄えている。意志の強そうな濃い眉の相貌は才気に溢れ、ハンサムだ。ニコライは馬車を駆り、シベリアを横断した。もちろん、御者を雇ったが、仮に自ら手綱を取り、馬を御して疾駆したのだと言われても、人々は信じただろう。

聖堂を出ていったときの、ニコライ司祭の慌ただしい足どりで、自分がすぐに出発したものと早合点したのだ、とヨシフは直感していた。あのとき声を掛けていれば、聞こえたに違いない。だが、できなかった。だからいま、視線を捉えたことを確信して、微笑むニコライ司祭の柔和な顔を見て、疼くような気まぐさを覚えないわけにはいかなかった。

司祭は気を悪くしている様子もなく、行き違いが解消されたことに安堵する以外の気持ちは持っていないようだった。

「奥様に会いにいらっしやったのですね」ともに着箱したヨシフの妻は、苦労がたたたり、前年に亡くなっていた。その亡骸はいま、聖堂のそばで静かに眠っている。

「あとのことは任せてください」きまり悪げに笑うヨシフの代わりに、ニコライは言葉を継ぐと、領地内の一番高いところにある聖堂を仰いだ。ヨシフは東側にある仮宿舎のほうを見やうった。

「頃合いでしたね」ヨシフの視線を追ったニコライが軽口を叩いた。

なおもヨシフは口籠り、上手くないなすことができなかった。

そして、二十歳以上若いニコライ司祭が自分に下しているであろう人物評価をヨシフは意識した。不愉快な性格ではないが、どこか他人を遠ざけたがる複雑な男。旅の安全を願う祈禱は昨晚のうち済んでいたとはいえ、顔も見せずに出立すると思われることが、それを端的に物語っており、司祭がヨシフを箱館における父親と見做していないのは明らかだった。じつさい、ヨシフがニコライに対し、年配らしい激励や助言を与えることはなかった。無能な輩に多くの時間を費やさざるを得ず、有能なニコライを氣遣うのは、つい後回しになった。その結果、仕事を離れた現在の自分がニコライにどう振る舞うべきか、ヨシフはわからなかった。

「すまない」ようやくそれだけ言って、ヨシフは目を伏せた。

「六年でしたか？　ほかの国のどの領事よりも長いのですから」励ますように司祭は微笑んだ。ロシアと同時に国交を開いた他国の領事のみならず、ロシア領事館の関係者も、この数年の間に次々にその顔ぶれを変えていた。かく言うニコライ・カサーキンも、三代目の修道司祭なのだ。

「ありがとう」そして会話が途切れた。

町は素朴で野趣に溢れ、カエデやイトスギよりも高い建物は見当たらず、静かで、だからそこに佇むふたりの男は、気まずいほどむき出しになっていた。

「宣教のほうは捗っているか？」そう訊ねる自分の声が、ヨシフにはいかにもおきなりに聞こえた。

「まだまだ、ですね。でも、これからですから」

「これから、か。あなたの胆力がうらやましい。わたしには真似できそうもないな」

ヨシフは再び、きな臭い火事の跡に目を向けた。そうやって、この理念に燃える若い男の視線を避けた。

焼失した居宅再建の予算は本国の外務省アジア局に申請中で、その返答はまだ届いていない。早ければ年内には届くはずだ。よもや、受理されないということはあるまいが、元通りに再建するために必要十分な予算が割られるかは疑わしい。赴任当初の熱量を失っているのは、ヨシフばかりではないのだ。だが、ニコライ司祭はこの国の人々に期待している。どれほどの障害が

待ち受けようとも。自らが信ずるものの力を信じている。その信念と活力が羨ましくもあり、また少し疎ましくもあった。

「残念だが、この国に我々の宗教は馴染まないのではないだろうか。あくまで個人的な意見だが」我知らず、そう口走った。

「なぜ、そうお思いですか？」ニコライ司祭は微笑みを浮かべた。だが、忍耐強く引き結んだその唇からは、同国人であり、神学校で学んだ教養ある男、しかも異国の地でともに職責を果たそうと努めた、いわば戦友の口から聞かされたことにシヨックを受けた様子が窺われた。

「曖昧さを好む日本人にとって、唯一絶対の存在というのは受け入れ難いだろう」諸外国の間人は誰もが、ふたりの皇帝が存在するこの国の君主制に首をかしげる。

「わたしは排斥を恐れません」

ヨシフは少し考えて答えた。「トヨトミの時代のように？ それはないでしょう」

「なぜですか？」

「神が外国人だから」

意趣返しのもりだろうか？ ニコライ司祭は、ヨシフが冗談を言ったのか測りかね、訝しげな顔をした。

「一方で、いまの日本人は西洋に憧れを抱いてもいる。未知の文化に刺激され、ずっと抑圧されていた向学心が堰を切っている、そこかしこで、銜いもなく」

言葉や風習を理解できないとき、多くの日本人は恥じ入り、

素直に学ぼうとする。その謙虚さと勤勉さゆえに、我々が現れるずっと前から、我々を受け入れる用意はできていた。ヨシフは当初、そう考えていた。履き古した下駄の鼻緒が緩むように、揺さぶられた日本は解けつつあった。そこに他国がつけ入る隙があった。

「そして、国の上層部は好奇心よりもっと切実な事情で、諸外国に学ぶ必要性を感じている」

ヨシフはこの国の二本差しの役人たちと、ときに親しく、ときに反目しながら付き合ううち、彼らの本質はじつのところ商人ではないかと思うことがあった。なればこそ、武士道精神を尊ぶのだと。数百年間、彼らを律してきた信義を彼ら自身も持て余しており、手放す契機を与えさえすれば、表向きの態度はどうあれ、最後にはあつさり手放すのでは、と感じていた。

だが、履き替えたいと望む真新しい靴は、ロシア製ではないだろう。

「であれば、なおさらのこと、正しい教えが必要でしょう」ヨシフの想念を破るように、ニコライは笑った。「まだまだ、これから、です」

「そうかもしれない」自説に固持する気力が湧いてこなかった。不意に倦怠の波が押し寄せ、ヨシフは窪んだ眼窩を掌底でゴシゴシこすった。「本国にはこれ以上、箱館に領事を置く意味は薄いと報告したが、余地はまだあったのかもしれない。結局、わたしが帰りたいただけなんだ」

ふと、ヨシフの脳裏にある男の顔が思い浮かんだ。

「新島は無事にアメリカへ着いただろうか」ニコライが言った。

「わたしもいま、同じことを思っていたよ」ヨシフは笑った。

箱館に諸術調所を開いた蘭学者武田斐三郎のもとで学ぶため、新島襄が江戸からやってきたのは、昨年のおちようどいま頃のことだった。結局、彼は諸術調所には入らず、古典の教授を探していたニコライに古事記などを教え、ニコライは新島に聖書の手ほどきをしながら、数週間、ここで居候した。

ある日、新島はアメリカへ渡る夢を打ち明けた、無論、国禁である。だが、彼の熱意に心を打たれ、神明社の宮司である澤邊琢磨、造船所の次男坊の卯之吉の助けを借り、夜陰に乗じて遂行した。密航という性質上、表だって語ることは憚られるが、あれもひとつのロシアと日本の共同作業といえる、ひとつの結実なのだ。

だが、振り返ってみれば、このミッシェンでヨシフが演じた役割は、せいぜいが領事館内での起居を認めたことと、新島のポートルートを撮ったことくらいだった。

「わたしの最大の功績は、ワシーリ司祭の後任としてあなたが派遣されることになった依頼文書を本国に宛てて書いたことかもしれない」

いまや、求心力の中心はニコライ司祭なのだと気づいていた。それは、浦川要作の無意識の言い間違いにも表れていた。

ニコライが、彼持ち前の陰日向のない実直さでヨシフの言葉を打ち消した。

ニコライの言葉に刺激されて、ヨシフの脳裏に再び、ある男の顔が浮かんだ。新島襄ではなく、ヨシフとともに『和露通言比考』の編纂に携わった橘耕斎の顔だった。脈略のないその連想は、好奇心や忍耐力と並んで、研究者の資質を構成する重要な要素、すなわち、インスピレーションだった。

ウラジミールが戻ってきた。友だちも一緒だった。町の少年たちは、無言で向かい合う大人の姿に気づくと、ひよいと頭を下げて挨拶した。ニコライは軽く頷き返したが、ヨシフは猛烈な痒みを覚えながらも、痒いところが探し当てられず、もどかしさを感じてするような顔をしていた。少年たちはケラケラ笑い、ひとしきり互いに小突き合ってから、ウラジミールを残して駆けていった。だが、しばらく行った八幡宮の辺りで立ち止まり、振り返ると「またね」と言って大きく手を振った。ウラジミールも同じようにした。すっかり仲間として認められた感のあるウラジミールだが、初対面るとき、悪童たちはウラジミールをからかった。

箱館の町に来て数年たった、まだ肌寒い初夏のこと。ウラジミール少年は領事館地区の庭でモンシロチョウを追いかけて遊んでいた。近所の悪童どもがそのさまを見て、大げさに揶揄した。外国人はいま以上に珍しい存在だった。彼らの哄笑に肩を震わせるウラジミールをニコライはかばい、少年たちを叱って

追い払った。そして、親愛の籠った表情でウラジミルの細い肩に手を置いた。だが、ウラジミルはその手を振り払うと、拾い上げた木の枝で蝶を打ちつけた。今朝の箱館の町を舞った雪片のように、それははかなく土に落ちた。

その夜、少年は煩悶しながら眠れない一夜を過ごし、屈辱的な現実の場面と、それを打ち破る戲画的な場面を繰り返す脳内で再生しつづけた。翌朝、顔を合わせた義息の目の下には青黒いクマがあり、血色の悪い顔色と相まって、うつむき加減の表情に危うい陰影を付け加えていた。そして、澤邊琢磨に剣術を習いたいとヨシフに告げたのだ。澤邊は武士の身分を捨て、宮司になった男だった。

船着き場まで一緒に、と言い張るニコライ司祭を押しとどめると、ヨシフはウラジミルを伴って領地の正面の石段を下りた。幅広の正門から左に折れて、八幡宮と接する下り坂に至ると、肩越しにニコライの姿が目に入った。司祭は正門の端にある石壁の際に立っていた。ヨシフは歩みを止めずに過ぎようとしたが、義息が気を利かせ、ヨシフの袖を引いた。石壁の際に立つ司祭は、切り立つ崖の上から睥睨する黒い獅子のようだった。ニコライ司祭には仕事があった、それもとくさんの有意義な仕事だ。ニコライはふたりに向けて、額から胸へ、そして左肩から右肩へと、その大きな手を動かして十字を切った。ヨシフは軽く頷ぎ、白い髭に隠れた口の端を緩めた。忙しい身にとって、時間を割くことが敬意の表れなのだと、若い獅子の姿は物

語っていた。ニコライに対する引け目の正体はそれだと、ヨシフはずっと前から気づいていた。我々は皆、為すべき仕事を携えてここにいる。こんな異郷の地で、ほかに何があるのか。それがすべてだった。年齢も階級も実績さえも、いまのヨシフを鎧ってはくれない。

船は出帆の準備をすっかり整え、あとはヨシフとウラジミルを待つばかりの状態だった。露骨な苛立ちを帯びた船長の視線に気まずさを覚えながら乗船すると、ヨシフとウラジミルは並んで船尾の甲板に立った。魚を巡る戦いはとくに決着し難く、鳥たちの姿は見当たらなかった。

「忘れ物はないかい？」ひとりの船員がヨシフに尋ねた。年かきその船員は、毛むくじやらの胸毛にも白いものが混じり、波打つ髪と深く刻まれた額の皺は、船員というよりも古代の哲学者のような風貌だった。

荷積みはとくに済んでいた。たいした荷物はなかった。来箱の際は、必要最低限の物だけを携えての移動——聖具などの積載は諦め、数か月遅れで到着した、老齢のワシリー・マホフ司祭に運んでもらった——にもかかわらず、かなりの大荷物という印象だったが、帰途は心細いほど身軽だ。だが、ヨシフは即答を避けた。

海上の哲学者は、日焼けした肌に囲まれた色の薄い瞳でじつと見つめ、ヨシフの返事を待っていた。ヨシフは心の隅々まで点検してから、「大丈夫だ」と答えた。

やがて、ぽんぽんと大きな音を立てて船が出帆し、少しずつ遠ざかる町をヨシフは眺め渡した。長方形に区切られた小さな故国——治外法権の領事館区域——はすぐにそれと見分けられた。意匠惨憺、そこにある折衷的な建造物は、いまのヨシフに少しグロテスクな印象を与えた。文化人類学の研究者らしからぬ、そのナイーブさの源泉はどこにあるのかと考え、長らく研究者であった自身が、この町で過ごした数年間、被研究の立場にあり、自らの姿を見出したからなのだと思いつた。緑青色の屋根とクーポラを持つあの聖堂を、二階建てのバルコニーを設えたあの領事館をシンプルに美しいと感じるのは、歴史に浮かぶ無数の澱が沈み切った、後の世の人々だろう、とヨシフは思った。

※

服を着けたまま眠り込んでいたヨシフは、船室の固いベッドの上で目を覚ました。目覚める直前に見たへんてこりんな夢のこだまがまだ耳に残っていた。だが、意識がはつきりしてくると、それは夢の残響ではなく実際の音で、風と波のせいで木造のキャビンが軋む音だと気づいた。

夢の中でヨシフは、数人の役人たちと車座になって話をしていった。役人たちは繰り返し、同じ単語を口にした。それは日本滞在中、もつとも多く耳にした言葉だった。前歯の隙間から短く

息を吸って発音する、独特のその単語は、いくつもの意味を持つ感嘆詞であるらしく、かなり頻繁に会話の中に現れた。口腔を見せずに交わされる具体的な会話そのものより、その感嘆詞は雄弁で、かつ重要な情報を交換しようだった。翻訳は絶望的だ、とヨシフはよく思ったものだ。ところが夢の中のヨシフは、役人たちが繰り返し出すその言葉に込められた意味をことごとく汲み取っていたのだ。

ヨシフはベッドの上で額に腕を載せたまま、見よう見まねで「スウーツ」と息を吸っては、しばらくニヤニヤしていた。それから、やおら起き上がり、船室を出た。そろそろ中継地の香港が近いと思われたが、船員たちの緩慢な動作で、それは気のせいだとわかった。

船主甲板へ上がると、うららかな春の空気が、高密度の白い光の粒で満たされていた。強い風に吹き流され、ヨシフは、死んでいることを忘れて墓からさまよい出た死体の足どりであらふら歩き、手すりに寄りかかると、視力を失ったように立ち尽くした。

住職とニコライとの対話もたらしてくれたインスピレーションに、ヨシフは自信があつた。単語自体は既知のもので、『和露通言比考』にもそれは記載されている。だが、あれは誤訳だと気づいた。この数年間に、幾たびも耳にしたはずの言葉。だが、忙しきにかまけて、その場で意味を確かめもせず、つい聞き流していた。そのときの、ぼかんとした自分の顔を思うと可笑し

かった。ガラスの砂丘のように照り映える波間に目を細めると、これまで言葉を交わした日本人たちの顔が次々に浮かんだ。住職の鷹揚な諧謔を、はにかんだ小僧の顔を、そして、さじを投げた橘耕斎の苦笑いを。

「なにが皮肉なんだい？」ヨシフの言葉尻を捉えた船長が尋ねた。どうやら、意味もなくつぶやいていたらしい。

ヨシフは船長に袖をまくり上げた左腕を突き出すと、右手の親指と人差し指で腕の肉を摘まんで、何度も引つ張った。

船長は手に持ったパイプを空中で止め、傍らの部下と顔を見合わせると、ヨシフは頭がおかしくなったのだと断定した。そして、ニツと黄色い歯を見せておもねるようにヨシフに笑いかけた。

ロシアに帰ったら、日本語と中国語に関する体系的な論文を書こう。だが、その前に改訂版を出したい。こちらにきて、訳にずいぶん間違いがあることに気づいた。橘耕斎はまた手伝ってくれるだろうか。彼もいまや外務省の官僚、忙しい身なのだ。

そして、ウラジミールには母親が必要だろう。

すべてが必要な出来事だった、とはとても言えそうにない。

息子が考えている以上に、ヨシフはエリザヴェータの死に責任を感じていた。もし媒酌人がヨシフを選ばなければ、ウラジミールは母親を失わなかったかもしれない。もし、プチャーチン提督がヨシフを選ばなければ、もっと落ち着いて家庭を築くことができたかもしれない。

いまさら取り返しがつかないことを思い悩んでもしかたがない。だが、埋め合わせは必ずしなければならない。

為すべき仕事を手許に引き寄せた途端、それまでの茫漠とした虚しさは消えた。外務省の手続き上はとくに離任していた。

だが、ヨシフはいまはじめて解放感を味わった。

いつの間にか、船長の姿は甲板になく、船員たちにもわかに騒がしくなった。呑気なものだ、というように、若い船員が甲板に突っ立ったままのヨシフに一瞥をくれて、通りすぎた。

波間を奔る風が、クロスのペンダントを飾ったヨシフのシャツの胸元をせわしく煽った。勇ましく船出する男を励ますつもりならば、風よ、悪いがひと違いだ、おれは帰るのだ。そんなジョークがあくびのように浮かんだ。眩しい日差しを仰向くと目に涙が滲んだ。生まれたての潮風は絶え間なく吹きつける。大きな手のひらで心を鼓舞するように、力強く胸を叩きつづけている。

そのおかげかどうか、船酔いはほとんど感じない、それは驚くべきことだった。しかし、油断は禁物だ、書き物などすれば、たちまちあの苦悶を味わう羽目になる。

仕事はたくさんあるが、慌てるべきではない。香港に着いたら、まずは修正すべき箇所を忘れずに書き留めよう、とヨシフは思った。

(一)

『後北游日乗』・異聞

水 関 清

(一)

森林太郎（のちに、鷗外と号す）が長男として生まれた森家が、代々典医として仕えてきたのは、石見国津和野藩であつた。津和野藩は、元和三（一六一七）年に因幡鹿野藩より入封した亀井政矩を藩祖として、幕末まで存続したが、森家のほうは代を引き継ぐうちに、失態などのために徐々に禄高を減らされて五〇石になつており、家運は衰微していた。

天保年間に、長崎や江戸などで医学を学んだのち、夫婦養子として森家に入つて二代当主となつた祖父・白仙は、林太郎が生まれる直前の文久二（一八六二）年十一月に客死している。山口県の豪農・吉次家の四男に生まれ、一九歳で医学を志し、長崎から津和野へと巡る旅の中で白仙に出会つて漢方を学んだ、父・静男は、寡黙で誠実な性格と旺盛な向学心が評価されて、白仙の娘・峰子（二四歳）の婿養子として、白仙死去の前年である万延元（一八六〇）年に、二五歳で森家三代当主となつた。

静男は、藩主の指示で津和野から医学修行に出かけている。

まずは文久三（一八六三）年、江戸に出て、後に東京大学医学部

となる、医学所（松本良順頭取）に学び、次いで元治元（一八六四）年には、下総の佐倉順天堂に転じて蘭医・佐藤泰然の指導を受けている。明治の世になつて、廃藩置県を経て時代が急展開していった明治五（一八七二）年、旧津和野藩主・亀井慈監（これみ）から、静男を主治医として雇い入れる旨の要請が届いた。長く暮らした津和野という小さな町に住むことで、時代に残り残されるのではないかという危機感を抱いていた静男は、上京を決意した。ただちにその年の六月、当時一歳だった林太郎をともなつて、石見瓦の赤い家並みが身を寄せ合つた、山間の小さな城下町をあとにして、津和野から隣の周防の国に至る境界をなす野坂峠を越えたのだった。

向島の小梅村にある、江戸期には藩主の下屋敷だった亀井氏の邸宅の前に、父とともに立つた時には、七月になつていた。黒板塀の表門をくぐつて通された和室で、父とともに一ヶ月余寄留し、向島小梅村に居を構えた。

低迷する家運を挽回するため、林太郎に課せられたのが、父も学んだ医学所の後身である第一大学区医学校への進学と、優

秀者のみに命が下る、海外留学であった。すでに林太郎の身边には、見本となる人物がいた。森家の遠縁となる、西周だった。西は、幕命でオランダに留学して三年半にわたって洋学を学び、明治の世になった後も、西洋文学の啓蒙家として、その紹介と導入に貢献している。

西周のように留学し、西洋の知識と叡智とを学び取り、わが国における普及という役割を果たすことが、同時に森家の再興の一助になると考えたのである。

(1)

西の助言を受けた林太郎の努力は、周到であった。

明治元（一八六八）年三月の西洋医学採用の被仰出書（おおせいだされしよ）にそつて、明治二（一八六九）年八月にはドイツ医学導入が政府決定となり、明治四（一八七二）年八月には、お雇い外国人として、陸軍軍医のミュルレルと海軍軍医のホフマンの二人がやってきた。その医学教育の場合は、この年の七月に改称したばかりの「東校」であるが、これは元をただせば、林太郎の父・静男が学んだ医学所の後身である。維新の混乱の中で、医学学校兼病院↓大学校分局↓大学東校という改称過程を経て、東校になったのである。ふたりは、ドイツ人教師による予科三年、本科五年からなる教育課程を定め、少数精鋭主義教育を導入した。講義はドイツ語で行われた。

林太郎の上京は明治五（一八七二）年、すぐさま一〇月から、

ドイツ語習得のために、本郷屯岐坂の武家屋敷に設けられた洋学塾・進文学舎に入塾した。しかしながら通学するには向島は遠く、その便の良い、神田西小川町の西周邸に寄寓したのだった。林太郎の習熟ぶりはめざましく、その甲斐あって、明治六（一八七三）年一月に、第一大学区医学校本科予科の入校試験に合格した。本来の入学募集年齢は一四〜一七歳であったが、林太郎は万延元（一八六〇）年生まれとして応募し、満一歳一〇ヶ月での入学を果たした。また、修業年限三年の予科入校時の定員六〇名中、本科に進めるのは三〇名であったが、本来より二歳若くして、その一人に選ばれた。

両親は手放しで喜んでくれたが、西周の反応は違った。ただ、「氣を抜くな」との注意だけだったが、その奥に林太郎の将来を思う心根が垣間見えた。

明治七（一八七四）年に第一大学区医学校は、東京医学校に改称した。その後、林太郎が予科から本科に進級した明治九（一八七六）年に、東京医学校の校地は、下谷和泉橋から本郷の加賀邸跡に移り、林太郎はその寄宿舎に入った。明治一〇（一九七七）年には、東京医学校は東京大学医学部に改称し、林太郎はその四等本科生となった。明治一二（一八七九）年、父・静男は向島から千住に居を移して、橘井堂医院を開業し、東京府から委嘱された郡医としての仕事で多忙になる。明治一三（一八八〇）年の秋に林太郎は寄宿舎を出て、医学部本館とは鉄門を挟んで向かい合うほど至近な距離にある、本郷龍岡町の下宿「上條」に移

った。卒業試験に集中する意味でも下宿住まいにし、身の回りの世話や健康管理のため祖母の清も同居する体制をとった。通学時間に余裕ができたためとして、林太郎はこの頃、佐藤元長に漢詩を、依田学海に漢文を、福羽美静と加部巖夫から和歌を、それぞれ学んでいる。

この林太郎の行動には、伏線があつた。この頃から、胸部に痛みを覚えることがあつたのである。しかもそれに加えて、発熱や、胸に水がたまつた徴候がみられたことは、なおさら前途への不安を濃くした。医学生であれば、それは結核性胸膜炎の症状とすぐに分かることで、ここで無理をして肺結核に移行すれば、卒業試験のための勉学はおろか、命にかかわる事態になることも考えられた。恐怖は募り、安心して試験勉強に打ち込むには、あまりにも不安が大きかつたのである。

後年、妹・喜美子が当時を回想して、同居していた祖母の清の談として、試験前に文学書を読みふけつたり、漢詩をひねり出したりする林太郎を心配するくだりがあるところから考えると、これらのエピソードは、当時の林太郎が悩んだ肋膜炎症状の苦しさを紛らわすための一連の行動だったのかもしれない。

さらに決定的だったのは、卒業試験の前の時期に、上條が火災によって焼失したことであつた。明治一四（一八八一）年三月二十日曜日の深夜十二時過ぎに起火して、二階建ての建物は全焼してしまつた。この時、近くに下宿していた同期の甲野葉（こうの・たすく）が駆けつけて、消火や荷物の運び出しを手伝

ってくれた。しかしながら、勉強の拠り所となつていたノート類が燃えてしまつた林太郎は、甲野の下宿屋に避難したものの、満足に勉強ができなかつた。

東京での大火といえ、明治五（一八七二）年二月二六日、和田倉門内の旧会津藩邸から起火し、折からの烈風にあおられ銀座御堀端から築地にかけての四一か町を焼失する大火がよく知られている。さらに、明治二三（一八八〇）年末からの約三カ月間には、三件の大火が起こつている。明治二三（一八八〇）年二月三〇日には神田区で大火が発生し、神田、日本橋一帯の町家が焼け、その約一ヶ月後の明治一四（一八八〇）年一月二六日、神田区松枝町から起火した火は、折から北西の強風にあおられて瞬く間に東神田一帯を焼き尽くし、日本橋馬喰町、横山町へと延焼し、神田川沿いの元柳町、吉川町から両国橋を越えて本所、深川に及んだ。のちに、神田松枝町の大火として知られているが、その大火からわずか半月後の明治一四年二月一日にも神田区で大火があるというさまたさであつた。本郷と神田は近く、林太郎が遭遇した、上條の火災においても、地勢や気象条件など、注意すべき案件には共通するものがあつたのかもしれない。

（三）

焼け出された林太郎のために、同期生の小池正直、片山芳林、井上虎三は、協力して卒業試験のための勉強を手伝ってくれた。

しかしながら、それ以上に厳しかったのは、にわかに増強することがなかったとはいえ、胸部の痛みが続いたことであつた。

明治一四（一八七二）年七月四日月曜日、東京大学医学部を卒業する林太郎たちが、医学士授与式に出席した。卒業生の中で最年少、満一九歳五ヶ月の林太郎の成績は、卒業者二八人中八番の席次で、目標としていた、文部省が官費留学の途を開く、卒業成績二番以内は逃してしまつた。思えば、進文学舎に通つていた九年前に留学を決意し、西洋の知識と叡智とを学び取り、わが国における普及に努めることが、同時に森家の再興の一助になるとの望みをかなえるために挑んできた留学の夢は、ひとまず果たせなかつたのである。

林太郎は、焼失した上條の跡地に立つて、鉄門の向こうに聳える、医学部本館をあらためて眺めてみた。この地は、もとをただせば加賀藩の江戸屋敷であつたため、東京大学医学部となつた今も、よく手入れされた庭園や池が保存されている。林太郎は、日々の学習の中で、新しい知識が次々と身体に沁み込んでゆくような快感とともに、この庭園の周囲を散策したものだった。今日はここから、医学校進学のためにドイツ語を学んだ洋学塾・進文学舎のある本郷荅岐坂を経由して、父母の住む千住の家まで歩いてみようと思つた。

幅・六間余の荅岐坂の両側に並ぶ、板塀や海鼠壁、築地塀や長屋門などには、江戸期の懐かしい武家屋敷の面影が漂つていた。通い始めたのは初秋のことで、坂下から爽やかな風が吹き上が

つていた。凍える手を労わりながら、雪の降る道を、足をとられないように歩いた冬が過ぎると、屋敷の白壁の上から通りにはみ出す真つ赤な椿の花に、故郷・津和野の街並が重なつて見えたものだつた。坂の中央付近にある四つ辻に表門を構えた、林太郎の学び舎であつた洋学塾の玄関口には、今も「進文学舎」という看板が掛かつていた。

ここで留学を決意したのだ。医学校に入つて好成绩を取めることは留学への最短ルートであり、森家にとつて最も望ましい道だと考えたのだつた。

千住への道々で、そのようなことを回想しているうちに、林太郎の足はいつしか、三ノ輪の集落にさしかかつていた。ここから千住大橋を渡ると、日光街道で最初の宿場、千住宿になる。大学の寄宿舎などから実家に帰る時に必ず通る三ノ輪は、ここに着くと家まではあとわずか、と実感できる、安堵の地だったのである。

帰宅してすぐに卒業の席次のことを告げると、父は、少し間をおいて、「誠を尽くすことだ」ぽつりと、そう言つた。

千住の地で橋井堂医院を開いた父・静男は、貧民救済医療に力を注ぎ、郡医として行政や地域からも信頼されていた。卒業以来、そこで林太郎は、父の診療を手伝うことになった。最初に思い知らされたのは、大学を卒業する以前の、真似事のような代診とは質も密度もまったく異なる、日常診療の厳しさであつた。

そして何より静男は、連日押しかける代わり映えのない患者でも、難しい症例でも、分け隔てなく真摯に向き合おうとしていた。何の変哲もない軽い症状には、つい意欲が湧かず、軽く済ませてしまいがちな林太郎にとって、父親の態度は尊敬に値し、その精神を学ぶことの重要性は理解できたが、留学をあきらめて、この診療所生活に没入することためられた。

上條の火災後、卒業試験の勉強に窮した林太郎に、支援の手を差し伸べてくれた同期生の小池正直は山形出身で、林太郎より七歳年長であったが、陸軍省の給費生として東京大学医学部に学んだ。当時の陸軍は、組織内での軍医養成をやめ、東大医学部に委託することで、陸軍に勤務する医師の養成を制度化していた。明治一四（一八八二）年に卒業した第一回の委託生は、小池を含めて二名おり、いずれも卒業後たちに陸軍省医務局に採用され、病院課に配属されていた。陸軍省には小池のほかにも、のちに林太郎の終生の友となる賀古鶴所（かこ・つるど）が任官しており、ともに林太郎に陸軍省への入省を強く勧めていた。

なかでも小池は、林太郎を推薦する書簡を、石黒忠憲（いしぐろただのり）軍医本部次長にあてて送り、その中で林太郎を「此人蓋し千里之才なり」とまで評価している。一方の賀古は、優秀な人材をドイツ留学によって育成しようとする、陸軍の組織的な動向に着目して、陸軍省からの官費留学の途を提案すること、かなわなかった林太郎の夢の実現に手を貸そうとしていた。

（四）

漢方医でありながら、佐倉の順天堂で蘭学を修めた静男が、橘井堂医院で実践する治療手段に、林太郎は新鮮な感動を覚えた。当時の最新医学であったドイツ医学を医学部で学び、卒業を真近に控えた時期から、漢方医でもあった佐藤元長に漢詩を学んだ林太郎は、漢方医学の原点としての『傷寒論』と『金匱要略』を、すでに読み解いている。元長は林太郎より四四歳年長の漢方考証学派の第一人者で、幕府の漢方医学の学校「医学館」の最後の教授であった。漢方医学や古典籍を知悉する元長に、林太郎は漢詩の指導を受けつつ、学問としての漢方の話を聞くのを何よりの楽しみとしていた。

ともに中国の後漢時代の医学書で、日本に伝来後は、千年以上にわたって医学の基本とされてきた名著であり、林太郎の祖父・白仙や、父・静男にとってもその多くの処方や診立て方は、すでに自家薬籠中のものであった。

その底力を思い知らされたことがあった。人力車と衝突して、胸部を強打した、若い大工の治療にあたった時のことである。橘井堂医院で治療が始まると、まず局所の処置を指示された。山梔子（さんし）を砕いて飯粒に練り込んで、患部に当てるのである。次は、飲み薬の準備である。「治打撲一方（ちだぼくいっぽう）」と呼ばれる七種の生薬を混ぜ合わせた、江戸期の漢方医・香川修庵の名処方である。「川骨（せんこつ）」「川芎（せん

きゆう)「桂枝(けいし)」など6種まで準備できたところで、「樺椒(ぼくそく)」と言われて手が止まった。思い当たらなかったのである。「桜皮(おうひ)」で代用しよう」という父のひと言で、調剤は再開された。クヌギの樹皮からとった薬剤で、血流をよくし、腫れを軽減させるという「樺椒」は、桜類の樹皮からとった「桜皮」でも代用できるという。これら七種を煎じて服用させた患者は、その後徐々に軽快して、事なきを得た。

「実際の臨床とは、こういうものか」

林太郎は、そう思った。症状を見て、一問一答式に治療薬を考えるのではなく、症状の奥にある病態を推測して、それをひとつひとつ改善するために、どの薬種のどういう作用が役立つのか、というところまで知っておかないと、どんな患者が来るかわからない日常診療の場では、即応した動きができないのだ。

父・静男が熱心に行っている「区医」活動の奥底にある志の深さにも驚いた。静男は、窮民救済のための医療であるこの活動に誠実に取り組んでいたが、その根底には、出身地である山口県防府の植松村への想いがあることを、静男の佐倉順天堂での修業時代の先輩で、今や、東京での区医活動の責任者である、長谷川泰(はせがわたい)のちの医学校「済生学舎」設立者)から聞かされたからである。付近を流れる佐波川からの洪水が、毎年のように襲う植松村で行うべき総合的な対策として静男が発案したのは、住民のための、医療施設・農業土木技術所・教育施設、の三つの施設であったという。ここからうかがえるのは、

洪水という、すぐ目の前に見える現象から生じてくる生活の窮状に、まず、医療を通じて身体面から対応しつつ、次に、洪水に強い農業にするための土木面からの施策を重ね、さらには洪水常襲地に住むうえで住民に必要な知識共有のための教育施設を創設するという、重層的な対策を構想したのである。

この静男の考え方は、当時の人々を怖れさせたコレラに、区医として、どう向き合うのか、という活動につながっていく。当時のコレラ治療には、確定した治療法はなく、民間療法によって現実的に対応することで精いっぱいなのが大きかった。しかしながら静男ら一部の医師は、この疾患の広がり方から、食物や水を介した伝搬を疑って、患者の隔離、便所や溝の消毒、使用した衣服の消毒、食物の過熱や食器の併用の禁止など、現在の衛生物学的知識に照らしても矛盾しない防疫対策もとられていた。いわば、「疾病の原因治療が困難な時には、患者が置かれた環境などの面からあらためて考え直し、それらを総合的に捉える中で、効果的な対策を考える」という診察態度であり、それを身近で見聞した林太郎に、臆気ながらではあるが、その後、自らが深く関わることになる「衛生」という概念の祖型を植え付けることにつながっていく。

もともとインドの風土病だったコレラが国内で初めて流行したのは文政五(一八二二)年のことであったが、開港後の安政五(一八五八)年からの三年間にわたる流行では、江戸だけでも二十万人以上の死者を出したといわれる。ある日突然衰弱が始

まつて、たちまち死に至ることの多い原因不明の疾患として、人々の恐怖の的だった。

後年になって林太郎は、自らが専門とした「衛生学」について、「衛生（ヒュגיעーネ）トハ健人ノ外圍ニ在テ影響ヲ之ニ及ボスベキ天然ノ事物ト或ハ人ノ健康ニ欠ク可カラズ或ハ人ノ健康ヲ目的トスル裝置トヲ知悉スルノ学ナリ」と述べて、この学問の性格・目的を明らかにしているが、その根底には、医師となつてすぐ、区医としての父・静男の活動を、つぶさに見ることができた経験があつたものと思われる。

(五)

明治一四（一八八二）年二月一六日、林太郎は、陸軍軍医副に任官し、東京陸軍病院課僚として、勤務をはじめることになった。軍医副としての初めての任務は、翌・明治一五（一八八二）年二月から三月にかけての、徴兵検査立合であつた。

この任務のために林太郎は、栃木、群馬、長野を経て越後に入り、高田、柏崎、新発田、新潟、長岡を回り、三国峠越えをして帰京している。この間の出来事は、現存している最古の日記である「北游日乗」の中に残されている。その冒頭には、江戸から明治へと時代が移り変わる中での交通機関として機能した、利根川・江戸川水系における、いわゆる川船の姿が記載されている。度重なる土砂の堆積で浅瀬が多い利根川水系を運行する川蒸気は、スクリューではなく外輪式起動の姿で、時速六ノット

で運行していたという。林太郎一行は、渡良瀬川沿いの古河の船戸河岸から陸路をとつて、栃木、前橋、長野、長岡、高田、柏崎などで徴兵検査を行い、新潟から新発田への往復には一帯で古くから発達していた信濃川・阿賀野川の水運を利用している。

一連の立合任務終了後の同年五月には軍医本部付となつて、プロイセン王国の陸軍衛生制度についての調査に従事している。この当時コレラは、明治期以降も断続的に流行が続き、明治八（一八七五）年に明治政府は、諸外国の衛生を参考として、これを専門に担う行政機関として内務省衛生局を設置したが、明治一〇（一八七七）年の西南戦争の際には、戦後、各地から派遣された兵士たちが帰郷するのにともなつて、全国的な流行となつた。さらに、明治二二（一八七九）年のコレラ流行は、患者一六万人超、うち死者一〇万人超という甚大な被害をもたらした。このような経緯から、コレラという伝染病への対策は、プロシア陸軍の体制を参考に、軍隊衛生制度の研究を命じられたばかりの林太郎に、軍隊という組織における「衛生」を、制度的にきちんと保持するための体制をどう構築するのかについて考えるうえで、喫緊の課題を与えることとなった。

さらにその二か月後の同年七月二七日には次の官命があり、本来なら七月末に東京を發つて、函館、青森、仙台、福島、新潟、高崎を巡るはずであつた。しかし、七月三日朝鮮で、のちに壬午軍乱と呼ばれる事件が起き、林太郎たちの出発は延期された。日朝修好条規によつて生じた経済的混乱を不満とした、朝鮮の

反乱軍が日本大使館を襲つて、王妃・閔妃らに近い要人を殺害したのである。

事態の推移を見守る中で、今回の派遣団を統括する上司である、緒方惟準（おがた・これよし）軍医監と話し合う時間に恵まれたことは、幸運であつた。

緒方は天保一四（一八四三）年生まれの三九歳で、幕末の蘭学者・洪庵の次男である。長崎で、ポンペ、ボードウィンらにオランダ医学を学んだのち、文久三（一八六三）年には、「医学所」（東京大学医学部の前身）教授に任命されている。当時の頭取は、緒方らとともにポンペに学んだ、松本良順。津和野藩の典医だつた、林太郎の父・静男も、この当時、良順に学んだ。さらに翌年に静男は、良順の父・佐藤泰然が佐倉に創設した学塾・順天堂に入門して、学習を続けたのである。その後緒方は、慶応元（一八六五）年から明治元（一八六八）年までの間は、幕命でオランダに留学し、帰国後に短期間「医学所」取締を務めた後、明治二（一八六九）年には大坂仮病院御用となり、明治六（一八七三）年からは陸軍軍医となつてゐる。

緒方も林太郎の父・静男も、ともに松本良順を師として西洋医学を学んだ、同窓の関係にあり、今、緒方は、陸軍軍医の上司として林太郎の前に立っているのだつた。

（六）

軍医本部付となつた林太郎の念頭に常にあるのは、陸軍とい

う組織における、衛生体制の整備であり、コレラという疾患への対策は、その重要な柱となるはずである。林太郎たちがこれから向かうとする函館では、開港直後の安政年間にもコレラの流行があつたが、明治期になつても数度大きな流行があり、それぞれ、学ぶところが大きかつた。

明治一〇（一八七七）年の西南戦争にまつわる事例は、以下のとおりである。二月の、鹿児島土族の軍と明治新政府軍が、熊本城を中心に繰り広げた戦いに際しては、北海道の屯田兵にも動員の命が下つた。琴似と山鼻の二兵村で一屯田兵大隊が編成された。その兵員の多くは、新政府軍に敗北した東北諸藩の土族であり、鹿児島土族の軍への敵愾心は旺盛であつたと伝えられている。屯田兵大隊は四月に熊本に上陸して八月まで各地を転戦した後、九月に札幌に戻つてきた。

その当時、清国で流行していたコレラが、西南戦争中の長崎に侵入した。清国から長崎への航海中に死亡し、長崎の外国人墓地に埋葬された水夫がコレラに感染していたのである。これがもとで、コレラは長崎から九州の各地方に広がつたのである。

西南戦争を終えて北海道各地に帰還する兵士からの発症状況は以下のものであつた。九月二五日、帰還する屯田兵を乗せた「秋津州丸」の函館入港時に、船内で二人が発症した後、三日間の停泊中にさらに八人が発症し、罹患者は七重浜に設けられた臨時伝染病床に収容された。『斉藤与一郎伝』によれば患者八一名、死者は六九名であつたという。この時内務省では主要開港

場のある地方長官に、「虎列刺病予防心得」(内務省乙第七九号達)を出して、検疫委員、検疫取扱事務所が設置された。開拓使は生魚・野菜類の販売禁止をしたり、集会を禁じたり、便所や溝の消毒など、防疫につとめた。

それから二年後の明治二二(一八七九)年七月には、大阪から回漕した「八幡丸」が忍路停泊時に水夫が発症したことを契機に、後志、石狩、室蘭へ感染が広がった。函館では八月に入港した船舶からコレラ罹患者が出て、市街地に蔓延。一〇月半ばに終息するまで、一〇〇人を越える患者が発生し、市内の各学校も休校になっている。政府は同年に「虎列刺病予防仮規則」を發布し、検疫医員の設置や避病院の設置などを規定する「海港虎列刺病伝染予防規則」の中で、「検疫停船規則」としての適用がすんだ。

さらに横浜からの汽船の乗客が発端者として、明治一五(一八八二)年五月から一〇月の間に、患者二〇三名、死亡者一四五名を出したことは、船舶検査を行いながらも、水際で防ぎきれなかった、コレラに対する有効な防疫体制の不備を示唆する出来事であった。

さまざまに試みられてきた防疫体制の、何が不十分なのだろうか。

当時、コレラを流行させないために、生魚や野菜類の摂取を控えることが重要なことは、住民の間である程度浸透していたが、飲料水については、それを得る手段がさまざまなこともあ

って、まだまだ不十分であった。豊かな川が身近にあったり、湧き水や井戸水が豊富な地域なら、飲料水の選択も可能であろうが、良質な水を得ることそのものが、そう簡単にはいかない暮らしをしている人々も多いのである。それは、林太郎が父・静男に付き添って、患者たちの住まいに往診するうちに、身をもつて感じたことである。

安政の開港以来、少なくとも四回にわたってコレラの流行を経験した函館の街では、そのありさまを見ておかねばならない。その気持ちを感じ取ったのか、緒方は函館の街を評して、以下のように話してくれたことがある。

「函館山は、もとをたせば島で、しかも火山島だ。島という以上、はるか大昔は陸から離れていたのだが、陸地と島の間には海流が回りこんで、砂を運んできたため、長い年月の間に、砂州ができて、現在の形になったのだ。砂が堆積した土地の上に棲んでいるのだから、井戸を掘っても海水の混じった水が出てくる。水の便はよくない。函館山と向かいあう山のほうからは、亀田川という大きな川が、海に向かって流れているので、安政年間に堀川乗経というお坊さんが、亀田川の途中から函館山の方向にむけて掘割を開削して、水に苦しむ人々に喜ばれたらしい。」

林太郎は、函館山とその掘割は是非見ておきたいと思った。

(七)

林太郎は、父・静男からも、驚くべき話を聞いた。静男が師事

した松本良順と、松本の師であるポンペが、安政五（一八五八）年、長崎でコレラ患者診療中にコレラに罹患し、さらに驚いたのは、ふたりは、ポンペ式コレラ治療法によって回復したのだという。

ポンペが長崎で活躍した時代からおよそ二〇年が経った、林太郎が生きる明治一五（一八八二）年の東京でも、そうした治療は行われず、もっぱらコレラの治療として、辛子粉を熱い酢で練って布に延ばしてみぞおちあたりに貼る「芥子泥」と、桂枝・益智（やくち）・乾姜の生薬を混ぜ合わせて「芳香散」とを併用するのが一般的であった。治療といっても民間療法と大差ない。これに対してポンペが行ったのは、「コレラ患者にキニーネとアヘンを服用させ、温浴させる」治療法であった。この治療法を、二一世紀に生きる我々が恩恵をこうむっている現代医学の観点から考えてみたい。

コレラの場合、突然に生じる激しい下痢や嘔吐などによって、体内の水分が失われる「脱水状態」に陥るために、急速に体力が失われる。この脱水状態は、体内の循環状態を阻害し、脳、心、腎など、生命を維持する上で重要な臓器の血流を妨げるために、ときには痙攣なども合併する。その後、体温が下がり、頑固な寒気を訴え、意識が朦朧とする、などの経過をたどるうちに、命が奪われるという、重篤な結果に至ることが多発した。庶民と比べれば安定した暮らしを営んでいた大名にもその害は及び、安政五（一八五八）年には、薩摩の島津斉彬もコレラで命を落とした。

ている。

コレラという病態の本質は、コレラ菌が感染して機能不全に陥った消化管から、体内の水分や栄養成分が急速に失われるという脱水状態の結果、体内の循環不全が生じ、重要臓器の機能不全にまで進展すると、急変する、と要約できる。ポンペの行った「キニーネとアヘンの服用」は、消化管の動きを抑制する効果が期待できる。そうすることで、急激に脱水状態へと向かっている病勢を和らげるのである。次の「温浴させる」ことは、体内で不均衡になりつつある血流分布を是正させ、重要臓器への血流を保持する効果が期待される。コレラ患者の、「体温が下がり、頑固な寒気を訴え」、「意識が朦朧とすることや痙攣」などの症状は、ともに、体内の血流分布が不均衡となったことの反映であり、とくに後者は、脳への血液灌流が阻害されたことの結果であると考えられる。もちろん、キニーネとアヘンには、重篤な副作用に常に配慮して用いるべき劇薬という側面もあるため、優れた臨床家であったポンペらが、その研ぎ澄まされた感覚を縦横に發揮してこそ有効な治療行為だったであろうことは、想像に難くない。

（八）

いよいよ函館に出発する日がやってきた。壬午軍乱にともなう混乱が小康状態となった段階の、明治一五（一八八二）年九月二七日から十一月六日にかけて函館、青森、仙台、福島、新潟、

高崎を巡ることになった。用務は、東部検閲監軍部長である陸軍中将三好重臣の属員としての徴兵検査立合業務であつたが、上司である緒方と話し合う中で、林太郎は、函館での、一時期ほどではないにせよ、なおコレラ流行中の防疫体制を、この目で見ておくことで、陸軍本部付としてから課せられた、「軍隊組織における衛生体制の整備」の考究にも役立てようと考えていた。林太郎は、この一連の旅を、現存している最古の日記のひとつである「後北游子乗」の中に残している。その冒頭には、「壬午の年九月二十七日 晴れたり 横浜より兵庫丸といふ船に乗りぬ 二十八日 纜を解く」と、旅立ちまでのことが要約されている。

「二十九日 船北を指す午前四時より風波起こりて能く頭を擡げるものなし夜に入りて風は歇まねど空いとよく晴れたり」そして、三十日 晴れたり午前十一時右に駒嶽を望み臥牛山に傍ひて箱館（林太郎の表記のまま）の港に入りぬ駒嶽は火山にて其形尖りたり東浜町なる岡といふ家に投ず所謂角上といふ旅店なり」との記載が続く。当時の気温、天候を気象庁のホームページから探ると、出発した二十七日の東京の（最高／最低）気温は（24.4／15.0）℃で、降水なしで、函館に到着した三十日のそれらは、（10.9／1.7）℃で、降水なし、とあるところからみて、林太郎の函館（箱館）上陸初日は、東京では一月中旬に相当する気温で、思ひのほかの寒さに驚いたことだろう。

汽船が沖合に着くたびに通船が出入りする棧橋の前に、切妻屋根の二階建てで、「角上」の屋号を掲げた旅宿に荷物を置いた林太郎は、昼食もそこそこに函館山に登った。棧橋からしばらくの間は、瓦屋根で総二階の堂々たる構えの本店が並んでいるが、海岸から遠ざかるにつれて、瓦屋根の家並は消えてゆく。かわりに現れてくるのは、両手で持てるくらいの石を屋根の上に並べた家である。エゾ松と思われる板材を二枚剥いで作った屋根から石が転がり落ちないように、石と石との間を支えているのは、丸太を割って作った細木である。少ないとはいえ函館では雪が降り、屋根の上に積もった雪は、寒気が厳しくなるとしばしば凍る。寒気がゆるんでそれが解けると、今度は雨漏りの原因になる。それを心配すると屋根の傾斜はきついほうがよいのだが、一方で載せた石が転がらないかということも気になる。凍害に強い瓦といえば陶器瓦で、石州瓦が有名だが、高価であり、明治期になつて一般民家の瓦葺きとして利用が拡大した三州瓦の購入も難しい人々が住む家なのだろう。

函館山に登ってみると、まず気付くのは今なお要塞としての威容を保つ弁天台場である。かつて砲台が置かれた場所につながるアーチ型の入り口も中央右側に、しっかりと見てとれるが、その付近に隣接するのは、剥ぎ板の屋根に石が置かれた家々である。視線を右方向にずらしていくと、先ほど林太郎が降り立った東浜棧橋と、周辺の瓦葺きの二階家の並びが見え、沖合には何艘もの船が停泊している。さらにその先からは家並の姿が

変わり、港に面した側には、倉庫と思われる大型の建物が目立つようになる。港側から視線を右に送っていくと、大きな砂山に突き当たって、港とは反対側の位置にある海岸線にでる。

「ああ、この姿が、緒方軍医監の言っていた、島と陸地とが砂洲でつながった地形そのものののだ。」

そう納得した林太郎の眼は、砂山と海岸線の中ほどに、陽光を反射するひと筋の帯のようなものを見つけた。それを丹念に追っていくと、途中には橋のようなものが見え隠れしている。ほかに、ひと目見て川と思われるようなものはなく、これが堀川乗経の掘削した水路なのだろうか。

林太郎らが函館に到着した日は土曜日で、一行を迎える会が、函館県庁などの役所の主催で、谷地頭の浅田楼で催された。文久元（一八六二）年創業の浅田楼の当主・浅田清次郎は、明治一二（一八七九）年に竣工した函館公園の工事監督者で、灯籠、植物、白川橋の寄付、工事中の飲食物の提供等で大いに貢献した人物である。その席で林太郎は、深瀬洋春に引き合わされた。佐倉の佐藤春海に医学を学んで順天堂の塾頭まで務めた後、安政四（一八五七）年から安政五（一八五八）年にかけて、幕府の命で蝦夷地を回って、当時、その人口が減るまでに蔓延していたアイヌの痘瘡対策として、強制種痘をした人物である。明治二（一八六九）年には函館病院に勤め、翌・明治三（一八七〇）年には、東川棧橋に近い、会所町で開業している。父・静男と一歳違いのため、もしかやと思つて聞けば、父と同じ、松本良順門下で

あった。

函館でのコレラの情勢を訊かれた深瀬は、厳しい顔になった。患者を発見し次第、患者の衣服や持ち物は焼却、患家の消毒を行い、その周囲に石灰を撒き、一〇日間の立ち入り禁止として山背泊の避病院に運ぶのだという。しかし、焼却を指示した衣服をそのまま持ち去る者すらいるらしい。それほどに住民の暮らしは厳しいのだ。

そう話している間にも、役所の者は次々に、緒方が率いる一行のもとにやってきては、銚子から酒を注ぎ、必ず「お流れ頂戴」と言つて返盃を求める。緒方が黙殺すると、近くの芸者がこれを引きとる。林太郎らより離れた席には、返盃を重ねて、いい調子になっている者の姿も見える。緒方が、ポツリともらす。

「ポンペは、禁止すべき食物として、鯖・鮪・鰯・鰯・胡瓜などを挙げたが、魚の場合は傷み易かったり、熱を加えると食味が落ちるもの、野菜の場合には、人糞を肥やしとして撒いたその日にも収穫されるほど、実りの回数が多いもの、ということになる。食物に十分に熱を加え、生の場合にも十分にきれいな水で洗えばよい、ということになるが、函館のように飲料水の便がままならないところでは、洗う水にきれいを求めることに無理があるのかもしれないね。」

林太郎は、すぐにでも住民の飲み水となつているという、掘割の水を住民が利用する姿を見ておこうと思つた。先ほど函館山から望見したところでは、東浜棧橋に近い宿屋からは、さほ

ど遠くはないはずだ。明日は日曜日、住民が朝餉の支度する頃に間に合うよう、早起きすればよい。

(九)

掘割の名は、願乗寺川といった。

翌・十月一日(日曜日)の朝、林太郎は、そのほとりに立つた。川幅は四間ほどで、平底の川船が通えるほどの深さしかない。川の兩岸には民家が建て込んでいる。岸に切った階段を下りると、水面は手の届くところにあった。林太郎は、瀬戸物の盃でその水をすくってみた。盃の底に描かれた模様をじつと見つめ、そして鼻を近づけて匂いを嗅いで、眉をひそめた。

姉さん被りをした女が、天秤棒と桶をふたつ抱えて水汲み場に降りてきた。林太郎の着ている制服を見て、軍隊関係者だと思つたのか、目礼をすると水を汲み始めた。桶を水面に水平になるぐらい傾けて、そつと汲んでは、もう一つの桶に移している。女の細腕ということもあるが、力を込めて沢山汲み上げれば、二回ほどで桶はいっぱいになりそうなところを、小まめに、少しずつ汲み上げている。

林太郎の思いを察したのか、女のほうから口を開いた。

「あんまり底の方にまで桶を入れると、濁りが混じるから。こうやって手数をかけて上の方をさらうと、水は冷たいし、飲み水にもできるんだ。」

「十年くらい前には、もっときれいだったんだ。それから上

流(かみ)のほうに家がどんどん建って、皆が洗いのするものだから、下流(しも)のほうは、これさ。」

「コロリはおつかねえ。私どもは煮立たせてから飲むんだとも、童(わらし)つこたちは、かまわねえで、甕の水をそのまま飲むこともあるんで、怒つてんだ。」

林太郎がさらに上流のほうを見ようとして、岸辺に上がったところで、「旦那さん!」と呼びかける声がした。今日はこれから、二十年前に願乗寺川を亀田川から分岐させた地点まで遡つた後、五稜郭に残る兵糧庫をたずねるつもりで、人力車を呼んでいたのだが、それにしてもずいぶん早い時刻に来たものだ。不審顔の林太郎に、車夫が慌てて言葉を継いだ。「深瀬医院まで急いでお連れするように言われて来やした。」

深瀬医院では、上司の緒方と深瀬とが真剣な顔で向かい合っていた。林太郎が到着すると、次のように事情を説明し始めた。

「今朝になって、一行の随員のひとりが下痢を訴えた。聞けば、夜半から始まった症状だという。筋肉質で、頑丈そうな身体つきの男なのだが、肌の艶が失われており、見開いた目には力がない。昨夜の浅田楼の歓迎の席には連なっており、断れずに返盃も受けたが、宴席の膳に並んだ鯉の洗いのほかの生ものは口にしていないという。便は相当に軟らかいが、コレラに特徴的な米のとき汁の外観は呈していない。すぐに隔離して、ここに連れてきたのだ。君は、どう思う?」

蘭学を学んできた経歴といい、医師としての実務経験といい、

(十)

緒方と深瀬という二人の大先輩に対して、自分の意見をはっきり申述できるだけの自信は、残念ながら今の林太郎にはない。

コレラに特徴的な症状がそろえば診断は可能になるが、徴兵検査立合という業務で流行地にやつて来た一行が、コレラに罹患したということになれば、その影響は計り知れない。緒方が林太郎に訪ねたのは、時期を失わない早期治療の可能性であつて、確実な診断ではないことに思い至つた林太郎は、父・静男から聞いていた、ポンペ式コレラ治療法について話し始めた。

最初のうちは虚を突かれたように聞いていた二人だったが、父の同門だけに、長崎でコレラ患者診療中にコレラに罹患したポンペと松本良順が、この治療法によつて回復したことを思い出し、その詳細を林太郎の父からの聞き取りメモを参考にして、忠実に再現した。ポンペが行つたのは、「コレラ患者にキニーネとアヘンを服用させ、温浴させる」治療法であつたが、この地で今からそれが可能かどうかについて考え始めた。キニーネは深瀬の医院に在庫があり、アヘンは万一の事態に対する業務用として緒方が持参していた。問題は、病者の温浴であつた。深瀬の医院にも、山背泊の避病院にも入浴施設はない。

考え込んでいた深瀬が、ハタと膝を打つてこう話し始めた。「谷地頭で温泉を掘り当てた勝田弥吉というものがおります。その勝田が、昨夜御同席した浅田楼の隣に、今年から、温泉旅館を始めたと聞いております。そこをあたつてみたらどうでしょう。」

役所と軍関係者からの意を尽くした依頼に、勝田は迅速に対応してくれた。幸い、泊まり客が引き払う昼前の時間に依頼したため、以降の一般客の宿泊と食事の受け入れが中止され、客室から十分に離れた一角には、治療用の部屋も整えられた。主治医は深瀬が務めることになった。

旅館の一室に運び込まれた患者は、キニーネとアヘンを配合した薬剤を服用した後、湯殿に向かった。湯船に腰まで浸かつた患者は、少しずつ身体を沈めて、やがて肩までの湯に浸かつた。気分不良もなく、うつすらと額に汗がにじみ出したところで、第一回の入浴は終わった。部屋に戻つて横になった患者は、やがて寢息をたてはじめた。

十月二日（月曜日）は雨。緒方は、終日徴兵検査立合という、本来の業務に集中した。林太郎は、深瀬とともに勝田旅館で診療の介助にあたつた。

患者の状態をコレラの初期症状と見て、ポンペ式で先手を打つた治療は、ひとまず順調なのかもしれないが、予断を許さないことにはかわりはない。事実、前夜に比べて患者の便は白さを増し、しきりに寒気を訴え始め、体温も低くなつてきた。

これに対して深瀬は、白湯を飲ませ、卵を中心とした雑炊をとらせ、煮崩れたたつぷりの野菜を口に含ませつつ、症状にあわせた漢方薬の内服を間に挟んだ。入浴療法も続けられていた。

一進一退の患者の症状にきめ細かに寄り添う深瀬の診療態度には、父・静男のそれが重なることがしばしばで、林太郎は臨床医としての基本が、つぎつぎに身に染み込んできた。それは、静男とともに描いてきた、これまでの「林太郎」という名の絵の下地に、深瀬という新たな彩合いを持つ絵の具を重ね塗りするような、濃厚な時間であり、経験であつた。

徴兵検査立合を終えた緒方も駆け付けてきて、深瀬と話し込んでゐる。一行の中には、その後コレラを疑わせる症状を發した者はなく、深瀬の治療を受けている患者も、少なくとも増悪せず、ポンペ式治療が継続できそうなこと、を見てとつた緒方は、翌・一〇月三日九時三〇分の函館出港と、同日午後の青森入港を決断した。今後の先行きは大いに気になるものの、患者となつた随員の容態から、先手を取つたポンペ式治療の手ごたえを、深瀬とともに感じとつたことが、この決定の背後にうかがえた。

林太郎たちが乗船した船は、往路とは異なつてゐた。文久三（一八六三）年に英国グラスゴーで製造された、二五〇総トンの外車蒸気船「浪花丸」であつた。外車船とは、蒸気の力で、船外に突き出した水車を回転させて進むもので、川船のように水深の浅い水路を走行するのに適した船である。函館―青森間のように、十分な水深のある外洋を走る船として選ばれたことに若干の疑問は残るが、函館湾の水深に配慮したためかもしれない。

浪花丸の船上で、林太郎は一編の漢詩を認めた（カッコ内はその書き下し文である）。

旅況如今忙亦甚（旅況は今 忙なること甚し）
汽機輾轉不因風（汽機の輾轉 風に因らず）
函灣一幅好図画（函灣は一幅 好図画なり）
乍落遠烟空翠中（乍ち遠烟 空翠の中に落つ）

林太郎は、この詩の中に函館での三日間のことを詠み込んだ。「次々に難題が降りかかるという、甚だしい忙しさの中を、自らと協力者の知力と胆力をもつて難局を切り開くことに集中させ、本来の任務の遂行と難題への対処とを、手際よく解決に導いた、すべての関係者の尽力は、あたかも、風の力によらずに、くるくる回る車輪で前進する浪花丸のようであつた」と。

林太郎が、コレラに倒れた随行員が全快したことを聞いたのは、函館を出て六日目のことだつた。

明治一五（一八八二）年一〇月九日の『後北游日乗』には、ただ、「盛岡六日町なる斉藤という家に着きぬ」とだけ記した。

さあ、行こう

佐藤 健

人事部で所定の手続きを終えて戻つて来た阿部弘を総務部のみんなが拍手で迎えた。

「部長、長い間お疲れ様でした」

総務部で一番若い女子社員が、笑顔で阿部に花束を手渡した。

「ありがとう。皆さんには本当にお世話になりました」

阿部は満面の笑顔で感謝の言葉を言うつゆつくりと、そして深々と頭を下げた。三月三十一日、今日で三八年間勤めた会社を定年退職するのだ。

阿部は、地方の大学を出て、都会にある中堅の商事会社に就職して総務畑一筋に真面目にコツコツ働いて来た男である。妻の英子と出会ったのもこの会社だった。高校を卒業して働き出した英子とは、同期入社となる。

お花見を兼ねた歓迎会で、宴会が終わつてみんなで後片付けをしていたとき、英子が言ったのだ。

「そのゴミ、なげるからこつちにください」

言われた同僚は、ポカンとして一瞬動きを止めた。どうやら意味が通じなかったようだ。

阿部はすかさず言った。

「捨てるゴミがあれば、僕が回収します」

そして、英子に近づいた阿部は言った。

「僕の田舎でも、捨てることを投げると言いますよ」

英子は北海道出身で、阿部は東北出身だった。それがあつて二人は親近感を覚えたが、二年間は仕事を覚えることで一生懸命で、あくまでも同期としての関係だった。

英子は決して美人ではないが細かいところに気が付く優しい子で、総務部内では「エイちゃん」と呼ばれていた。或る日の残業で遅くなったとき、部屋には阿部と英子の二人だけになった。何を話していいか迷った阿部は二年前の花見を思い出していた。「僕の田舎の方言で、『行こう』っていうのを『あべーっ』って言うんですよ。だから、友達が僕を誘うときは、『あべ、あべーっ』てなります」

「何ですか、それ」

と言つて英子は笑った。翌日、英子がそれを総務部の中で話したのだから、

「あべ、あべーっ」

が、総務部内でちよつとしたブームになった。そんな些細な日々を重ねるうちに、いつの間にか二人の付き合いが始まっていた。でも、二人の関係は秘密にした。会社にバレてどちらかが異動になるのを恐れたからだ。

いよいよ結婚を決意した二人は、総務部のみんなに報告した。その反応は、

「やつと決心したか。おめでどう」

どうやら二人が付き合っていたことは、みんなに知られていたようだ。

阿部は、三〇歳の十一月に英子と結婚した。英子は結婚を機に寿退職して専業主婦になった。一年後には長男が生まれ、その二年後には長女が、またその二年後に次男が生まれて三人の子宝に恵まれた。英子はずっと子育てに追われる毎日を過ごして来た。次男の誕生を機に狭い社宅から郊外の戸建てに移り住んだ阿部は、三五歳にして一国一城の主となったのである。通勤時間は片道一時間半と長くなったが、まだまだ自然が残る環境に二人は満足していた。現在、三人の子供たちは独立して、それぞれが別の場所に住んでいる。

同期の中には役員になった者もいるが、部長までの昇進は阿部としては出来過ぎだと思っている。六〇歳の定年後も雇用延長の道もあったのだが、退職を決めたのだった。

話は一年前にさかのぼる。阿部が満六〇歳になる新年度が始

まって間もない頃、家に帰ると英子が一枚のハガキを阿部に差し出した。

「あなた宛にこんなものが届いていたわよ。何だか知らないところからだけど」

阿部はハガキを受取りながら言った。

「どうせ退職金を狙った投資か何かだろう」

すると英子が無言に気付いたように声をはりあげた。

「もしかしたら、特殊詐欺のハガキじゃないの。今日もニュースでやってたわよ」

特殊詐欺は、息子を名乗る犯人が高齢の親に電話して、仕事で集金したお金を落としたので弁償するためのお金が必要だなどと言って、犯人の口座にお金を振り込ませたりする犯罪である。その手口から振り込め詐欺と呼称されたり、電話で最初に「オレオレ」と言つて息子のふりをするところから、オレオレ詐欺と呼ばれたりする。次第に手口も巧妙化して、その被害額は年々増加し、一時は毎日のように被害のニュースが報道されていた。最近では、件数は減つて来たものの未だに同様の被害が続いている。幸いこれまで阿部家には不審な電話も郵便物も届けられたことはなかった。

内容を確認すると、

「今年度定年退職される皆様へ」

と書いてある。何やら説明会の案内のようであり、開催日と場所が記されていた。

四月中旬の日曜日に天気も良かったので、阿部は会場である最寄りの市役所に出かける事にした。午後二時開始だったので、昼食を早めに食べ、一時過ぎには家を出て会場までの二kmの道のりを歩いて行く事にした。

英子は次男が大学進学で家を出るとパートの仕事を始めた。

近くの不動産事務所です務の仕事をやっている。土、日は仕事に出て平日に休む事が多い。夫婦でどこかへ出掛ける時には、英子のパートを調整する事になるが、普段の休日はそれぞれの計画で過ごしている。英子は阿部の高血圧とメタボを心配して食事管理のために毎日弁当を作り、阿部が休みの日でも必ず昼食を用意した。今日もいつものように、

「スパゲティと野菜サラダを用意したから食べてね。それとサラダにマヨネーズをかけ過ぎないでよ」

と言って出掛けて行った。マヨネーズの注意もいつものことである。

「はい、はい」

阿部は面倒臭そうに返事はしたが、本来ならば感謝の言葉を伝えるべきなのだろうと心の中では反省している。英子がパート先の付き合いや女子会の時は、唯一夕食での外食が許される。外食といってもファーストフードに行く事が多い阿部だった。

会場は市役所の大会議室で入口には、『定年退職者支援制度説明会』と書かれた大きな紙が貼られてあった。入口の受付で、例のハガキを提示して、名簿に記載された阿部の名前にチェック

を受けて入場する。会場には三人掛けの机と椅子が並べられており、四〇〇人ぐらいいは入れそうな広さである。時計は一時五〇分を過ぎていたが、参加者は五〇人ぐらいのものだった。得体の知れない説明会にせつかくの休日を使いたくなかったり、当然他の予定があつたかも知れない。新手の詐欺だと考えて無視した人も多かったのではないかと阿部は考えた。説明会は全国各地で開催されており、この地域の対象者がどれだけのかはわからないが、入場する時に見た名簿からすれば、参加率はかなり低いようだ。

時間になると前に座っていた担当者が立ち上がって説明会の開始を告げた。

「それでは時間になりましたので、説明会を始めさせていただきます」

担当者は、髪を七三にきっちり分けた就活中の学生のような濃紺のスーツを着た黒縁メガネの若者である。続いて、事務所長のあいさつがあり、出席のお礼と説明会の主旨が語られたのだが、その冒頭でいきなり叫んだ。

「飛び出せ、新世界へ！」

会場の全員が嘩然として固まっていると、

「皆さんは、このテレビCMをご覧になった事はありませんか」会場がざわついて、

「ああ、やつぱり」

大きく頷く人や、

「何だ？それ」

と、反応は様々だ。阿部もそのCMは見た記憶があった。年明けからテレビやラジオで流れていたものだ。確か政府広報からのお知らせで、会社事務室で花束を貰った年配の男性が、振り向きざまに駆け出して、右手を高く突き上げて窓から青空の下へジャンプする映像に、

ー飛び出せ、新世界へー

の文字が大きくスライドインするものだった。役者はバイプレイヤーとして活躍中の一見強面の個性派俳優で、彼に花束を渡したのが、阿部の好きな女優さんだったことで目に留まったのである。彼女が主演した映画の影響で競技カルタをやってみようかとさえ考えた阿部だった。姉も女優で美人姉妹として有名である。若いのが女優としての経験を積んだ彼女は、役によって雰囲気は全く異なり、ファンを楽しませてくれる。そんなことを考えただけでもこの説明会が身近なものに感じられ、興味を沸いた阿部であった。

早速配布されたパンフレットによる説明が開始された。説明の中身を簡単に言えば、六〇歳の定年を迎えた者が好きな仕事に就ける法律が今年の四月一日付で施行されたのだ。

政府は、過去の年金制度改革において、年金受給開始年齢を段階的に六五歳まで引き伸ばしたり、掛金の増額や支給額を減額したりするムチを振るうのみの政策を取って来た。そして、今年度も年金受給開始年齢を七〇歳にしようとしたその時、全国

民の逆鱗に触れてしまったのである。時の与党は、二年前の夏の衆議院選挙で惨敗し、急場であち上げられた『未来再生党』が圧勝して政権を担ったのだった。そのメンバーは、IT関連企業を立ち上げた若手の経営者が多かった。また、その前年の参議院選挙でも与党の議席数は大きく失われていたのである。

年金の受給開始年齢の引き伸ばしと同時に行われて来た定年延長も六五歳が限界であった。いくら平均寿命が男女ともに八〇歳を超えたとは言っても建設や造船業、漁業などの肉体を酷使する現場作業では無理が来る。だからと言ってその歳からの別業種への再就職など望めるわけもない。結局、年金生活に移行せざるを得なくなり、長年に渡って肉体を酷使した結果、病気のリスクも高まって、医療費の負担が増える悪循環に陥った。

一方、世の中を見渡せば、仕事を早々にリタイアした人々が元気に本の読み聞かせや観光ガイドなどのボランティア活動をしている姿を見掛ける。また、趣味でバンド、合唱、演劇などに参加している人も大勢いることに気付く。そのほとんどが、現役時代に蓄えたある程度の資産を持っていて経済的にも恵まれた人々である。年金は孫にあげる小遣いになれば良いぐらいの感覚である。政府としては、いわゆる富裕層に対して年金を支給したくないところであるが、掛金を納付させておきながらそれはできない。では、資産に応じて年金にも税金を掛けることも検討されたが見送られた。最後まで現役で元気に働いてくれ、働いている間は年金受給を保留してもらいたいのが本音である。

働き方改革と銘打って、様々な施策に取組んだが、いずれも失敗に終わった。人が働き続けるためのモチベーションを維持するのは並大抵のことではない。

未来再生党が、まず着目したのは年金納付率の低さである。

二〇歳以上の国民は全て年金制度に加入することになっているにも関わらず、納付率は毎年六〇％に留まっている。過去に年金行政の問題が発覚し、新たな年金機構へ業務移管したものの、そこでも給付ミスや個人データの入力ミスなどの不手際があり、年金制度への不信感が納付率の低迷につながっていることは否めない。そこで、年金制度における財源確保のための公約を掲げたのである。すなわち、納付を促進し、給付を抑制する施策である。

二〇歳から六〇歳まで満額を掛け続けた者に特典を設け、間もなく年金受給者になろうとする者が、継続して働こうとする意欲を掻き立てる方策である。つまり、年金を完納した者について、就きたい職業への転職を法律で約束するのである。それに大きく同調したのが、意外にも二〇歳前後の若者たちである。ようやく年金というものを自分の事として考え始めたのだった。衆議院選挙が、有権者の年齢が十八歳に引き下げられた直後だったことも大きく影響したかも知れない。また、この施策に大きな期待を抱いたのが、五〇歳代のいわゆるおじさん達であった。

人間は、悠々自適の年金生活を夢見ているわけではない。人

間の欲の中で、社会のために、誰かのために役立ちたい思いを体现できるのが仕事である。好きなことをやり、好きなものをいくら食べてもその欲求が満たされる事はない。その仕事を失った喪失感を埋めるためにお金にすがったりする。男は船に乗って荒海を航海する冒険者であるが、いったん陸に上がれば、居場所も針路も見失ってしまう弱い生き物でもある。元気に最後まで自分の好きな仕事、好きな道を歩んで一生を終えたいと願う人は少なくない。

何年か前に、七四歳で亡くなる前々週までラジオの生放送のパーソナリティーをした芸人がいた。阿部もこの番組が好きで、毎週土曜日の放送を楽しみにしていた。最後となつてしまった放送の日の彼の声は、いつもの軽妙さはなく命を絞り出すような語りだったと記憶している。その芸人は常日頃、芸に命をかけていると語っていたものであるが、まさにその通りの生き様を見せた。毎週末八時から十七時までの生放送を三五年間続けられたことを羨ましく思う阿部であった。

担当者からのひと通りの説明が終わって、質疑応答の時間が設けられた。一人の男性が真つ先に手をあげて質問した。

「どんな仕事にでも転職は可能ですか」

担当者は、想定内の質問であつたようで、慌てることなく答えた。

「非合法的な仕事でない限り大丈夫です」

次に手を上げたのは、少し汚れた作業服を着た工員風の男だ

った。

「娘が来年結婚するので、見栄えの良いスーツで通勤する会社に就職したいと思うのですが、そんな理由でもいいのでしょうか」

担当者はニコニコして答える。

「理由は問いません。配置や労働条件は、雇用先との調整になりますが、必ず正社員としての身分は保証されます」

他にも次のような質疑応答がなされたが、担当者は淡々と答えて行った。

「何歳まで働けますか」

「基本的には、七〇歳までの雇用が保証されます。職種や健康状態によつては、それ以上に働く事も可能です」

「年金の件を再確認させてください。本制度で働く人は、受給開始が七〇歳になるとのことですが、継続して働く事ができた場合はどうなるのですか」

「その場合でも七〇歳から受給できます。ただし、所得によっては減額される場合もあることに留意してください」

「就職支援は、一度きりですか」

「法律による特別枠での再就職は一回のみです。再度の再就職については、自己責任でお願いします。ですから、エントリーシートに記載は慎重に願います」

最後に質問したのは、痩せ型で丸いメガネの学者風の男性だった。

「会場内を見る限り女性の参加者がどなたもいらつしやらないようですが、女性は適用外なのでしょうか」

口ぶりからすると、知っていて確認の意味での質問のようだった。

「この法律に男女の区分はありません。ちなみに第三号被保険者にも権利が発生することを念のため付け加えていただきます」

会場内の男だけで盛り上がりつつある雰囲気を感じたようなやり取りである。長年会社の株主総会を仕切つて来た阿部は、そこにサクラのにおいを感じた。

最後にパンフレットに挟み込まれたエントリーシートの提出についての説明があつたが、事務手続きがいたつてアナログなのである。今時、確定申告でさえ、パソコン入力で自宅からでも可能である。法律制定から施行まで短期間であつたため、システム開発の予算措置もままならない状況で、かつ不確定要素が大きいため、施行元年は力で乗り切る方針である事を担当者は力説した。エントリーシートの提出窓口は、ハローワークに設置されていて、明日から受付可能であることが告げられて説明会は終了した。

これをチャンスと捉えるか、今更何だと考えるかは人それぞれであろう。このまま、六五歳まで雇用延長して年金生活に入るのがこれまでの主流である。阿部は、今の会社の仕事は嫌いではない。優秀な部下にも恵まれて充実した会社生活を送つて

いる。でも頭のどこかで家族のため、生活のためと自分に言い聞かせて働いて来たことも否定できない。

田舎で育った阿部は、保育園の通園で乗る路線バスの運転手になりたいと思った。時には車掌さんになって切符を切るのもいいと思った。それ以降はテレビの影響が大きく、ドラマの主人公のパイロットや刑事、医者や弁護士、スパイにも憧れた。歌手のオーディション番組が全盛期の頃は、歌手を夢見たこともあったが、残念ながら地元で開催されることはなかった。漫才ブームが起きれば、コメディアンに憧れもした。人前で話す事が嫌いではなかった阿部は、アナウンサーになりたいと真剣に考えたこともあったが、中学、高校と進学する中で、自分の学力を知るようになると職業の選択肢も限られて来る。何とか県内の大学には滑り込んだが、その時点で華やかな未来への道は、極めて細いものとなった。都会に憧れて、今の会社に入社できたのは、運が良かったと言うべきである。

阿部が帰り道を歩きながら色々と思いを巡らせていた時、ふと中学校時代の記憶が蘇った。いきなり、あの日に体育館で観た演劇のことが思い出されたのだった。何という劇団かは忘れてしまったが、演目は『あゝ無情』であり、今流に言えば、『レ・ミゼラブル』である。主人公が出て来て自己紹介する。

「私の名前は、ジャンバルジャン」

すると相手役がすかさず、

「なんだか、海苔の名前みたいだな。上から読んでも山本山、下

から読んでも山本山」

会場が笑いに包まれる。その当時、同じ苗字の綺麗な女優さんがやっていた海苔のテレビコマーシャルの一コマである。その女優さんは今でも美しいままで時々テレビに出ている。夏の体育館の舞台で、役者が汗をほとばしらせながら演じる物語に引き込まれた。幕が下りた時のあの感動は今でも心の片隅にあった。下校時に親友の藤森と劇の冒頭の自己紹介の場面を真似しながら帰った。

「私の名前は、ジャンバルジャン」

と阿部が言う、

「私の名前は山本山」

と藤森が応じた。それを何度も繰り返して、二人で笑った。そして、二人で同時に叫んでいた。

「舞台に立ちたい」

親友と二人で将来の夢を語り合った青春の一コマを阿部は思い出したのだ。阿部も藤森も人前に積極的に出たがる性格ではない。むしろ大人しいタイプの人間だ。しかし、役者に憧れた自分がいて、隣には親友の藤森がいたのだ。それだけ、あの日の舞台は二人の心を大きく揺り動かしたのだった。

その藤森とは高校が別になり、家も離れていたことから会うこともなくなった。しかも、三〇歳を過ぎたばかりの頃に病気で亡くなってしまったのだ。田舎で営まれた親友の葬儀には参列できなかった。ちやうど会社の株主総会の時期と重なってし

まったからだ。

阿部は居ても立つても居られず、次の土曜日にハローワークに行つて相談する事にした。窓口は朝九時からの受付である。

阿部は、入口を入つてすぐの発券機のボタンを押して整理券を受取つた。通常の業務は休みなので、待合室には三人の阿部と同じぐらいの年齢の男が座つてゐる。阿部にとつて、ハローワークに来るのは今回が初めてである。入口を入つた左手には多くのパソコンが並べられたエリアがある。職を求める者が、自分で就職情報を検索できるようになっている。阿部は、幸い今までの人生でここを利用することはなかった。世の中には、自分の知らない仕事もあるのだから、自分が本当にやりたい仕事に就ける人は少ないのではないかと思ふ。

放送で阿部の番号が呼ばれ、奥の三番の個室に入るように誘導される。少し緊張してドアをノックすると中から声が掛かつた。

「どうぞお入り下さい」

恐る恐るドアを開けて室内に入る。そこには、説明会場にいた七三分けで黒縁メガネの彼が座つていた。

「どうぞお掛け下さい」

担当官に言われて椅子に座る。

「担当官のしんどすすむです。よろしくお願いします」

机の上には『新道進』と横に書かれたプレートが置かれていた。ここまで仕事の内容と名前が一致するのもめずらしいので

はないかと阿部は考え、初対面ではないことに、少し安堵して緊張がほぐれた。

「阿部弘です。よろしくお願いします」

新道担当官は、手元のキーボードを叩いて、

「深堀商事の阿部さんでよろしいですか」

と確認して来た。黙つて頷くと、

「満六〇歳の誕生日は、九月二十八日ですね。再就職は来年の四月一日になります。ちなみに今の会社の定年退職日は、いつになりますか。会社によって扱いが違いますので教えていただけますか」

「わが社は、年一回の三月末日です」

と阿部が答える。

「わかりました。そうしますと阿部さんの場合は、仕事をしながら再就職手続きをする事になるので大変だと思ひますが頑張ります。本来ならば、五八歳の誕生日を基準日にして手続きに入りますが、今回は法律が施行されたばかりで、迷惑をお掛けします。ところで最初にご確認しますが、阿部さんは就職支援を希望されるという事でよろしいですか。支援の希望は、ご本人の自由ですので」

新道担当官がここまで一気に話した。

「一応希望したいと思つてここに来たのですが、その前に少し相談してもよろしいでしょうか」

阿部はようやく自分の意図を話す事が出来てほつとした。

「どうぞ、どうぞ何でも相談なさって結構ですよ」

新道担当官は、にこやかに言った。阿部はそれに少し安心して、思い切って聞いてみた。

「あのー、役者になりたいのですが」

一瞬、新道担当官の表情が強張ったように見えたが、次の瞬間ニコツと笑って、

「大丈夫ですよ。必ず役者になれますよ」

と力強く言ってくれた。

「役者と言っても歌舞伎、映画、テレビドラマ、舞台など色々ありますが、どの分野を目指されますか」

新道担当官の質問に阿部は、中学の思い出を語って、

「舞台に立ちたいと思います」

とはつきり答えた。すると新道担当官は、

「わかりました。そういう事なら、どこかの劇団に所属するのがいいですね。大小様々な劇団がありますが、役者一本で食べて行くのはなかなか大変なことで、収入面は厳しくなりますが、その点は大丈夫ですか」

「はい、その点は大丈夫だと思います。子供たちも全て手を離れていますので」

と、阿部は言ったものの、その時妻である英子の顔がふっと顔をよぎった。英子にはまだ話していないのだった。

「劇団季節など、どこか希望する特定の劇団があればおっしゃって下さい。国家権力をもって必ず入団させることができます」

ただし、入団後については、ご本人の能力と努力次第です」

新道担当官から出た国家権力という言葉に阿部は衝撃を受けた。今まで権力というものを少なからず嫌悪していた阿部だった。そんな自分が国家権力によって夢を叶えようとしていることに戸惑いを感じた。

「特にここがという劇団はありませんが、中堅の劇団がいいかなと思っています」

と、阿部は少し控えめな返答になった。

「わかりました。三か月お時間を下さい。都内の劇団を探してみます。ある程度、経営基盤がしっかりした大手芸能プロダクションが運営している劇団がいいでしょう」

阿部は、新道担当官の力強い言葉に後押しされて、早速その場でエントリーシートを書いて提出したのだった。これで何だか夢の役者人生に大きく近付けたような気がして、気分も高揚して来る。来週からの会社勤務も今までとは違ったものになる予感がする。

それからの阿部にとっての三か月は長かった。一日が過ぎるのが小学生時代の感覚に匹敵する程の長さだった。近年歳を取るごとに月日の流れが速く感じられるようになっていたが、その理由はワクワク感の減少によるものらしい。阿部にとっては、気の遠くなるほどの三か月であった。

阿部は、会社への再雇用の申請を取り消したが、会社の誰にも未だ役者になる話をしていない。人事部からは理由を尋ねら

れたが、一身上の都合で通した。もちろん妻には事後承諾にはなつたが、窓口に行ったその日の夜に話して了解をもらつた。

「今まで家族のために真面目に働いて来たんだもの。それもいいんじゃない」

ずいぶんとあつさりした妻の反応であつた。世の中では、子供が芸能界を目指すと云つた時には、ほとんどの親が反対するという。子供の将来と定年後の将来では、判断基準が違うのかも知れない。

英子は、基本的に相手の意見を尊重するというか、物事の選択に迷つたりしない人間である。

「人間同士の意見の違いなんて、核ミサイルのボタンを押すこと以外は、結果に大差はないのよ」

これが英子の口癖でもあつた。そう言えば、数年前の冬季オリンピックのカーリングで日本初のメダルを取った女子チームが作戦を話し合う時の会話の中に『そだねー』という同意を示す言葉が多用されて注目を集めた。北海道の北にある町のチームだった。英子も北海道の出身で、三人姉妹の長女である。自然の厳しい、特に冬の寒さの厳しい地において、いつまでもあーだ、こーだと議論するより行動に移す方が先なのかも知れないと阿部は思ふのだった。

英子は、幼稚園の父兄会の役員や小中高のPTA役員を引き受けて、何かと出かけることも多く、ご近所付き合いはもとより、地域の方々との付き合いを大切にしていた。一方阿部はと

言えば、朝早くに家を出て帰りは八時ごろになる生活のため、ご近所と顔を合わせることもほとんどなく、せいぜい向かいの佐藤さんのおばあちゃんの顔を識別できる程度である。

七月に入つて間もなく、阿部のところに新道担当官から候補の劇団が決まつたので、都合の良い日に窓口に来て欲しいとのメールが届き、すぐに次の土曜日に行く旨を返信した。

いよいよ待ちに待つた土曜日に阿部はハローワークに向かつた。約束の時間ちようどに新道担当官の部屋のドアをノックする。部屋に入ると新道担当官が笑顔で迎えてくれた。

「阿部さん、長い間お待たせしました。入団可能な劇団を見つけてましたよ」

候補は二つあり、一つは大手芸能プロダクションが親会社となつている劇団Aである。阿部でも名前を知っている有名な劇団である。もう一つは、中堅の広告代理店が運営している劇団Bである。こっちの方はあまり聞いたことがない名前である。いづれも事前に体験入団が可能であるらしい。阿部は、夏休みを利用してそれぞれ三日間ずつの体験入団を申し込んだ。

いよいよ劇団Aの体験入団初日である。劇団事務所の最寄駅から徒歩数分のところに劇団が使用するビルがあつた。二階の事務所に上がつて支援機構からの紹介状を担当者に手渡した。担当者は事務的に受取つて奥にいる上司に見せた。何かしら小聲で指示を受けた担当者が、阿部を劇団の稽古場まで案内してくれた。その途中で名刺を渡されて、阿部は初めて担当者の名

前を知った。劇団広報、杉山幸男の名前が印刷してある。会話もなく、阿部は杉山の後を付いて行く。稽古場には男女合わせて三十人ぐらいがいて、それぞれに柔軟体操やストレッチで体をほぐしている。広報の杉山が、パンパンと手を叩いて、みんなを集める。

「ハイ、みなさん。一回手を休めて集合してください」

機敏な動作で杉山の前にみんなが集まる。みんな若く、阿部は今更ながら場違いなことに気付かされる。そんなことは、ちよつと考えればわかる事だったではないかと少し後悔し始めた阿部の思いとは関係なく、杉山は阿部のことを紹介するとさつさと事務所へ引き上げてしまった。一人残された阿部は、勇気を振り絞つて挨拶する。

「阿部弘と申します。もうすぐ六〇歳になります。よろしくお願ひします」

パラパラと拍手が起こり、その事からもあまり歓迎されていないことが感じられる。阿部は、動きやすい服装に着替えて部屋の隅っこでラジオ体操をして、二巡目に入った頃、発声練習が始まった。

「あえいうえおおお、かけきくけこかこ」

全員が同じ速さで発声している。腹式呼吸を意識し、滑舌に気を付けながら皆真剣である。華やかなスポットライトを浴びて舞台に立つには、こうした地道な練習の積み重ねが必要である事を改めて認識した阿部であった。阿部がこれから挑戦しよ

うとしているのは、学生のサークルや素人劇団ではない職業としての役者なのだ。昼休みを挟んで、台本読みや基本的な動きの練習が十五時まで続いて、解散となった。それだけでヘトヘトである。

二日目は、十月に予定されている公演の稽古場での見学である。例によつて、広報の杉山はさつさと帰ってしまったので、阿部はすかさず挨拶して見学の位置に付いた。昨日とは部屋の空気感が違う。よく見ると役者の中には、テレビで見覚えのある顔もいる。流石に若く熱のこもった演技である。時々、演出家だろうか、手をパンパンパンと叩いて演技を止める。

「それじゃ何も伝わってこない。お前の想いはそんなものなのか。全てを吐き出せ。体でぶつかって来い」

言われている若者は、気を付けの姿勢で真つ直ぐに話している相手の目を見ている。

「ハイ、もう一度」

演出家が手を叩く。瞬時に、演出家の意図を理解して演技に反映しなければならない。演じるという事は、瞬発力を要求されるのである。それ以後も何度もダメ出しが繰り返された。後で聞けば、演出助手による指導であつたようだ。演出家は、通し稽古に入つてからのお出ましになるらしい。稽古は、場面ごとに行つて、初めて全員が顔を合わせるのはゲネプロの時、主役級の役者の合流は、ギリギリになることが多いらしい。

三日目は、ダンスと歌のレッスンに参加させてもらった。特

に運動らしい運動をして来なかった阿部には未知の世界であった。スキップもできない阿部は、リズムに合わせ体を動かすなんて絶対無理な気がした。カラオケにはちよつとだけ自信があったものの、楽譜を見て初めて歌う曲は、どうにも悲惨である。楽譜を読めない事はもちろん何より最初の音が取れない。

散々な三日間の体験入団を終えて、阿部の役者への熱意は、すっかり冷えてしまった。

阿部は、次の体験入団までの日々を後悔と不安の中で過ごした。

（何で役者になりたいなんて考えてしまったのか。番組制作会社や映画会社のスタッフでも十分に満足できたのではないかな。そもそも再雇用に応じて、今の仕事を続けたほうが何の苦勞もなくて良かったのではないかな。もし役者をしたければ、どこかの市民劇団で趣味としてやる道もあったのではないかな）

そんな思いが、阿部の頭の中でぐるぐる回っていた。

そして、ついに二つ目の体験入団の日が訪れた。劇団Bは、都心からだいぶ外れた所にあるどちらかと言えは小さな劇団であり、小劇場を中心に活動している劇団である。中堅の広告代理店が出資しているが、基本的には独立採算制を取っている。地方公演もあり、年間の公演回数は多い。専属の役者やスタッフも限られている。しかし、実力は評価されており根強いファンに支えられた劇団である。

事務所兼稽古場は、昔デパートだったビルの一角にあった。

鉄筋コンクリート造りの三階建ての古い建物である。阿部が扉を開けるとホールに二〇人ほどが集まっており、各々体をほくしていた。おずおずと中に進んで声を掛ける。

「あのー、阿部と申しますが・・・」

四〇歳代ぐらいの大柄の男性が、阿部に気付いて近付いて来た。

「ようこそ、阿部さん。お待ちしていましたよ。歓迎します」

思いがけず優しい対応にほつとした阿部は差し出された右手を思わず両手で握ってしまい、慌て引つ込めた。

「みんな、ちよつと集まってくれ」

男性が大きく声を掛けると全員が集まった。

「今日から三日間、体験入団する阿部さんだ。仲良くやってくれ」

阿部は、なんだか小学校の転校生の紹介みたいで恥ずかしかった。

「それじゃあ、順番に自己紹介してくれ」

と言う男性の指示で自己紹介が始まった。

「オレはユージ。よろしく」

「私は、キャサリン。よろしくね」

それは、名前だったり、ニックネームだったりで、お互いが普段から呼び合うものだった。最後に男性が、

「僕は、この劇団の一応代表をしている高村です。みんなからはタカと呼ばれている。阿部さんは名前がヒロシだから、今日

からヒロと呼ぶ事にします。ヒロ、よろしく」

何だかダンスユニットの代表者みたいで照れるが、阿部としては了解するしか仕方がなかった。タカが右手を出したので、阿部もそれに合わせて、今度はしっかりと握手を交わした。そして、みんなに向かつて声を出す。

「ヒロです。仲良くしてください」

阿部が着替えてみんなのところに合流すると若い女性が駆け寄って来た。

「ヒロさん。私はユイナです。よろしくお願いします」

いきなりの急接近で、少しドキドキしたが悪い気はしない。

メンバーは、代表のタカを除けば皆さん若い人ばかりだが、照明や大道具などの何人かのスタッフには五〇代もいるようである。この分だとこの劇団では阿部が最年長になってしまう。でも、そんな歳の差なんて気にしない周りの対応が心地良かった。自分で何かを表現することの難しさ、何よりも自分の体を自分の思い通りに動かすことの難しさを阿部は再び思い知らされた。感情を表現するのに声も動きも自分の中で考えたようにはならない。前の劇団と違うのは、初日から阿部に声を掛けてくれたことだ。

「ヒロ、なかなかセンスあるよ」

阿部は、そんな言葉に励まされて、様々な練習メニューに集中して挑戦できたのだった。もしかしたら、阿部のための練習メニューを組立ててくれたのかも知れない。

自分の片腕を刀に見立ててスローモーションで戦い合ったり、何人かのグループに分かれて、来る・去る、のト書きだけの条件で即興の芝居を作ったりと初めての経験だらけだった。二人の人間が向かい合って立った時に、頭の上下の位置関係だけでも二人の関係性や周囲の状況が変化することも体験した。面白かったのは、五人ずつのグループに分かれて、いきなり出されるお題を即興で一人ずつ順番に前に出て形で形を作って五つのパースで表現したものをお互いに当てっこするゲームのようなものである。

グループ分けでは、ユイナが阿部を誘いに来てくれたので仲間はずれにならずに済んだ。もちろん他のメンバーも気さくに初対面の阿部に接してくれた。

ユイナは、色々と阿部の面倒を見てくれて様々なことを教えてくれた。ユイナの苗字は藤川で、名前は結ぶに菜の花の菜と書くこと、北海道出身の二五歳で、高校卒業と同時に地元のデパートに就職して演劇サークルに所属していたが、二十歳になつて思い切つて都会に出て来たことなどを一緒に昼食を食べながら話した。現在はこの劇団の研究生で、夕方から居酒屋でアルバイトしていることも話してくれた。阿部は、色白の目がクリツとした愛嬌のある結菜と話していると娘というような錯覚を覚えたが、結菜の方も父親の姿に重ねていたのかも知れない。三日目の練習が終わって、帰り支度をしている阿部に結菜が話し掛けて来た。

「阿部さん、この三日間楽しかったです。これから一緒に出来たら嬉しいです」

「ありがとうございます。こちらこそ楽しい時間でした。お世話になりました」

阿部と結菜は、お互いに手を振って別れたのだった。

総務部で阿部が若い頃からお世話になったベテラン女性が話し掛けて来た。

「舞台に出る時は、教えてください。必ず見に行きますから」

その時、マナーモードにしていたスマートフォンが胸ポケットで震えた。きっと、結菜からのLINEだろうと阿部は思った。入団を決心して劇団に顔を出した時に交換して連絡を取り合っているのだ。英子とは同郷なので、家に招いて食事をするなど紹介済である。結菜も四月からは、研究生を卒業して劇団員に昇格する。

四月に入ると、街では真っ黒に日焼けした精悍な顔の男たちがスーツを着て通勤する姿を見かけることが多くなった。その姿は、どこか入学したての小学生みたいにぎこちなく見えたりするが、目はしっかりと前を見て輝いている。それとは逆に色白のひ弱な感じのする人たちが工事現場で汗を流していたりする。今まで屋外で働いていた人が机に座り、その逆のことも起きているのである。まさに職業の循環が生まれ、社会が活気付いたように感じられる。

劇団に通うようになった阿部は、ジーパンとジャンパーとい

うラフなスタイルである。午前中は、親会社から回って来る広告の仕事をする事が多い。広告と言っても早い話が街頭でのテイスシュやチャシ配りである。阿部にとってそれは、初めての経験であるが、やり始めると意外に奥が深い事に気付かされる。いかに歩いている人に受け取ってもらえるかが重要だ。ただ立っていたのでは通行人はよけて通つてしまう。右往左往していは、通行の邪魔になるだけである。通行人の足を止めないようにして右斜め後方から静かに近づき、追い抜きざまに笑顔で言う。

「よろしければどうぞ」

と同時に腰よりやや高い位置に渡すものを差し出す。反射的に人は受け取ってしまうものだ。そうしたら、最初の二倍の笑顔で言う。

「ありがとうございます」

もちろん、受取りを断る人もいる。でも、そんな時には、最初の三倍の笑顔でその人の背中に言う。

「この次はよろしくお願いします」

その人は、次の機会に受け取ってくれるかも知れない。何より自分のモチベーションが下がるのを抑えてくれる効果があり、次の相手に立ち向かう勇氣につながるのである。

仕事に慣れて来ると人間観察する余裕も生まれた。一人で歩いている場合、顔に表情は現れにくい。数人のグループで歩いていた女子高生が仲間と別れて一人になった瞬間に、無表情に

なつて、スマホをいじり出す。

そんな人の心の内を読み取る事ができるのは古代ローマの神ヤヌスであれば簡単な事であろう。しかし、ヤヌスならぬ阿部は、歩く速さやテンポなどから読み取る事を考えた。これは、演技を勉強する上でこの上ないメソッドとなるのである。

午後は劇団の練習が中心となる。基本練習の後は、次の公演に向けての稽古となるが、特別枠での入団といっても初めから役をもらえる訳がない。それは、お世話になった新道担当官からも言われていた事である。太道眞の手伝いや雑事に追われる。それは結菜も同様で一緒に作業はどちらかと言うと楽しい時間である。そうそう、正式に入団してからの阿部の呼び名を「アベさん」にしてもらった。やっぱり「ヒロ」は阿部には似合わない。

半年が過ぎて、阿部にもようやく役が付いた。セリフのない通行人の役だ。もらった台本にはト書きだけが記されていた。

—男が一人、下手から上手へ歩き去る—

出番はその一回限りである。阿部は考える。この男は一体何者なのかと。ここで大いに参考になったのは、あのティツシュ配りの時の人間観察の経験である。歩き方は一人ひとり異なる。その証拠に、防犯カメラに映った映像の歩き方で個人を特定できるシステムがあるのだと、科捜研を題材にしたテレビドラマでやっていった。何度も演出家からダメ出しを受けながら初舞台を無事に終えることができた。地方公演だったことを言い訳に

して、退職した会社の仲間には連絡しなかった。英子は観に來たいようなことを言ったが、阿部は固辞した。英子も今では宅地建物取引士の国家資格を取得して不動産事務所の主力として忙しい日々を過ごしている。

年が明けて来年度の公演計画が発表になった。北海道での学校公演である。この劇団はその取組みに力を入れていることは入団前に説明を受けていた。演劇を観る機会が少ない地域の小中学校をまわるのである。今年の夏は北海道でのロングラン公演になる。演目は、ロミオとジュリエットである。イングランド出身の劇作家のシェークスピアの有名な作品だ。第二幕第二場の、

「おお、ロミオよ、ロミオ、どうしてあなたはロミオなの」
のバルコニーの場面が有名である。テレビコマーシャルやコントなどで使われることが多いため、題名や一部の場面は知っていても物語の内容まで知る人は少ない。

「ああ、一生に一度でいいからジュリエットを演じてみたい」
結菜が目キラキラさせている。

「その時は、私がロミオをやるう」

そう言おうとした阿部だったが、止めた。阿部は中学時代に観た舞台を思い起こしていた。あの舞台が阿部を今の演劇の世界に飛び込ませるきっかけになったのだから。

今までの公演で回った場所を知りたいと思った阿部は結菜に聞いてみた。

「倉庫の奥の書棚に、今までの台本と一緒に公演記録が保管されているわよ」

阿部は昼休みに教えてもらった倉庫に行ってみた。倉庫内は、ホコリにまみれてはいたが、劇団の歴史だと思えば、そのホコリも微臭さも気にならなかった。年代順に整理されていて、阿部は何気なく自分の中学時代の年代の資料を手にとってみた。そこには、

『場所・興田中学校、演目・あゝ無情』

と記されていた。阿部の通った中学校の名前だった。

「この劇団だったんだ」

半世紀近くが経過して、阿部はようやく夢の原点に巡り会ったのである。

「アベ、アベーツ」

そのとき、阿部は誰かに名前を呼ばれたような気がした。そして、一緒に行こうと誘われたような気がした。その声は、藤森の声に違いない、と阿部は思った。

昭和期の回想

園部 敏恵

：シキユウ カエレ：

昭和19年、太平洋戦争末期、東京の嗣子^{つぐこ}に宛てた母みどりの電報である。

連合軍は日本の本土空襲を本格化していき、20年春からは大規模な戦略爆撃となり、各都市へ無差別爆撃を展開していった。

東京は空襲警報のサイレンが鳴り響き

【ゴッゴーツ】と、

重く大地を揺るがすB 29の編隊が大挙して夜空に飛来し、空全体が爆音で震えた。

機体から射出したユラユラと光る爆弾が、空中で炸裂すると強烈な光を放し、あたり一面を昼間のようにパツと明るく照らした。

【照明弾】である。

直後にザーっという異様な音と共にスコールの様な切れ間のない【焼夷弾】が落とされた。

水では消火できない油脂を含んだ焼夷弾は、辺りを火の海と化し逃げ惑う人々は近場の防空壕へ避難するという日々が頻繁

になっていった。

そんな中、電報を受けた嗣子^{つぐこ}はとるものも取り敢えず国民服のモンペに大きな背囊^{はいのふ}（リュック）を背負い、雑囊^{ざふ}を提げて上野駅へ向かった。

東京の「北の玄関口」と言われる

『上野駅』

夜行列車は、薄暗い行き止まり式のまるでコンクリートの箱の隅のようなホームで、東北方面・上越方面・信越方面への北へ向かう列車は整然と並行して並び、各々のレールで出発の時を待っている。

故郷から上京してきた北国の者にとつてこのホームに佇むと感慨深い思いが湧き上がるのであった。

【ふるさとの 訛^{なまり}懐かし停車場の

人ごみの中に そを聴きにゆく】

啄木の歌であるが時は戦時中、嗣子^{つぐこ}はそういった感傷的な気分浸っている場合ではなかったのだが。

その少し前の昭和18年、日本鉄道会社の「決戦ダイヤ」と銘

打ったダイヤ改正が行われ旅客列車は削減されていった。

それは、当時大戦が拡大するにつれ石炭の需要が急激に増大し、その輸送に列車が使われ旅客列車の削減が行われた。軍需物資の輸送や発電の動力も、全て石炭火力で賄われ、主に北海道と九州で採掘された石炭は国内唯一の自給可能な戦略物資であった。

輸送コストの安い船で送り出されていたが、アメリカの潜水艦攻撃を警戒して、航路迂回などで効率が悪化し、撃沈による絶対数の減少もあって石炭輸送は、海運から鉄道へと転換されていったのである。

限られた線路に大量の貨物列車を走らそうとすれば旅客列車を削減する他はなく、東北本線などの長距離列車は間引きされ上野駅の混雑はますます激しくなっていた。

夜行列車は、固く狭い直角の座席で夜間には窮屈な姿勢でまんじりともせず、寒くて長い夜は更けていくのであった。

15・6 時間で青森駅到着

津軽海峡から風が吹きつけるホームに降り立ち、連絡船の待合所に続く階段を疲れ切った乗客たちは無言のまま、ぞろぞろと歩いていった。

本州と北海道を結ぶ、唯一の交通インフラである青函連絡船旅客を運ぶより重要な任務。

それは、日本の産出量の三分の一を占める北海道の石炭を本州へ運ぶ大動脈であった。

船内には線路が備えてあり、そのまま石炭を積んだ貨車を詰め込めるように、設計されていた連絡船が何艘もあった、という極秘情報。それは戦後、海底に撃沈され引き上げ時に判明した事実であった。

何とか無事に危機を逃れて郷里の旭川へ一時帰郷した嗣子は当時十七歳、黒髪の三つ編みを両肩に提げた、T女子医専の一年の頃であった。

その頃、高等女学校は五年制で昭和2年2月生まれの数え年十七で北海道を離れ、医専へ入学した当初は、まだ戦況はひび迫していない時期であった。

出立の日、母みどりは嗣子を送り出すときに、家の玄関先の石をめがけて思いっきり

「バーン」と盃を打った。

『盃割り』である。

盃を石めがけて投げ、叩き割って、厄除けをしたのである。一人長い往路に向かうこの先の無事を願ったのであろう。

入学した当時、韓国や大陸からの留学生もいたが、戦況があやしくなつてからは本国へ帰国したという。

一時帰郷した嗣子は、昭和20年3月10日の東京大空襲の戦禍を免れ、終戦を迎えてからは東京へ戻り、医師となつて北海道へ帰郷し旭川市内の病院の勤務医となった。

東京時代、嗣子には将来を約束した人がいた。しかし、父は首を縦には振らず、母も悲しそうにし、口を開かなかった。

嗣子は両親の反対を押し切って家を出て、東京へ行く決心をし玄関先まで来た時、その覚悟は錯綜した。

「この家を出たら、父さん母さんはどうなるだろう。戦時中の混乱期、決して裕福とは言えない家計の中から、工面して大学の学費や仕送りをしてくれた両親を置いて、東京へ行き幸せな気持ちで、毎日を送れるだろうか。」

そして、

「東京で待っている人は、どうして家に来て両親を説き伏せ、自分を迎えないのだろうか。」と、自問自答し、その覚悟は思いとどまった。

東京の人は、代々受け継ぐ病院のひとり息子であった。

嗣子は、北海道に留まる決心をした。

そして戦時中、大学在学中に往路の列車内の向かいの席で知り合った学生で、後に新聞記者となる貞吉と結婚し、子をもうけ「京」と名付けて育兄は母に託し、当時としては数少ない女医として病院に勤務した。

成長した京はその話を聞き、今は馬車馬(母の自論)のように仕事一筋に働く母に、そんなロマンスがあったとは、「事実は小説よりも奇なり」と、当時中学生の京は、鮮烈な衝撃を受けた。

戦後、市民の乗り物は自転車であった。

しかし、誰もが手軽に乗り、さらに高速で輸送効率の高い乗り物を求め高価な車に比べ手軽なスクーターは、その時代にマッチして人気を呼んだ。

そのデザインは、軽快に飛び跳ねるウサギの姿を連想させ「ラビットスクーター」という愛称で爆発的な人気を博し、市民の足となった。

時を得た乗り物に、卯年の嗣子はスクーターで通勤に、往診に精力的に仕事をした。

当時の家は古い木造であった。

板間の台所には手押しポンプにタイル製の四角い流し台があり、台所から続く廊下の左片側の縁側は、真っ黒い石炭が小高く積まれた外小屋に面していた。

昭和の時代の燃料庫である。

玄関脇の部屋は祖父幸太郎の仕事場、二階は茶華道家の祖母みどりの稽古場であった。

京は、日中は祖母のみどりと居ることが多く、稽古の日も、そこで過ごした。

二階は、大きな窓から日差しが入る明るい畳敷きの広い部屋である。

華道の稽古日には、階段入口に用意したバケツに生け花用の花束がいくつもあって、お弟子さんは好みの物を選び、二階へ上がって細長い座草の敷台に並んだ水盤の花器を選んで、その前に座り静かに生花を生けるのである。

茶道の日には、京は水屋で袱紗の畳み方や茶巾の絞り方をお弟子さんに教えてもらい、時には向かい合って一緒に、手遊びをするのだった。

「おちやらかホイ」「ずいずいずつころばし」等々。この頃は、人も時間の流れもおおらかであつた。

この二階の稽古場の大きな窓から外を見下ろすと、家の前の黒い踏み固められたデコボコ路を雑品屋のおじさんが、

「カランカラン」と、真鍮しんねうの振り鐘を鳴らし、リヤカーを曳きながら

「屑やゝあ、お払い」と、小気味よく街頭宣伝して通り過ぎた。

又、荷台付き馬車に乗った御者が

「ドウドウドウ」と手綱を曳いて馬を馴らし、時にはボトンと馬糞を落として行くのを眺めていた。

夕方を過ぎて、特有の車の排気音を聴きつけると、京は窓へ駆け寄り階下の音のする方を探すのだった。

母、嗣子のスクーター音である。この窓からの景色を日に一度は眺めていた。

日中、祖母が留守の日は、主に母の八歳年下の叔母の弓子が京をみていた。

ある時、押し入れに隠れ「かくれんぼ」をしていたが、何時までたつても鬼役の叔母は現れず、待ちくたびれて襖戸を開けようとしたがビクともせず、閉じ込められた不安に駆られ隙間の明かりを覗くと叔母が両手でしつかり押さえている。

「出して！」と、力一杯引いても状況は変わらず大声で叫ぶと、突然手を放し、

「ギャツ」と叫び、脱兎だつとのごとく階下を駆け下りていった。押し入れから飛び降り、追い駆けて階段の上段にしゃがみ込

み「弓子のバカーツ!!」と階下へ逃げ去った叔母に向かつて、悔し涙にむせぶ声を張り上げて、叫んだ。

叔母と京は十八の年の差があつたが、京は時に叔母の「いたずら」とも、「いじわる」ともいうような対象になつた。

また、幼稚園の参観日には、

「若いお母さんね」と、いわれたことが不本意だと言うような事を夕飯の時に語っていたが、それでも、夜間の近所の火事のサイレン音が近くまで迫ってきた時、怖くて怯えている京に、「大丈夫だよ」と、添い寝をして気持ちを鎮めてくれたのだった。

叔母は、東京の短大をでて、二十歳を過ぎたばかりの頃である。

ある時、その同窓の友人が綺麗なワンピースの装いで

「弓ちゃん、出かけない？」と、誘いに來た時、叔母は大きなタライを前にしゃがんで洗濯をしているところだった。その後は、一緒に出かけたかどうかは、定かではないが友人と遊びたい年頃である。

それも働く家庭の事情であつた。

父の貞吉は、単身赴任で札幌の新聞本社に勤務していた。

週末には帰ってくるのだが、就学前の京にとって父はとにかく

く、怖かった。

特段しつけの厳しい家ではなく、自由気ままに叱られる事もあまりなく、のんびりと過ごしていたが、父が帰ると京の空気は一気に張り詰めた。

幼少時には喘息もちで食が細く、缶に入った当時一家に一缶の常備薬「エビオス（整腸剤）」を祖父はスプーンですくって、あんぐりと開けた京の口に振り入れ、服用するのが日課であった。

が、そこへきて週末に現れる父は

『遊びながら食べるな』

『残さず食べよ』と諭し、だんだんと窮屈になってきて、ぐずりだすのだった。

しかし、それは日本の食事作法の「正しい躰」であるのだが、日頃、言うことを聴かない反抗的な時もあり、そういう時は、祖父は握った拳骨に

「ハーツ」と息を吹きかけて、スローモーションで「ゴツン」と、拳固が下りるのだが、貞吉は拳固ではなく憤りがそのまま直球となつて「パキン！」と、張り手が飛んで来るのである。泣きじやくつて抵抗する京を、有無を言わず押し入れにドンと入れ、襖をしつかり閉め切り、京はついには泣き疲れてしまい、そのまま押し入れで寝入ってしまうのだった。

そういった事がトラウマになってしまったのか、父は恐怖であつた。

婿養子に入つた父だったが、祖父との折り合いが今ひとつだったと、子供ながら感じていた。

後に成長して父の気持ちを考えてと、心の葛藤や、どうにもならない辛い思いがあつたのではと思う。

それでも父は、平日の仕事場である札幌に戻ると親兄弟も近郊におり、精力的に仕事に打ち込んだ。

新聞本社の秘書課長の役職は、社長の信頼も厚く父の本領発揮の適職だった。

ある時、何の宴会だったか覚えていないが舞踏好きの祖母が踊り手達と輪になつて

「佐渡おけき」「炭坑節」を踊り、その後に続いたのは、「安来節」の唄に合わせて

「ドジョウ堀い」を踊つた父であつた。

豆絞りの手拭いを頬被りし、五円玉の鼻あてをつけ、ステテコ姿で箆を掬い身振り手振りも流暢に踊り、周りを笑いの渦に沸かせ拍手喝采であつた。

民謡も高く伸びのある声が響いた。

普段無口で、デンとテレビの前に座り、紫煙をゆるりとくゆらせ、報道番組を寡黙に観ている近寄りがない父の姿とは、想像できない一種の衝撃であり、週末にしか会わない父の別の姿を観たように思つた。

昭和一桁生まれは、軍国少年少女になるべく教育を受け、戦後は貧乏のどん底からモータレツに働き、日本復興の要になつた

世代。

頑固で寡黙だっただけに、その頃の私は、父の心情を汲み取るには幼すぎた。

またある休日の日、朝起きて玄関を開けると綺麗なコリー犬が正座していた。迷い犬である。

飼う事になったのだが、家にはその頃叔母は嫁ぎ祖母は亡くなっており、日中は中学を出たばかりのお手伝いさんがいるだけで犬の毛繕いもできず、大きな金網みの囲いの中にある大小屋は、床も汚れ金網みは抜けた毛がまとわりついた状態だった。

父が札幌から帰宅した週末の夜、犬舎から犬のトミーを出し、夜空の月の明かりに照らされた堤防に続く真つすぐな道を嬉しくて飛び跳ね、父にじゃれつく汚れた毛玉だらけのトミーを連れて散歩に出かけた。

その後姿を、京はずつと眺め、心底怖いと思っていた父の、一体何をもつてそう思ったのかと、幼いながら自分を顧みた。

ただ、寡黙な父と唯一距離が近くなるのは「耳かき」であった。

耳かき棒は、耳の中に入るとゴソゴソと動くたびに音が大きく聞こえ、心地よくなつて眠くなるのであるが、父の胡坐の真ん中に頭を置き、寝そべて横を向く姿勢でいると何の匂いなのか、靴下の匂いであろうか、不思議な匂いがするのだったが、しかし、それはジツと我慢である。

また、小学高学年の頃の夏休み、妹とふたり列車に乗り札幌

の父の社員用アパートに初めて泊りに行った。

ドアを開けると畳半畳ほどのビニール製の床材を敷いた玄関で、その正面はやはり半畳の台所で、卓上コンロの上にはフライパンが乗っていた。

その頃は急行列車は時間がかかった。

「疲れただろうから、少し寝なさい。」と細長いウナギの寝床のような部屋に敷いた布団に、妹とふたり背中合わせに横になった。

目の高さには小さな本棚があり、使いこなした料理の本が何冊も並んでいる。

料理は一切しない専業職業婦人に徹した母とは、対照的である。

普段、家にはいない父はここで誠実に生き、確かな父の世界があるのだと、その時感じた。

もともと父の先々代は石狩の開拓団で、石狩川の恵みを受け、馬を飼ひ農業を営んでいた。七人兄弟は自然の中で逞しく育ち、その中で父は苦学して、東京の大学へ進んだ。

東京へ往来する列車の中で、向かい合わせの席の母と出会ったのだった。

祖父との不協和音はどうか均衡を保ち、父は単身赴任のまま本社から子会社放送局の代表取締役を勤め上げ定年後、旭川の家へ落ち着いた。

祖父は健康長寿だった。ただ甘党でご飯の上に甘納豆を乗せ

白湯さゆをかけて、準お汁粉風茶漬け、納豆には砂糖をのせ真っ白く粘つくくなるまでこね合わせ、トマトにも砂糖であった。

それには父も辟易して納豆には醬油である。子供の目から見た甘党男子と辛党男子の静かな攻防である。

1900年生まれ（明治33）の祖父は、日本三景の一つである宮城県松島の風光明媚なところの出で、実家は大きな旅館を営み、北限の茶栽培もし多角経営をしていたが、大火に見舞われて被災したのである。

「小旦那こだんなっあん」と呼ばれ六人兄弟の末っ子で何不自由なく暮らしていたが、一家散り散りとなり母親とふたり北海道へ離散したのであった。

祖父は旭川の街中で順調に事業を興していた。しかし、世の中は第一次世界大戦の戦後不況が続く中、関東大震災がそれに輪をかけ国内は金融恐慌に陥っていった。

また、世界経済の中心であったアメリカの株価大暴落が発端となり世界恐慌に及び、日本では失業率が増大し、さらに冷害、凶作の大打撃を受け昭和恐慌となっていた。相次ぐ経済危機の煽りを少なからず受け、祖父の事業所は、閉鎖せざるを得なかった。

その後は、借家の一軒住まいとなり、その一部屋を仕事場としていた。

そんな中、祖父の趣味は狂言であった。

日頃、祖父の口ずさむ「七ツ子」という中世の頃の流行歌（小舞こまい

謡）を母と叔母は、「フリとフシ」を付けて膝を叩き拍子をとる祖父と三人一緒に口ずさんでいた。

所々意味が解らないまま、京も真似をして口ずさんだ。

―七つに成る子が 幼いたけなことゆた

殿がほしいと謳うたうた

そもさても我御料わごりょうは 誰人たれひとの子なれば

定家ていか葛かか 離れ難がたやの

川舟に乘せて 連れておりやるにや

神崎かんざきへ 神崎かんざきへ

そもさても我御料わごりょうは 踊り人が見たいか

踊り人が見たくば 北嵯峨きたさがへおりやれの

北嵯峨の踊りは 葛帽子つづらをしゃんと着て

踊る振りが面白い

吉野初瀬よしのはつせの花よりも 紅葉よりも

恋しき人は見たいものじや

処とこ又またお参りやつて 疾はやう下向げこうめされ

― 咎とがをばいちゃが負いましよ

これは、伝統的な歌曲「大歌おおうた」に対し、民間で歌われる世俗的な歌謡の狂言「小歌こうた」である。乳母が聴かせた歌である。

生活の中で耳に入る流し歌はいつの間にか覚えるものである。難しい歌詞でもなくテンポも単調で

「こども狂言」と言われるだけあって、口ずさみやすい歌であった。

アルバムにあった狂言の舞台に立つ祖父は、格子柄の着物に、庶民風の肩衣・袴姿で、片膝を床に付いて両手は互い違いに挙げ何かを止めるような恰好である。

という題目の狂言であつたのか聞いておけばよかったと、後になっての心残りである。京には記憶のない若いころの祖父の姿であつた。

記憶にある祖父は、仕事も第一線から退き悠々自適に日々を送っていた。

この頃、戦後復興をとげて豊かになった昭和30年代はデパートの黄金期であつた。買う物はなくてもデパートを巡るだけでも楽しかった。

玩具売り場を見て回った後は、最上階の大食堂で「お子様ランチ、ソフトクリーム」を食べ、屋上の遊園地で遊ぶのが、贅沢気分を味わたる夢のデパートパラダイスコースであつた。

「帰るよ」と言われても、やっぱりほしい玩具をもう一度見たくて駄々をこね、しゃがみ込んで祖父を困らせた。

高価なものは買わない祖父とのデパート行きのゴーサインは、いつも

「ソフトクリーム食べに行くかい」の一言であつた。

当時、デパート正面入り口の横に戦闘帽を被り白い着物を着た傷痍軍人がアコーディオンを弾き、募金用の皿を前に置いて

座っていた。まだ、戦争の傷跡が残っていた世の中だった。

この頃、日中は祖父母といることが多く、家の中でひとり遊びをしていると、時に口喧嘩が始まるのだった。売り言葉に買い言葉が、頭上で飛び交うのだが、どうしたらよいかと迷う気持ちのまま、ジツと背を向け、知らぬ振りをして遊ぶのである。しまいに祖母は

「出ていく」と、捨て台詞を残して買い物籠を片手に掲げ、勢いよく裏玄関から出て行くのである。

しかし、小1時間もすると機嫌よく声高に

「ただいま！」と帰宅するのであつた。

知り合いの小母さんが、

「みどりさんとアーケード街ですれ違ったのに脇目も振らず買い物かごを掲げ、着物の裾が翻るくらい大股で、自分の前を真っ直ぐ通り過ぎていった。」

と、事情の知らない訳で、不思議そうに話していた。

帰宅すると、何事もなかった様な普段通りの顔付きに戻っている祖父母なのである。時折起こる祖母の「家出散歩」である。

祖母は稽古日以外は、家事に専念していた。冬に向かう頃、秋の風物詩

【漬物の仕込み】である。

家の外には大きな木樽が置いてあり、並々と張った水の中には大根が何本も浮いている。

白の割烹着に姉さん被りの和手拭い姿で、冷たそうな水の中

を、たわしでゴシゴシと素早い手さばきで泥を落とし、次々と真つ白になつていく大根を傍で飽きずに眺めていた。

また、二階の広間に側生地^{がきじ}を取り外して中綿だけになつた真つ白い綿布団を広げ、

「綿直し」をするのである。

【剥がす・ほぐす・伸ばす】である。

広間を埋めつくす白くてふわふわした布団綿の固く汚れた綿を取り除き、ほぐして空気を合わせ、新しい綿をふわっと指でつまみ付け足し形を整え、四隅を作つて元の側生地の中に偏りなく均し^{なら}、糸で口を閉じるのである。

この作業は見ていて面白く、雲のような白い中綿の上に寝そべつては、叱られた。

淡々と仕事をこなす祖母である。

旭川は上川盆地のほぼ中央に位置し、基盤の目状に市街地が区画されている。

京の家は二条通りに面しており、四条大通りを挟んだ向こう側にある祖母みどりの実家は近かった。

開拓以来、三代続きの茶華道家である。

事あるごとに姉妹、親類お弟子さんたちが四条の家に集まつた。

ある時、高齢の曾祖母の「よ志子」が階段から足を踏み外し、怪我をしたという連絡が入った。

祖母のみどりは、見舞いに行くのに京を連れて、大通りを渡

つて歩いて行つた。

その道すがら

「よ志子お曾祖母さんの顔を見てびっくりして、嫌な顔をしてないように」と、念を入れて言い置いた。

実家は玄關を入ると、土間の沓脱ぎ場から、上がり框^{かまち}を上がつた先の廊下と階段は、黒光りしてツルツルしていた。

当時のその真つ黒な色は何だったのかと、調べると柿渋とベンガラ、松煙^{しょうえん}を混ぜた塗装がかかつていて黒く光っていたと思われる。

そのツルツル光つて滑りの良い階段から足を踏み外したのだ。曾祖母は、片側の額から目にかけての打撲は痛々しく赤紫に腫れあがつていた。

高齢の曾祖母は、後ろ向きになつて一段ごと這う様に降りるのだが、足が滑つて顔を打つたのであろう。

就学前であつたが、記憶に残る出来事であつた。

またある時、親戚一同で墓参りをしたとき住職の読経が終わる、お参りもひと段落して、皆が三々五々立ち話をしている中、ふだんから無口な曾祖母は、京の後ろから両手を回して抱え込む様に、ぴつたりと寄り添つてきた。そのまま、二人同じ方向を見てゆつくり一歩二歩と歩くのだが、無口な曾祖母の声掛けがなかった為、何事が起きたか理解するのに一時かかった。

後で思えば、曾孫を可愛く思つての事と理解できるのだが、もう少し嬉しそうにしておけばよかったと思ひ返す。

実家の曾祖母、その子である三兄妹の政輝・みどり・うてな、そして政輝の妻の禎子、息子の槐一郎も皆、茶華道家であったが、政輝伯父は詩人でもあった。

旧制中学の頃から旭川新聞に詩が掲載され、東京の大学時代には川端康成や堀辰雄、萩原朔太郎などと交流を持ち、旭川に帰郷してからは、新聞社で文芸欄を担当していた小熊秀雄や郵便局に勤めながら文芸誌に詩を寄せていた今野大力と、詩を通じて親交を深めていた。

昭和14年創業の「珈琲亭ちろる」は、赤レンガ造りの旭川で最も古い喫茶で、そこに詩文を嗜む文人たちが集い、白熱した論議を交わした。

伯父は同人誌などに作品を発表する一方、父の跡を継ぎ、茶道、華道を教授した。

盆暮れ、正月また茶会の際には親類やお弟子さんが政輝伯父の四条の家に集まり賑やかになって、京にとっても恒例の楽しい集まりであった。

昭和の初めころ、白々と夜が明け始めると、その四条の家では白い顎鬚が胸まで伸びた先代の曾祖父が、二階の茶室で、風炉に炭をおこし、茶釜の湯が沸きお点前を始めると、茶室に一人二人とお弟子さんが集まってきたという。

戦前の話で、時間がゆつたりと過ぎた時代である。

昔から茶道の精神を凝縮した熟語に【和敬清寂】^{わけいせいじやく}というのがあるが、調べてみると、言葉通り、

「主人と客人が茶道を通して心を開き、お互いに敬い合い、清らかで動じない心を持つという茶道において不可欠の精神」つまり相手を思いやり、尊重し、最大限にもてなす心という事である。

そういった意味で四条の実家は、開かれた「茶道場」であったのかもしれない。

京が就学前であった頃、近所の空地には、いつも子ども達が集まっていた遊ばには事欠かなかった。

当時は、至るところで下水工事が進んでいた。原っぱや空地では土管が積まれ、子ども達はそこを遊び場に使っていたのである。

同い年のひろみちゃんの家は毛糸屋であった。毛糸編みは戦後徐々に需要が増し日常を支えていた。

セーターはもちろんの事、股引きやオーバーズロース、腹巻き、靴下に至るまで毛糸編みであった。

当時の編み物は着古すと、解^{ほど}して糸に戻し、編み直しをしていた。解した糸は、ヤカンなどの湯気でチリチリを伸ばし編み直しは、店に頼んだり、家で編んだりしたのである。

我が家にも唯一、母の産休時に編んだ手作りプードルの【編みぐるみ】があった。

いつの間にか糸がほつれてきていたが、たまに出してひと目ひと目の編み目や、垂れ下がった両耳をヒラヒラさせて、ジッと見るのだった。

後にも先にも唯一の「母の手作り品」である。

また近所には、同じ年の反物を扱う呉服屋の節ちゃんがいた。大きなガラス戸の店先には間口の広い畳敷きの小上がりがあり、お客はそこに座って商談するのだが、後ろの棚にはキツチリと反物が陳列していた。

遊びに行くにも敷居をまたぐには、子どもながら気後れするのだった。

仏壇屋の様子ちゃんの家は町内の半分を占める巨大な建物で、店兼仏壇屋の倉庫を兼ねており、我が家の大家さんであった。

時折、ひろみちゃん節ちゃん組が、

「様子ちゃんにやられた。」と、血相を変えてやってきて、いじめられたというのである。

果たし状をもらいう謂れはないのだが、様子ちゃんは家の前で遊んでいる私を目指して、真っ直ぐ向かってきた。

ほどなく喧嘩の訳は何であったか、いつも記憶にないのだが、向かい合い類つべたの「つねり合い」でジツとそのまま、長いこと勝負するのであった。

すぐ横に立つ電柱のスピーカーからは、その場にそぐわない明るいコマーシャル嬢の広告がいつも流れていた。

相手が大家さんの子であっても、そこは互角の子どもの世界なのである。

また、近所には「ヤス」「クニ」という少し年上の双子の男の子が、いつも同じ国民服のような黒い服を着ていて、二人のト

レードマークは二本の立派な青つ洩^ぼであった。

いつも袖口でそれを拭うものだから、黒い袖口はデカテカと白く光っていた。

その二人が家の前で遊んでいる私の前に現れ、立ちはだかつて

「おやつを持って来い」と、お菓子の無心を迫るのである。

仕方なく家に入り大きな茶筒を持って出て、蓋をカパッと開け、差し出した。

そのくらいは許容範囲であったがある時、空地で【青つ洩の二人組】が長い紐の様なものを、頭上高くブルンブルンと回している。

何かと回し終えたのを見ると、息絶えた爬虫類であった。ヤンチャにも程があると、絶対的拒否反応でそそくさと家を目指して慌てて帰ったのだった。

町内では年の上下もなくぞろぞろと集まっては遊んだ。

時折、大きな箱を自転車の荷台に乗せたおじさんがやってきた。

拍子木の音が聞こえたら紙芝居の始まりで、飴をかうと観客である。

大きな箱は紙芝居となり、おじさんの変幻自在の声色やセリフ回しに夢になるのだった。

まだテレビのある家庭は少ない昭和30年代の頃である。

この頃、我が家にはニューフェイスの5歳下の妹が誕生し賑

やかにっていった。

また、母は病院に勤務する傍ら、大学に通い旭川で女性初の医学博士号を取得した。

家を訪れた新聞記者はぐるりと見渡して、

「ここが先生のお宅ですか」と、聴かれたそうである。

狭くて老朽化した古い木造の借家である。

しかし、戦争前後の昭和期を過こし、慎ましくあったが、家族が希望に満ちた時を共有し、その歴史が詰まった家であった。

世の中は戦後の復興を経て高度経済成長期に入り急速に生活が向上していった。

子どもたちの娯楽であった紙芝居からテレビへ、タライでの洗濯も洗濯機に代わり、冷暗所に保存していた食糧の保存は冷蔵庫へと変わっていった。

ただ初冬に、出窓の下の小さい引き戸のついた【地袋】^{じぶくろ}に、貯蔵していた白菜の漬物の薄凍りの張ったシャリシャリ感は、冷蔵庫で再現することはできなかった。

この頃、母は勤務医から独立して開業を志した。

しかし、当然のことながら後ろ盾の何もない母への融資に、銀行は難色を示した。

保証人を立てるのに祖父からも断られ、四条の実家の伯父からは

「この家の敷居を跨ぐな」と言われたという、後日談もあった。父の反対もしかりである。

しかし母は、怯むことなくひとり銀行との交渉にあたった。ことごとく承諾は得られなかったが、一行だけ母の熱意が功を奏したのかオーケーサインが出た。

ここからが、母嗣子のサクセスストーリーである。

購入した古い家を更地にして【地鎮祭】^{じちんさい}を行った。更地の中央には祭壇があり、神主や関係者が集まり、施主が鋤^{すき}で砂を掘り起こし、神主が用意した「鎮め物」を掘り起こした地面に据え、安全を祈願する。

着工にあたり、その土地の守護神に無事工事の安全・完成を祈願し、その土地の守り神として敷地中央の基礎の下に鎮めて、地中深くから家を守る札である。

他に「棟札」^{むなふだ}を用意する。

【上棟式】に棟梁の手で、屋根の内部の一番天辺の稜線に【棟木】^{むぎ}をあげそこに【棟札】を取り付けてもらうのである。

祖母に

『家の守り札』を家の木枠の一番上に取り付けてもらうんだよ。」

と説明され、京は、棟梁が木枠の屋根裏に上がって、取り付けるところを眺めていた。

神事の最後に木枠を組んだ家の風通しのいい中で、神様に捧げた供物やお神酒を下げ関係者や作り手への感謝と労いを兼ねて、皆で飲食する【直会】^{なほひ}が始まった。

この楽しそうな雰囲気の中で、時間は過ぎ、御開きになり片

付けとなった。

夕暮れが過ぎ暗くなってきた帰り道、京は木製の大きなそりの上に座って、引つ張ってもらい大通りを横切るのだが、車のライトがやけに眩しく、キラキラ・クラクラ・するのであった。

それは、ジュースの横にあった祖母の湯呑茶碗のお神酒の味見をしたせいである。

それからしばらくして建物は完成した。

赤い尖った円錐形の屋根の上には【風見鶏】が鎮座していた。

教会でもなく、幼稚園でもなく、診療所である。その下は筒状の作りになっている玄関で、ドアの上部にはステンドグラスの明り窓があった。

母は若く日中はもちろんのこと、夜遅くにも遠い市外地へ往診に出かけた。

往診の車に、京も時折便乗した。

往診中は後部座席に寝そべり、リヤウインドウの広い窓から真っ暗い夜空に光る星を見上げ、仰向けの背中を座席にピツタリ押し付け、ひとり帰りを待つのである。

人気のない郊外の市外地に、心細い気持ちで早く母達が戻ってこないかジーンと待ちぼうけである。

低学年時に、

「普通のお母さんになってほしい。」と何回か訴えた事があったが、母はその都度聞き流していた。

しかし、ある時、そう云うと、

「本当に仕事を辞めていいと考えてる？」と聞かれた時、一時おいて出た答えは、

「いや、いいよ」であった。

心の天秤の皿は、母業の皿より母の仕事の皿の方が重いのは判っていた。

そのことは黙っていてほしかったが、その日の夕食には話題になっていた。

母にとっては【してやったり】

京にとっては【完敗】である。

この時から、母への微力な抵抗心は消え去り、職業婦人としての母を完璧に認めたのだった。

妹が三歳くらいの頃、母が中休みに二階に上がってきて居間で遊んでいる妹を抱き上げ高い高いをしていたかと思うと、サツと仕事に戻って行った。

妹はそこに居た京や祖母に

「今のだあれ？」と不思議そうにつぶやいたのであった。

妹が生まれてからは母は開業の準備や、仕事も忙しく、妹にとって祖母が母という存在だったのだと思う。

開業当時、看護婦さんたちと賄いのお婆さんが住み込みで働いていた。

そのお婆さんが、食堂の備え付け食器棚の一部に神社の「お神札（おふだ）」をお祀りし、その前で曲がった腰をしゃんと伸ばし、入れ歯のカチカチという音が時折、副音声となるのである。

るが手を合わせ立礼し、祝詞を誦のりとんじている姿を觀みていた。

まじめで信心深い人であつた。

母のバイタリテイの源は、この賄さんが作る平日の定番昼食メニュー

「スタミナ豚ステーキ・醬油味」であつたのかもしれない。

また、厨房の脇の低いガラス窓を外からコツコツと叩き、配達に來る親戚の牛乳屋の松木のおじさんが顔を出し、

「カツゲンと牛乳だよ」と、窓を開けてよく配達に來ていた。

親類の集まりの時には、陽気なお酒になり京を肩車に乗せて、場を明るく盛り上げ、時には軍歌も唄っていた叔父さんである。

それから時が過ぎ小学高学年の頃になると、二階の住居部分だけでは手狭になり、近くの古い家を購入し自宅として改装した。

その家は「躰つくばい」のある小さな庭があり、祖母の念願だつた茶室と水屋を増築して、「茶会」の準備をし招待状の作成をしていた。

ところがその矢先、急病に倒れたのだつた。

市外の嫁ぎ先から叔母が駆けつけ、床に伏している祖母の耳元で

「母さん、弓子。目を開けて。」

と言う言葉にも無反応で、もう助からないと判つた今際の際に、

「母さん、天国で純ちゃん、玲ちゃん、幸っちゃん、園ちゃんが待っているからね。」

と一歳に満たないうちに他界した母と叔母の間の子達の名前を語つた。

すると虫の息であつた祖母の顔は、ふつと口元が緩み、薄いにこやかな表情に変わり、そのまま靜かに息を引き取つたのだつた。

昔の出生率は低く、母が生まれた後次々に他界した乳飲み子に、菓をもつかむ思いで【拾い親】という俗信的な風習を行つたそうだ。誕生間もない赤子を捨て、他人に拾ってもらい、生まれた子が健康に育つように皆が見守る中、行われた一種の厄払いであらう。

驚くような話だが、それが功を奏したのか八十路後半の弓子叔母は、今でも極めて「ピンシヤン健康老人」なのである。

母は「自分のライフワーク」と言つて、日々仕事に精力的であつたが、仕事のほか市の教育委員や慈善団体の役員、高等女学校の同窓会長をしたりと多忙であつた。

また、皆が寢靜まつた静寂の中、趣味の油絵の筆を取つてすてきな絵を描いていた。

そんな中、祖父が老衰で亡くなり葬式を終えた後、涙も見せなかつた母であつたが、数日後の夜も更けた静寂の中、誰もいない仏間でひとり仏壇の前に座り

「父さん」と、一言声にした。

初めて聴いた母の心の奥底に重く沈んでいた哀しみの声であつた。

それは普段、淡々とした関係のように写っていた祖父と母であつたが、京の知り得ない父と子のこれまで培つてきた絆が、その一言で語られた様に思つた。

それから時が過ぎ、京は旭川の地を離れ嫁いだ。

その頃の母の余暇の楽しみは、映画であつた。

美しさを誇る大女優が映画界を席捲した洋画の全盛期、1950年代に観た映画のビデオである。

イングリット・バーグマンの「誰が為に鐘は鳴る」、ビビアン・リーの「風と共に去りぬ」、グレース・ケリー「裏窓」、オードリー「ローマの休日」等々挙げるときりが無いが、それらの洋画のビデオをソファでくつろぎながら観ていた。

京が里帰りしたときは、母とふたり映画館へ行き、帰り路の暗くなった繁華街の一角に小さな甘味屋があり、そこで蓋付きの塗り物碗が二つ、お汁粉とお雑煮がセットになった二味膳を食するのがお決まりコースであつた。

時折、長電話をする中で母は

「人と会う機会があるなら、また後でと、考えずに会うといい。いつでも会えると思つていても、会えなくなる時もある。」という人生訓を話していた。

どういふ話の脈絡でそう言つたのか覚えていないが、そんなことがあつた翌年、暮れも押し迫つた夜更けに電話が鳴り響いた。

「母、危篤」との突然の一報である。

定期検診の結果、

「頭の天辺から足の先まで健康」と言つていた母は、思いもかけず不慮の出来事で急逝したのだつた。

「いつでも会えると思つていても、会えなくなる時もある。」と、言つていた母と突如会うには、叶わぬ事となつてしまつた。

昭和2年生まれの母嗣子は、激動の昭和期と同じくして人生を走り抜け、真つ直ぐに自分の道を切り拓いていった。

昭和の始まりは、大正15年12月25日の年末に、大正天皇が崩御され、その日に「昭和」と改元した為、昭和元年はわずか7日であつた。実際の昭和は、昭和2年からといえるのかもしれない。

昭和のはじめは、恐慌や戦争が起こり、誰もが否応なく大きな歴史の渦に巻き込まれていった。

太平洋戦争の敗北により終結。

家族はラジオの前で玉音放送をどのような気持ちで聞いたのであろうか。

そして、敗戦の混乱期から這いだしたばかりの昭和30年代は、^{つま}儉しく物もなかったが、大らかで温かく京の記憶に残る時代である。

戦後復興から、高度経済成長に入り、日本全体が豊かになり、希望に満ち明るい未来を感じながら、輝いていた。

家族が生きてきた昭和期を振り返り、記憶に残る懐かしい回想を綴つた。

昭和から平成、令和と時代は進み時は流れ、過去から繋がる
家族の歴史は、未来へと繋がっていく。

孔子を巡る物語

高橋 剛治

序 孔子と「論語」と儒教

令和三年度のNHK大河ドラマの主人公だった渋沢栄一は、幕末から明治の動乱の中で色々なエピソードを見せてくれましたが、その中に「論語」との関わりがありました。

渋沢栄一の少年期である江戸時代末、地域集落の公認私塾

(所謂、寺子屋)で、

「子曰く、く朋有り、遠方より来たる、亦た樂しからずや」

等と、「論語」の読み下し漢文を復唱する場面がありました。

似たような学習シーンは他の時代劇でも見かけますが、これは素読と呼ばれる教育法で、まず文章を声に出して読み、その文を覚え、後に内容を理解して行くと言う勉強法です。何となく前近代的に見られますが、この素読は、現在の教育においても、その効果が再注目されているそうです。

さてここからインスパイアされた私は、孔子が現在どの様に捉えられているのかに興味を覚え、歴史作家が、孔子をどう書いているのかを確認してみたいと思いました。

ピックアップした作品は、次の六点です。

作者 作品 発表年

1 中島敦 「弟子」昭和十八年

2 井上靖 「孔子」平成元年

3 酒見賢一 「陋巷に在り」平成四年

4 大久保智弘 「勇者は懼れず孔子英雄伝」平成九年

5 宮城谷昌光 「孔丘」令和二年

6 古林青史 「宰予く孔子から不仁な者と呼ばれた弟子の物語」令和三年

これらの作品を順次論じて行きたいと思いますが、その序として「論語」と儒教について少し記したいと思います。儒教にはあまり関心はなかったのですが、孔子を述べる上では避けては通れず、詳細までは書きませんが、必要な点を以下に纏めます。

まず孔子ですが、現在から二千五百年程前の中国春秋時代の人物で、儒教の始祖です。氏は孔、名は丘で、字は仲尼、孔子は尊称です。紀元前五五一もしくは二年前に魯の国で生まれ、

国外への留学や放浪の時期がありますが、同四七九年魯で没したとされています。

「論語」はその孔子一門の言行録です。孔子自身の著作ではなく、孔子の弟子やその弟子、さらにその後継者達によって記録採取と編纂がされ続けられた物です。その様々な伝承が現在の形に成立したのは、孔子没後三百年が経過した漢代初期だとされています。

孔子の死後、儒教は諸子百家と呼ばれる他の思想と拮抗、時代の中で消長しながらも、曾子、子思（孔子の孫）、孟子や荀子等によって後世に繋がれました。秦の始皇帝の（焚書坑儒）による大弾圧もありましたが、漢代前期に、儒学者の董仲舒（とうちゅう）によって儒教は再編され、武帝により国家教学とされます。そして、それはその後二千年に及ぶ中国の官僚制王朝国家のイデオロギーとなり、孔子も聖人として偶像的存在となります。特に十三世紀宋の時代に朱熹により創始された朱子学は封建思想色を強め、礼教と呼ばれ、抑圧的社会体制の構築に与します。

実は後世の儒教と孔子の儒教は別物と言えるほど変容していますが、儒教の祖として祭り上げられた孔子は、それらの思想と一体となり、権威化、神秘化が進み崇拜されて行きます。それは二十世紀初頭、魯迅等文化人による激越な儒教及び孔子への批判や、その後の毛沢東の文化大革命等での批判の頃まで続いています。これについては後述します。

日本では儒教と「論語」は公式記載としては古事記、日本書紀

によると応神天皇十六年（紀元四世紀頃）、渡来人王仁による伝来となっています。これは漢代に成立した儒教ですが、千五百年位の間、儒教は仏教に比べ一般民衆に浸透はなく、一部の貴族や学者達の教養としての把握に留まっていました。この儒教が広まるのは江戸時代初期で、前記の朱子学が政治理念として武士に提唱されたからです。「君に忠、親に孝」と言った忠孝精神を重んじる思想は朱熹による新儒学と呼ぶべき物で、封建体制にマッチしました。

徳川家康の奨励により、林羅山によって広められたこの朱子学は官学となり、武士階級の基本教養として幕藩体制を支えます。そして江戸後期には、前記の様に都市部の町人層や渋沢らの庄屋豪農階級にも波及しました。

しかしながら江戸儒学の特徴は、朱子学の權威主義、残忍で非人間的な側面に、多くの著名な学者から批判が噴出し、自由な論争が繰り広げられた事です。

主な者を挙げると、まず山崎闇斎と貝原益軒ですが、ともに朱子学を学びながらもそれに疑問を呈します。そして中江藤樹は陽明学に転じ、弟子の熊沢蕃山は農本思想を説いて朱子学を批判します。また、山鹿素行は孔子本来の教えに立ち戻ることを主張し、更に朱子学に大きな疑念を呈する中井履軒や、儒学を始め宗教を否定する富永仲基、山片蟠桃らの合理主義者が現れます。

そしてその中でも伊藤仁斎は、当時支配的だった朱子学的な

經典解釈を廃し、直接「論語」を検討すると言う学問手法を示します。朱子学は学問体系としては非常に整ってはいましたが、その成立過程に流入した禅学や老荘思想といった非儒教的な要素の為に、経書の解釈に偏りがありました。それを不純な物と見なし、後世の粉飾を取り除き、ありのままの孔子に学ぶと言う、実証主義的な方法を取ります。他にも**狄生徂徠**や本居宣長らも儒教を批判し、強圧的な礼教儒学とは違う、独自の儒学を發展させました。

しかし朱子学的イデオロギーその物は、幕藩体制を支える役割として強く存在していましたから、欧化政策をとる維新政府の新教育からは除外されます。文部卿**森有礼**の「学校における儒教的な道德教育の規制命令」や福沢諭吉の「学問のすすめ」等で、儒学は否定されます。大正、昭和と時代は進み特に大戦後は、儒学は近代化前の江戸時代の思想と言う極端なレッテルも見られ、軽視されます。

それでも明治以降の知識層には「論語」は深く根づいていて、冒頭に書いた**渋沢栄一**が、商道德の規範として西洋人のキリスト教倫理に対し、敢えてこの旧時代の道德である儒学を取上げ、著作「論語と算盤」により、近代経済と儒学思想の結合を模索します。これは名著として現在も文庫に収録されています。同じく注釈的作品として「次郎物語」で有名な下村湖人の「論語物語」が昭和十三年に書かれています。単に「論語」を教養の書として読むならば、孔子の現在地を考える必要は無いの

かもしれません。それは人生処世学として優れた物で、その普遍性は生まれた国や時代を感じさせないからです。しかし孔子について考えた時、その現在地は気になります。以下順に見てゆきたいと思います。

1 中島敦「弟子」

中島敦は高名な小説家の一人で、その人氣も高い物があります。しかし作品は三十三歳と言う短い生涯であった事もあり、多くはありません。生前の発表作も僅かで、作家的名声もありませんでした。彼が今日これ程有名になっているのは、残した作品の良さもありますが、死後における良き理解者である友人達の尽力によると言われています。特に大戦後の学校教材への登載による面が大きく、代表作「山月記」「李陵 始め「名人伝」「弟子」等の短編小説が、今も高校の国語教科書に定番教材として取り上げられています。私も虎に変身する物語の授業を習いましたが、誰もが学校で中島敦を学習して成長します。

さて「弟子」ですが、これは孔子と弟子である子路の物語です。他の中国古代から材を取った作品同様に漢文調の硬質な文体で書かれています。主人公は弟子である子路で、彼は孔子の三千人と言われる弟子の中でも一、二を争う高名な人物です。その氏は仲、名は由、字は子路ですが、後に季路と改名しています。政治に優れた才がある者として、孔子の有能な弟子の十人

の一人に挙げられ、実際にも邑の経営に手腕を発揮しています。彼は最初、道場破りの様に初期の孔子の学塾に押しかけて来ますが、孔子の人格に魅了され師事する事になります。愛された弟子で長く孔子と行動を共にしましたが、その政治力を評価され単身で衛の国で仕えます。そしてそこでの政争に巻込まれ非業の死を迎えます。孔子は悲しみますが、子路の性格を考えれば、予測された出来事だったと語ります。

この物語は孔子神格化前の文献（後述）を題材としていますので、二人とも人間的ですが、子路の目を通してゐる為、孔子は賢人として揺るがない人格で描かれます。

孔子は子路の慇懃で純粋な没利害性を誰よりも高く買いますが、この種の美しさはこの国の人々の間では余りにも稀なので、徳としては認められず、むしろ一種の不可解な愚さとして映ってしまうのだらうと思います。

そしてその子路に対し、自己の教えに対する教え難さも感じます。子路ほど物の形を軽蔑する男も珍しく、礼なるものは全て形から入らねばならないのに、その形から入って行く筋道を容易に受けつけず、形式主義へのこの本能的忌避と闘って、この男に礼樂を教えるのは、孔子にとっても難しいのでした。

又、子路も師匠を純粹に敬愛しながら、その考えに納得ができない部分を感じ、次の様な疑問と思いを心に抱えていました。

「大きな疑問が一つある。子供の時からの疑問なのだが、成人になっても老人になりかかっても、いまだに納得できないこ

とに变りはない。それは誰もが一向に怪しもうとしない事柄だ。邪が榮えて正がしいたげられるという、ありきたりの事実についてである。」

この事実にぶつかるところに、子路は心からの悲憤を発しないうではいられない。なぜだ？何故そうなのだ？そして、天とは何だと考える。天は何を見ているのだ、そんな運命を作り上げるのが天なら、自分は天に反抗しないではないか、と思うのです。

この子路が、王への諫死を巡る問答で、置かれた立場により一方は仁とされ、一方の忠告は身の程知らずで、国が正しからずと思えば潔く身を引くべきだ、との孔子の考えについて、一身の危うきを忘れて一国の素乱を正そうとした事は、たとえ結果はどうであらうと立派なのではないだろうかと問うと、

「汝には、小義の中にある見事さばかりが眼に付いて、それ以上は判らぬと見える。古の士は国に道あれば忠を尽くしてこれを輔け、国に道無ければ身を退いてこれを避けた。」

と孔子は答えますが、子路は、結局この世で最も大切なことは、一身の安全を計ることに在るのか？身を捨てて義を成すことの中にはないのであるか？一人の人間の出处進退の適不適の方が、天下蒼生の安危よりも大切なのであるか？と思うのです。

そして、もし眼前の乱倫に響登して身を退いたとすれば、一身はそれで良いかも知れぬが、民にとつて一体それが何になら

う？まだしも、無駄とは知りつつも諫死した方が、遙かに意味があるのではないかと思います。

孔子は、それに対して、何も一身の保全ばかりが大切とは言わない。それならば一方を仁人と褒めはしない。ただ生命は道のために捨てるとしても捨て時、捨て処がある。それを察するに智をもつてするのは、別に私の利のためではない。急いで死ぬのばかりが能ではない、と答えます。

子路は釈然としません。身を殺して仁を成すべき事を言いながら、その一方でこか明哲保身を最上智と考える傾向が、時々孔子の言説の中に感じられる。他の弟子達がこれを一向に感じないのは、明哲保身主義が彼らに本能としてあるからで、それを全ての根底とした上での、仁であり義でなければ、彼等には危くて仕方が無いに違い無いと思うのです。

この純粹すぎる考えを孔子は教育により修正しようとはしますが、根本の所で断念し、途中からは子路が子路として生きる道を黙認し、非業の死へ向かう暗示になっています。

この「弟子」の物語の原典は「論語」「史記」と「孔子家語」だと言われていますが、小説は、これらから材を取りながら独自の物語世界を構築している様です。

では「論語」に登場する子路は、どの様に描かれているのでしょうか。実は孔子の弟子の中で、「論語」に最も登場が多いのが子路です。印象ではいつも孔子に発言や言論を窘められている。愛情を込めてではあるが、いつも叱られ、弄られていると言っ

印象があります。果敢に問題に立ち向かう姿勢や正直さや政治的能力、真つ直ぐな勇氣は認められていますが、「論語」においての子路は孔門の高弟としての高い尊敬が払われていない様にさえ見られます。これは孔子ではなく、記録者の姿勢の問題なのかもしれませんが、勇が過ぎる点が大きな欠点とも記されています。

「史記」は司馬遷によつて書かれた物で、成立は「論語」よりも早いのですが、材料として完成前の論語の原資料があつた点は、類似エピソードから推測できます。一方別な独自資料からの記載もある事は、記載ニュアンスの違いから想像されています。孔子の伝記を「孔子世家」とし、諸侯の伝記と並べて記述している他、「忠尼弟子列伝」として幾人かの弟子の伝記を載せています。孔子の生涯に関する基礎資料と言えます。

「孔子家語」は、本来は孔子の伝記資料として最も重要な資料だと思われた物ですが、原本は失われていて、現存するものは三世紀魏の王肅おうしゆくによつて編纂された偽作です。しかし部分的には古い伝承による形跡を残しており、孔門の説話集として価値があります。

この小説は、この「孔子家語」に依つた部分が多いとされています。冒頭の孔子による「汝、何を、愛好する」の問いに、子路が、「我、長剣を好む」と答える場面もそうで、これにより武を好む子路像を作り、小説のテーマを明確にしているとされています。

「論語」では、子路の非業の死は孔子の教えに従わず、欠点を改めなかつたからだと言ふニュアンスが見てとれますが、中島敦の物語では、子路の（譲れない胸中の奥所）を欠点とはせず、子路の個性、真髓であり、それ故に衛の内乱における自分の死は、自分の信じる物の為の死であつて、この死にざまこそが正しい行為だと言ふ、子路側から見た思いが記述されます。この己の信念に準じた行動こそ、この小説の子路側のテーマだと思われまふ。落ちた冠を拾ひあげ、かぶりなおした後の最後の言葉「見よ！君子は、冠を、正しゆうして、死ぬものだぞ！」は、自分を一個の独立した人格、君子、理想的人物に見立てた自賛だと考えられます。これに対して孔子は、涙を見せ、深い哀悼を示します。単純な悲しみなのか自分の教育への悔恨なのか、何を思ったのかは不明です。

文芸評論家の川村湊は、その著作「狼疾正伝」中島敦の文学と生涯」の中で、

「この物語は単純な師弟愛の物語ではない。中島敦は師弟関係と言ふものに関心が高く、この「弟子」の他にも「名人伝」や「悟浄歎異」「悟浄出世」等でテーマとしている。このうち西遊記の沙悟浄を主人公とした後ろの二作品では、彼が師を求めて彷徨する物語だが、「名人伝」では究極のところでは、弟子が天下第一の名人となる為には、師は乗り越える対象として存在し、死を掛けた対決が暗示されている」と書いています。

川村湊は、同様に孔子は何故、悲劇的な未来が予想されなが

ら、子路の衛への仕官を止めなかつたのかと問い、孔子と子路の関係の中にも、同様の緊張感のある師弟関係が述べられていると論述しています。つまりこの純情な弟子は、そのひたむきさから、孔子の作り上げてきた「仁」の教説の体系を、悪意も無しに破壊してしまうかもしれない存在だと思い、自分から遠ざけ、内乱の起こりうる衛の国へ仕官させた。正義感で直情径行の子路の非業の運命を、孔子が予見できないはずはなく、実際にその通りになる。この様に解釈するとこれは怖い話になります。一見穏やかで静謐な物語の内なる暗黒面が浮かび上がります。深読みかどうかは分かりませんが、この作品が深い物語だという事は伝わりまふ。

では史実的にはどうなのでしょう。孔子は伝説とは違い神の如く偉大ではなく、偉大な人間の師にすぎません。ただ子路を導けなかつただけなのだと、私は思います。子路は孔子の思想的隷属下にはなく、対峙した一個の人格で、その運命は個人に帰するのだと思います。孔子はその死を含めた子路の人生を認めるしかなかったのではないのでしょうか。

2 井上靖「孔子」

井上靖は昭和文学の大家の一人で、作品も多岐に渡ります。

私も、伝記的作品と言われる「しろばんば」「夏草冬濤」「北の海」や「あすなろ物語」等に熱中し、「風林火山」「蒼き狼」等の

歴史小説の多くを愛読させてもらいました。「孔子」は最後の作品です。

この「孔子」での語り手は、(蕙董)と言う、孔子晩年の架空の弟子です。これは千利休を描いた「本覚坊遺文」と似た構成で、そこでは架空ではないものの、ほとんど伝承の無い(本覚坊)と言う弟子の見た晩年の利休の思い出や幻想を描き出しています。

現代ではあまり語られる事の少ない師弟関係と言うテーマが、井上靖にとつて重要な関心事であつた事が伺えると言われています。面白い事なのですが、それは中島敦と同じ感性なのです。意外な事に二人は同世代なのです(井上靖が二歳上)。そしてその探求方向の違いが小説の方向の違いになっています。

この小説の場合、この弟子を通して、孔子の精神的内面に迫る事がテーマとなりますが、この弟子は孔子が魯の国での政治活動で失脚した後、母国を離れ十四年に渡る諸国放浪をしていた晩年の時に、一行の雑用係として途中で雇われた者でした。そこからこの一行に同行するようになり、孔子が魯に帰つた最晩年の日々にも仕え、死後も他の弟子と同じく墓所の近くの庵で三年の喪に服します。その後、(山深い里)に居を移し、僅かな田畑を耕しながら、孔子の遺徳を忍び静かに暮らしていると言う設定になる人物です。

孔子没後三十三年の夏から翌年秋まで、この山里での定期的な、孔子についての研究会が物語の軸になります。この時期、

「論語」はまだ出来上がっていませんが、孔子没後に各地であつたと想像される論語編纂に繋がる初期集会の模様を、ドキュメンタリー中継をしているかのように描いています。孔子の前半生や、その全生涯を描いたものではありませんが、後半生の放浪の苦難に耐える孔子とその一行の姿が回想され、多くの波乱の出来事は概して静謐な描かれ方をしています。

特徴的なところでは、この放浪に付き従つた高名な三人の弟子である子路、顔回(氏は願、名は回、字は淵、子淵と呼ばれる)、子貢(氏は端木、名は賜、字が子貢)の各々の評価が、山里での研究会の中で、三人の支持者や研究者の間で議論され、最後に語り手の蕙董によつて印象が語られる点です。

顔回については、支持者や研究者も多く、求道的で、純粹な若者であつた事や孔子さえもが一目置く学問的な優秀さと、その優れた人格が述べられます。「論語」に記載されたイメージの通りで、後世の評価に準じます。

又、子路は顔回に匹敵する位の熱烈な支持研究者がおり、その天衣無縫さや孔子に対する忠誠心、他人に対する時の親愛感と正義感の強さが語られます。そして正義の為に己が生命を必要と言うのであれば、いつでもそれを棄てるだろう。命が幾つあつても足りないと言う男であると孔子が、行く末に注意はしていたが、その生き方を個性として尊重していたと蕙董は述べます。これは「論語」のニュアンスとはやや違つていて、中島敦の作品に通じます。更に蕙董は、孔子が最も愛した弟子はこ

の子路であつたろうと言います。

そして子貢ですが、「論語」や後世のイメージからは第二の弟子と見られていますが、この作中の研究会でも同様に、三人の中では一番少ない支持評価です。けれど蒹葭は子貢を高く評価します。孔子より先に他界した二人よりも、孔子の晩年とその葬儀後の一門を支えた点を評価し、子貢は己が勉学と修養等を棄て、自分の生きる意義と使命は、孔子に仕える事であるとの信念を持ったのだらうと述べます。子貢は孔子の弟子では異色の人物で、弁舌と商才に長け、それにより大きな財を築き、例えば一門の諸国放浪の旅費の大きな部分を担い、孔子の没後、その墓所近くで多くの弟子たちが三年の喪に服す事ができたのも、子貢の経済的援助があつたからです。それは小説の初めの章から述べられ、子貢自身は更にその後三年、一人喪に服します。

この三人については残りの小説でも多く出てきますので、そこで更に論じますが、意図的ではあるのでしょうか、この小説は歴史時間から離れた印象を読者に与えます。つまり現代における孔子研究会の発言や討論に近いと思わせる所があります。それは高弟の評価の所で一番感じますが、孔子の人物像や「論語」への向かい合い方の所にも見られます。

さて「論語」は前記しましたように、孔子と弟子たち一門の言行録です。概ね短い言葉(章句)の集積で、一貫した物語があるわけではありません。成立までの三百年の間に多くの人々の手を経てきましたが、一部には直接の弟子たちの伝承も含まれて

います。そこには孔子の伝記や履歴のようなものはほとんどありません。完成された「論語」の全体も整理された物ではなく、とりとめのない様々な章句が、内容別でも年代別でもなく、法則性のない二十篇に分けられ置かれています。その篇名も、先頭の文字を便宜的な符号とした物です。今日までの研究によつてその二十篇中、上篇の十の方が下篇の十より古い成立だと思われていますが、多くは発言の時期が不明のまま記載されています。

十九世紀のドイツの哲学者ヘーゲルは、独語訳された「論語」を読み、孔子の教えは哲学等ではなく平凡な通俗道徳でしかないと酷評しています。確かに「論語」を素直に読めば、西洋的な意味での哲学でも思想でもないのかもしれないかもしれません。ただ、そのとりとめのない印象の章句を深く読み進んで行くと、統一された孔子の人格や人間像が浮かび上がり、人間の生き方、進み方を教示してくる書物なのだと考えられます。一方、章句の解釈は人によつて別れる場合があり、様々な想像を掻き立て、読者の数だけ解釈は存在する、と評論家の橋本秀美は、次の様に述べています。

「人々が論語を読み、解釈するのは、あたかも人が鏡を覗き込む様なものであり、その解釈は解釈者自身の心そのものを示している」

井上靖の「孔子」の中では、この小説の主題に沿った形で「論語」の章句が引用され、過去の全ての注釈と登場するそれら数

十の章句とを照合する事は出来ませんが、(天命)や(仁)に関する幾つかの章句の解釈で、独自の物や選択がされている様です。語り手の薦薑を媒介に(天命)と(仁)に対する考えが各一章ずつ述べられています。それは井上靖の解釈によると思われる、そこに小説の主題がある様に感じられます。

この小説の研究会では、孔子とはどんな人であったのかを検討され、その風貌と優れた人格を後の世の人に対し、生き生きと伝え様としています。それこそが最大の関心事であつたのだと思わせます。その為、ここで描かれた孔子は人間的ですが、天命を悟った理想化された姿で描かれてはいません。

この小説の語り手が何故高弟達ではないのかと考えると、孔子没後に三十年を超える内的探求生活を送り、七十を超えた年齢であるという点で、薦薑は井上靖にとって仮託しやすい視点人物であつたと思われるのです。

3 酒見賢一「陋巷に在り」

大長編です。十三巻に及ぶ小説ですが、主人公は孔子ではなく、その弟子である若き顔回です。孔子はその師として物語の軸にいますが、政治家として魯に理想の政治を目指す姿が描かれます。当時の魯は君主定公に実質的な力はなく、公族である三桓家^{さんかんけ}と言う三つの豪族により支配されていました。孔子は君主権の復活を目指し、三桓家の軍事力の基盤である邱城、費城、

成城を国の政策として取り壊そうとします。この政治家としての活動と挫折、巻き込まれる顔回の成長物語です。

定公十二年(紀元前四九八年)もしくは十三年に孔子一団が魯を離れ諸国放浪の旅に出るまでの二、三年間「春秋左氏伝」「史記」等の史書では、簡潔な文章で述べられているに過ぎない歴史的事件の裏側にある人間模様を、虚構を絡めて濃密に描いています。時期的には、井上靖の作品とスライドするかの様に、晩年の放浪に向かう前までの物語です。

顔回については前章でも触れましたが、陋巷に住み、貧困の中でそれを苦にせず、学問と質素な暮らしを楽しみながら日々を送る人物です。陋巷は現代風に言う所のスラム街をイメージさせます。孔子より三十程若く、学問の後継者として、最も愛された弟子ですが、孔子より先に四十一歳で病死します。

「ああ、天、予^われを喪^{はな}ぼせり。天、予^われを喪^{はな}ぼせり。」

と、孔子が慟哭し、悲嘆の言葉を述べたとされています。それほど後継者としての顔回への期待は大きかった様です。「論語」に記載された称賛の言葉、「顔回は一を聞きて十を知る者」等から、後世への評価も大きく、孔子第一の弟子とされ、漢代以降の儒教世界では、孔子に次ぐ者とされます。

作者の酒見賢一は、学問的に優れ、孔子にも愛されたと「論語」等にも記載されているが、具体的な事は何も伝わっておらず、特に何もしていない顔回とは何者であるのかを、以下の通り、序文で問題提起しています。

「顔回は他の弟子たちのように大夫の家や国家に仕官をしたことがない。出世の野心ないかのである。貨殖の才などはなく、武芸に秀でてもない。弁舌の才もなく、自ら進んで何かを為したということがない。ほとんど無為の人である。このような態度では孔子の儒学における有為の人材とはとても言えない（略）。顔回は少年の頃より孔子に学び、十四年にわたる孔子の漂泊の旅に随った先進の一人である。孔子の儒の第一後継者として囑望されたが、これからという時に孔子を残して夭折してしまった。煎じ詰めるとそれだけの人物であった。しかし後代、孔子が神格化されるにつれ顔回も仰がれ、「至聖 復聖」とまで称されるようになった（略）。私は、その点が不思議であった」

これへの回答、あるいは模索がこの小説のテーマだと思われるが、朽ちた長屋に暮らしながら、孔子の身边におきる怪しげな事件に対し、決して能動的ではなく、むしろ受動的に巻き込まれながらも、異能と言うべき力を駆使して縦横に活躍します。

無論ほとんどがフィクションなのですが、斉の晏嬰の後継である黎鉏との（峡谷の会）での冒頭の暗闘から、魯の政治家として忙しく活動する大司寇時代までの姿を、その出生と宿命、母である顔徴在と原始儒教ともいう謎の顔氏集団の存在と顔回の関わりを交差させ、更に史実のはっきりしない少正卯を首領とした敵対者との争い等、一見荒唐無稽であり、実際そんな部分も多いのですが、孔子の生きる世界の雰囲気伝わってき

ます。流石に後半の冥界巡りの部分である九巻の辺りは理屈が饒舌すぎて、長く退屈な所もありますが、全体としては興味深い伝奇ロマンです。

文芸評論家の石堂藍は「中国歴史小説の皮をかぶったファンタジー」と評し、呪術のからんだ権謀術数が繰り広げられるあり得ざる孔子伝でありながら、一般的な孔子伝説からははずれないのは作者のアクロバティックな力技だと解説しています。尚、この小説の装丁画を描いている諸星大二郎の劇画に「孔子暗黒伝」というSF的伝奇ロマンがありますが、これも強烈で奇想な孔子と顔回の絡むファンタジーです。

さて酒見賢一は不思議な因縁で、中島敦を憲章して作られた中島敦賞の第一回受賞者になっています。代表作「墨攻」は森且行による劇画でヒット、映画にもなっていますが、これは孔子の後の戦国時代、儒家のライバルでもあった墨家と言う思想集団の話です。

さて「陋巷に在り」の後書き的な「余章補記」の所で酒見賢一は、この後の孔子放浪も書くべきかもしれないが、顔回が陋巷からいなくなると「陋巷に在り」ではなくなってしまうから、と再開の可能性を示しながらも、一応の完結を言葉遊び的な理屈をつけつつ述べています。

文献的には、孔子の優れた政治手腕についての説話は、「論語」よりも「荀子」で強調されています。孔子を継ぎ、孔子を賛美した孟子と同じく、荀子も自分の理想に合わせた政治的孔子像を

そこで語っています。少正卯の誅殺についても、その「荀子」で説話的に語られ、次いで「史記く孔子世家」に記事として載っています。当初は孔子の悪事を許さない果敢な政治ふりを示すものとして喧伝されましたが、他面では孔子に似合わない武断的な話として、荀子以降に作られた物と、史実としては疑われてきました。

ただこの話が、以前の中国での孔子批判キャンペーンでは大々的に復活し、権力による弾圧者として批判の対象とされました。

この小説は、孔子の父母やその生誕時の物語や、子路や子貢、公治長、顔路、冉伯牛等の実在の弟子達と架空の人物を動かし、前記した資料の他にも、虚実とりまぜ伝えられた「礼記」他、孔子に批判的な墨家や法家、道家の説話や多くのエピソードを大長編の中に取り込んで物語化しています。その意味では色々と興味を惹かれる物があります。孔子は天命を感じながら、挫折する賢人政治家です。

4 大久保智弘

「勇者は懼れずく孔子英雄伝」

大久保智弘は時代小説の書き手で、江戸時代劇の作品が多いのですが、中国の歴史小説としては、他に孫子を扱った物もありました。

本作は孔子の前半生を描く歴史小説で、父親である叔梁紇（孔紇）の武人としての活躍が取り上げられています。孔子の父の記録は少なく、「春秋左氏伝」に「陬人紇、陬叔紇の名で現れる人物だとされています。この人物は武勇に優れたエピソードで知られ、それがこの作品でも取り上げられています。孔子の父が叔梁紇だという記録は「史記」以前の史料に記述はありませんが、「史記」には叔梁紇と顔氏の女性が（野合）して、孔子が誕生したとあります。（野合とは当時の一般的な婚姻ではない事を示していますが、史実的には詳細な事情は不明です。父母の年齢差は四十五以上あって、複雑な事情が伺えます。父は孔子が三歳の時に亡くなります。

母、顔徴在の記録は父以上に少なく、貧困の中で孔子を一人で育て、孔子十七歳の時に三十四歳で亡くなったとされています。中国では孔子の生誕に対しての伝承物語として、二頭の龍が天から下り、母である顔徴在の夢で感応して身籠ったとか、麒麟が現れ、子供が素王（王位には就かないが、王者と同じ徳を持つ人）になると記した玉書（神仙の伝えた書物）を吐き出したとかの物語が流布されてきました。さすがに現代では、これはありませんが、両親の物語は作家の腕の見せ所で、この作品では叔梁紇と顔徴在との戦陣での出会いと関わりが、前半部分で語られます。台湾のテレビで製作された歴史ドラマ「孔子」では、顔徴在が斉において仇討ちを行い、波乱万丈の冒険の後に、魯の武将である叔梁紇に出合うと言う筋立てがありました。又、

前出の「陋巷に在り」においては、顔徵在は願氏と言う魯の原始儒教一族の宗家の娘巫女として、物語全体のキーマン的に、踏み込んだ物語が展開されます。

又、この小説では初期の孔子の教団が、父親の関わりから遊俠集団を基礎にした物として描かれています。ちよつと他には無い筋ですが、考えてみると確かに子路は入門前には遊俠の徒でしたし、ここで登場する秦不慈や初期の弟子の中には幾人かはそれらしき人物がいます。後の文献である「論語」では、学的では無いそれらの人物のエピソードは省かれている、との仮定が述べられますが、あなたがち虚構とは言えない様に思われます。

クライマックス的に描かれる斉の晏嬰が暗躍する（夾谷の会）は、晏嬰だと記載した資料はありますが、この年死去しているので、現在は史実的には虚構だと思われています。

そして政治的ライバルの陽虎との若い頃からの関りや確執が述べられ、少正卯の誅殺や剣戟シーン等も交え、骨太で異色な作風の孔子物語です。孔子の武闘的な活躍があり、「史記」等を基にフィクションを加えた物語は、孔子の別な面が違和感なく表現されていて、読み物としては面白い作品です。

5 宮城谷昌光「孔丘」

この作品は令和二年に出されています。古代中国に材をとつ

た名作の多い著者にとっても新しい方の作品です。

著者「あとがき」によれば、長い間孔子を描くことを企図しながら、挫折してきたとの事です。その理由としては孔子の生涯を叙述するには「論語」は重すぎ、「史記」孔子世家」は資料として軽すぎると述べています。

「論語」は主に孔子と弟子たちの問答が載せられていますが、その発言が、いつ、どこで、どのような状況で発言されたのか不明点が多く、その上、これをこの部分に置いた編者の意図がとらえられないので、その時の行動はどうであつたのかわからず、そこから小説を書くのは難しいと言う事です。一方「史記」は司馬遷の筆にしては軽佻であり、物語性が強いと感じられている様です。

その為、神格化された孔子を念頭から外して、失言があり失敗もあつた孔丘という人間を書くことで、人間孔子を捉えられるのではないかと思ひ肚を括り、タイトル名も孔子ではなく、本名の孔丘としたと記載しています。

その為か、後世の潤色の大きいと思われるエピソードは押さえずがちに描かれています。例えば（夾谷の会）ですが、「春秋左氏伝」の記載を紹介しながらも、実際にあつた事かには疑問を投げかけ、無難な補佐だけで、伝えられる八面六臂の活躍には否定的です。そもそもこの時期における斉の側からの強圧な外交自体に疑問を呈しています。この他にも少正卯や史的整合性の薄い部分は除かれています。孔子の行動面において、子路

から厳しい批判の目を、たびたび向けられたりしていますが、ここでの子路は「論語」にある三枚目的部分はあまりありません。

孔子の前半生は、勉強に励んで礼学を修めた様ですが、どの様にして礼学を学んだのかは資料的には不明です。この小説でも貧困の中で下級官吏として働き、独学しています。そして十九歳の時に宋の尹官氏と結婚、子の孔鯉が生まれますが、妻にとつては口煩い夫でしかなく、後には離婚、母と離れた一人息子とも心を通わせられない人物として描かれます。この辺の材料は「礼記」からと思われれますが、離婚の件は否定する史家もあります。いずれにしてもその後若くして死別していて、孔子の前半生に不遇で寂しい印象を与えます。反逆者陽虎による魯の政治の壟断もあり、孔子はうまく世に出られません。

前半部分での秦商（不慈）や漆雕開、閔子騫、子路及び南宮敬叔等の初期の弟子達との交流や語らい、教育の場では華やきがありますが、政治的挫折により報われない時が描かれます。同時代の成功した文人政治家としては、孔子自身も尊敬を表明している鄭の子産や斉の晏嬰がいます。宮城谷昌光には二人の評伝的小説もありますが、ここでのトーンはこの小説とは違い、もう少し光彩があります。彼らは最上位の階級でこそありませんが、後ろ盾として支えてくれる人物もあり、政治的な腕を振るえる立場にいました。しかし孔子にはそれがなく、独立独歩な姿は政治的挫折もやむをえないと言う環境でした。

晩年も各地を流浪し、時代の混乱と悲慘を目撃しつつも高い理想を持ち、平和で安定した社会をもたらす為に、多少なりとも世に貢献したかった様です。皮肉な事に生涯を終えるに当たり、孔子は自分がそれに失敗した事も自覚していました。しかし、もし孔子が政治的な成功を収めていたならば、孔子の本意ではなかったかもしれないが、後世にこれほどの高名は残せなかったと思われれます。

同氏は、以前の歴史随筆「史記の風景」の中の「孔子と子貢」で、子貢の活躍を述べ、「思想家は弟子の良否により、その像が増減させられる。孔子は子貢を弟子にもったことにより、その像はかぎりなく大きく高くなったといえる。」と述べています。同様の指摘は司馬遷も「史記」の中で、子貢の宣伝によつて孔子は後世にその名が広まったとして、「貨殖列伝」にも名を連ねさせ、言論と外交的手腕、投機に秀でた商人としての破格の活躍により、この時代においては孔子以上の評価もあつた事が記されています。しかし後世では、後の縦横家の様な外交的活躍は虚構と見られ、孔子や後世からの儒家としての評価は大きくありません。この作品は孔子のみの伝記小説で初期の弟子で前記した登場人物との、その後の関わりが薄く、その辺の広がりがない点で少し物足りない感じがします。けれども流浪する過酷な生活や晩年の教育の中で、多くの弟子が孔子を敬愛し、人格の素晴らしさを賞賛し命がけで守ろうとします。この作品は孔子を神格化せず、しかし凡人に降ろすのではなく、その優れた

人間としての生涯が良く網羅されています。

6 古林青史「宰予」孔子から不仁な者と呼ばれた弟子の物語

一人の高弟の目を通して描き出される孔子と、その宰予（氏は宰、名は予、字は子我。宰我とも呼ばれる）という人物の生涯と軌跡を描いた作品です。孔子は後世に多方面に多大な影響を与えますが、具体性に欠ける人物像や思想は、端的に語られる事は少ない為、作者は時代背景を考慮し、歴史資料から真実を拾い、歴史小説として纏めています。

宰予は（孔門十哲）と称される高弟の一人ですが、一般にはそれほど知られてはいません。これまで紹介してきた小説でも名前はお出でしていますが、大きな活躍はしていません。しかし「論語」における登場は印象的な点が多く、（三年喪制を巡る）孔子との対立や（昼寝事件）等、師である孔子から、次の様な厳しい叱責を受けています。

「朽ちた木には彫刻のしようがない。腐った土塀には上塗りのしようもない。宰予のような奴には何を云っても無駄だ。今迄私は人に対し、その言葉を聴けば、そのまま実行されているものと信じたが、今後は言葉だけでなく、その行いをじっくり観察してから決めることにしよう。宰予に懲り懲りさせられてから、人の見方を変えることにした」

これら「論語」に書かれた件は、喪制の問題はどちらにも理屈があり、現代的理屈では宰予に分がある気もしますが、解釈は色々あります。又、（昼寝）にしても、孔子の講義をさぼった末なのか事情が不明です。これまでの貢献を無視され、ここまで駄目だしされる理由が良く分かりません。

それらの批判が、孔子の後期の若い弟子である子夏、子張、子游等（所謂、後進の弟子達）との反目であった点もあるが、ある面功利的な実務政治家と、孔子の根本的な考えの違いから発せられている様だとこの小説は述べます。例えば孔子と管仲との政治思想の違いだとしても語られています。孔子は、この百五十年程前の斉の偉大な宰相に対し、その政治的な成功は認めています。行動に仁が無いと切り捨ててもいます。

この物語では宰予は孔門を出奔後、斉で大夫として用いられます。後に政争に巻き込まれて悲劇的な最期を迎えますが、悲恋物語を織り交ぜた評伝的な作品になっています。

ここでの孔子は、ちよつと頑固で気難しい師で、厄介な人物として描かれています。これまでにない面白い見方です。

確かに「論語」を見ると、子路や子貢はじめ冉有、^{ぜんゆう}宰予は現実的な政治世界で活躍し、経済的に教団に貢献する有能な弟子ですが、儒者としては孔子からの苦言が多く、報われない位に評価が高くない様に思われます。これは「論語」の編集者による部分が大きい様にも思いますが、「論語」における孔子は、明らかに実務型の前者らより、隱者型の弟子である顔回、^{げんげん}原憲、

仲弓、冉伯牛、閔子騫等を好んでいます。前者は良く孔子に仕え続けているとも思われますが、「論語」では記載されていない心の交流もあるのかもしれませんが。しかし宰予は「不仁な者」と呼ばれ、最後には孔子を離れます。「論語」の有名な成句（巧言令色、鮮なし仁）の人と目され、非難を浴びせられたと作者は推測しています。

作者の古林青史は、作品数は二つと少ないのですが、未完の作品としては子貢を描いた物もあるらしく、注目したい作家です。

7 終わりに

昭和十年頃の著名な中国の作家である郭沫若の小説「孔子、粥にありつく」では、儒者に敵対した「墨書」の中にある孔子批判の文から材を得ている様な、孔子や顔回の矮小化された像が描かれています。もともとこの短編集「歴史小品」では他に孟子や莊子、始皇帝や項羽までが、その様に描かれ中々感心させられます。偶像化されたそれらの歴史人物を打倒する為に、それが必要であった時期なのだろうと思います。実際、その前の昭和四年の馮至の小説「伯牛、疾あり」では、浪漫的な孔子と冉伯牛の物語が書かれています。

中国出身の芥川賞作家である楊逸が、平成二十四年に出した歴史人物評「中国史人物月旦」では、孔子さまへの進言として

「人間から離れたつづけた二千五百年。そろそろ普通の人間に戻ってください」と書いています。

前記の様に、過去の抑圧された王朝支配の中で、孔子は神とされてきました。二十世紀初頭の新文化運動で、民主主義と科学を普及させる観点から、孔子及び儒教への批判が雑誌「新青年」等で展開されました。大戦後に成立した中華人民共和国では、六十年代後半から七十年代前半の文化大革命において、毛沢東とその部下達による批林批孔（孔子と政敵林彪を結びつけて批判する）運動が展開され、孔子廟も破壊されるほどの弾圧もされました。楊逸が十代で遭遇したその時代、毎日学校の宿題として林彪と孔子の批判の詩を書かされたと言われていますが、今日二十一世紀の中国では、中国共産党が新儒教主義また儒教社会主義を提唱、（孔子）がブランドとして学院名に活用され、再偶像化が起こりそうな点を憂えての、先の文章の様です。

ただ先日、私がDVDで見た二〇〇九年作の中国映画「孔子の教え」は、突つ込み所は満載でしたが、それなりに面白い普通の歴史人間ドラマでした。まだ大丈夫な様です。

さて、ここまで日本における六篇の孔子を巡る小説について見てきましたが、現代の我国の小説では概ね、孔子を尊敬されるべき歴史上の人物としつつ、人間的に記述されています。これはある意味、遠藤周作が優しいイエスを記述した部分とも共通するかもしれませんが、神的存在を降りている孔子の方が、

日本ではより普通に書かれています。今回は小説に描かれた孔子を見てきましたが、いつか機会があれば日本の研究者の孔子伝における孔子像を、例えば白川静博士の物等について考えてみたいと思います。△▽

短歌における「私性」とは何か？ 水 関 清

第一章 はじめに

与謝野鉄幹は、明治三三（一九〇〇）年九月発行の『明星』第六号に「改正新詩社清規」を掲げて、以下のように高らかに宣言した。

「われらは互いに自我の詩を發揮せんとす、われらの詩は古人の詩を模倣するにあらず、われらの詩なり」

多くの歌人に対して、伝統から離脱することの大切さと呼び掛けたもので、この鉄幹の言葉に鋭く反応したのが、当時、盛岡中学三年生の石川啄木だった。学校の先輩・及川小四郎の紹介で知遇を得た金田一京助から借りた「明星」を耽読した啄木は、早くも翌・明治三四年一月には新詩社の社友となっている。

鉄幹の言う「自我の詩」とは、いわゆる「自我独創の詩」と呼ばれるもので、作品の中の「主体」として、自らが認識した「自分」を置き、自分自身が作者となつて、それを短歌という形に定着させるという作歌姿勢を指す。心理学では、「自己」と「自我」とを峻別するが、詳しくは第六章で述べる。歌人・三枝昂之は「自我の詩」を、「作者と作品中の『私（＝作者＝われ）』を一致

させる歌、つまり作者の真情を吐露する歌」であり、自己表現を豊かに太らせる短歌百年の大きな流れになったと総括した（『近代短歌と現代短歌』、岩波現代短歌辞典）。この見方に従うなら、感性の共同性を基軸とする古典和歌から離れて、「近代短歌」が切り開いた「自我の詩」における「主体」とは、「作者」そのものであり、その「私性」は、問題にならなかった。

事態が動き始める契機は、戦後の塚本邦雄らの前衛短歌運動である。塚本の作品中の「われ」を、従来の作品同様に「作者」と解釈すると、どうにも説明できないという現象が生じたのである。この問題に対して、さまざまな批評が集まり、それらが集約された結果、前衛短歌作品における「われ」という存在が、徐々に可視化され、それまでの近代短歌を鑑賞する上で、暗黙の了解事項であった、「われ＝作品中の主体」は「作者」そのものという図式が、批判的に再検討されたのである。その結果、前衛短歌での「われ」は、必ずしも「作者」と同じではないことを前提としてはじめて、作品が理解されるようになった。いわば「私性」の拡大が進んだのである。しかし、塚本らの前衛短歌運動が

ら、さらに時代が進んだ現代口語短歌では、「作品中の主体」と「作者」との関係性を論じるだけでは説明がつかない短歌が出現するようになった。

この問題を理解するためのカギは「私性」にあると考えられるため、本稿では、前衛短歌を理解する動きの中で拡大された「私性」が、現代口語短歌の中でどう変容してきたのかを考えたい。作者が自らの想いを表現する際に、あえて、短詩型という制限が内在する短歌という表現形式として選んだのか、という問題について論じた。あわせて、近代短歌運動の中で、『一握の砂』という金字塔を立てた石川啄木が、「忙しい日常生活の中で、脳裏を一瞬だけよぎる思いを、素早く捉えて定着する」には、短歌という短詩型の活用が手軽で、ひとたび定着させた短歌を抛り所として、その時々を思いを脳裏に再現し、長く愛惜できるようにすることは、日本人の持つ少ない幸せのひとつ」とまで言い切った、独特の歌論を比較の対象とすることで、啄木短歌における「私性」についても論究した。

第二章 前衛短歌の諸相

昭和二〇年代末から三〇年代にかけて、塚本邦雄（一九二〇・二〇〇五、岡井隆（一九二八・二〇二〇）、寺山修司（一九三五・一九八三）から始まった前衛短歌運動は、すでに六〇年以上の長きにわたって、現代短歌に影響を与え続けている。この問題は、系統的に分析しないと、議論の着地点が見出せない惧

れが大きいと思われるので、以下のような手順で論を進めたい。まず、前衛短歌の影響を受けた世代を、時系列で分類してみたい。具体的には、自らの青年期に、塚本らの活動をリアルタイムで見聞きした、塚本からみて「子世代」にあたる第二世代。前衛を消化して、自らの表現に組み込んだ第二世代との出会いに影響を受けた、塚本からみて「孫世代」にあたる第三世代。前衛短歌の登場以来語られ続けてきた「文字を読んだだけでは意味に切り込めず、総体として「わからない」の印象が、それまでの世代とは質的に異なる」表現が前景に立つ、塚本からみて「曾孫世代」にあたる第四世代。以上各世代に分けることが可能と思われる。そのうえで、各世代ごとの代表的作品を題材として、それぞれの歌意の本質や構造面の特徴を抽出して、世代間の比較を行うことで、前衛短歌の影響がどのようにして波及したのか、という問題について考えるのである。

では、塚本の代表歌とともに、塚本からみて「子世代」にあたる第二世代から三枝昂之、「孫世代」にあたる第二世代から穂村弘、そして「曾孫世代」にあたる第四世代から永井祐の作品を題材として、検討を始めてみたい。

日本脱出したし 皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも
塚本邦雄 『日本人霊歌』（一九五八）

ひとり識る春のさきぶれ鋼よりあかるくさむく降る杉の雨
三枝昂之 『水の覇権』（一九七七）

サバンナの象のうんこよ聞いてくれだるいせつないこわいさ

みしい

穂村弘 『シンジケート』(一九九〇)

あの青い電車にもしもぶつかればはね飛ばされたりするんだ
ろうな

永井祐 『日本の中でたのしく暮らす』(二〇一二)

一九二〇年生まれ、三十八歳時に発表した「日本脱出したし」と、一九六二年生まれの穂村が、二八歳時に発表した「サバンナの……」の歌との間には、四二年間の時間が横たわっている。塚本の二〇歳までの人生は、いわゆる戦前と呼ばれる時代、それから三八歳の歌集発行までの間は、戦後の復興期にあたり、穂村がこの歌集を発表するまでの時代は、高度経済成長からバブル経済期という、わが国の戦後復興が頂点を迎えた時期にあたる。これほどの差がある時代背景をひとまずおいて、歌の本意の解釈に集中すると、塚本と、第三世代の穂村との間には、驚くほどの類似性というか相同性が見られる。

戦後日本の厳しい状況から逃れたいという望みは強いけれども、行き場はどこにもなく、逃げ出すのはどうしようもなく不可能なことを詠った塚本と、「自分のやるせない気持ちを聞いてくれるのは、遠いサバンナに落ちている象の糞くらいなのだ」という、若者のやり場のない孤独の叫びを詠った穂村。「聞いてくれ」と哀願する相手は人ではなく、ただの象の糞なのだ。とくに穂村の下の方の句の形容詞を連続して畳みかける表現は、次々に襲いかかってくる孤独と焦燥感の暗喩だろう。

塚本と穂村との間の第二世代である三枝の歌は、二句切れで、切れる前後に置かれた「春のさきふれ」「鋼より」という、ハ行で始まる二つの句が持つ律動感をテコにして、まだ浅い春という景色の中に、剛直に空に向かって屹立する杉を配するという、短歌ならではの韻律と、しらべの美しさを確保しつつ、塚本的な前衛手法を意識した作品と思われる。

第四世代にあたる永井になると、状況は一変する。言葉の意味を探ろうとしても、情景の形容から内容の理解へ踏み込もうとしても、「何を伝えたいのか分からない」。さらに言えば、「どうか分かって欲しい、届いて欲しい」という、作者が歌を詠もうとする意欲の根底にある、他者に対する期待や願いが、見えてこない。では、作者が生きる時代や、その時代を象徴する思想が、歌の深層に横たわっているのか、というところでもない。歌の中心にあるのは、作者の、その時々瞬間的な「感覚」を、リアルタイムで、ありのままに表現した日常の話し言葉そのものなのである。さらに、作歌手法という観点から、こうしたモノローグ的短歌を見直しても、句またがり・対句・体言止めなどという、伝統的な短歌手法を駆使して、三・一音の定型の中におさめ、韻律にのせ、詩的芸術へと高めていく作業にまつわる、苦心の痕跡には乏しい。原初的な〈私の想い〉を〈私の言葉〉で〈私の歌〉にするには、口語、それも話し言葉が好適であろう。自分の感情をモノローグしたものがあるまま短歌になるのなら、定型への意識は遠くなり、破調すらあたり前のことになる。

作品全体が作者のモノローグのようになっているということ
は、見方を変えれば、「私性」はかなり強い。しかしながら、そ
の「私性」の中に含まれるはずの、作品の主体たる「わたし」と
作品を詠んだ「わたし」をつなぐはずの「作歌動機」に踏み込ん
だ瞬間に、作者は、なぜ短歌という形式を用いて自らの思いを
表現しようとしたのか、という根源的な問いに突き当たる。

従来、自らの思いを短歌という形に定着させるためには、定
型という制限の中で五音七音を組合せ、修辞を施して、韻律が
醸し出すしらの美しさに配慮して統辞するかを考える、とい
う過程が求められてきた。換言すれば、「わたしの想い」を、最
もよく表現するための様式として短歌という形式を選んだのな
ら、短歌が伝統的に積み上げてきた技法を駆使する中で「わた
しの歌」とするための努力を払い、詩歌としての芸術性を高め
た作品を目指すはずなのである。そうした作業をせずに、「わた
しの想い」を、モノローグとしてそのまま作品化するのなら、そ
もそも表現形式として短歌を選んだのはなぜなのか、という根
源的疑問が湧き上がるのである。

第三章 前衛短歌にみる「私性」の諸相

前衛短歌から受けた影響の濃淡にかかわらず、現代口語短歌
について、歌人・斎藤斎藤は、以下のような提案をした。

「そろそろ「口語短歌」を、二つに分けて論ずる時期ではない
か。二つとは、目の前の出来事をリアルタイムで中継する、話し

言葉／実況タイプと、過去の出来事を書く私の現在から振り返
る、書き言葉／追憶タイプである。」（「短歌人」二〇一六年五月、
「時評」）

斎藤の言う二つのタイプに属すると思われる短歌を、以下に
例示する。

日本の中でたのしく暮らす 道ばたでぐちゃぐちゃの雪に手
をさしいれる

永井祐 『日本の中でたのしく暮らす』

首都高の行く手驟雨に濡れそぼつ今さらハコを童子を聴けば

藤原龍一郎 『夢見る頃を過ぎても』

まず、「話し言葉／実況タイプ」に分類される永井の作品は、
作中主体である「私」が、日本の中で楽しく暮らし、ぐちゃぐち
やの雪に手を差し入れている、という状態をリアルタイムで実
況していると捉えられる。「私」の今だけが、歌の中に現れる。

一方で、「書き言葉／追憶タイプ」に分類される藤原の作品に
出てくる、ハコは山崎ハコ、童子は森田童子であるが、歌に散り
ばめられた固有名詞は、その時代をともに生きた人には痛切な
共感を呼ぶことができて、世代が異なれば、注釈がないと分
からない。ハコや童子の歌が流れる車内で、首都高を行く作中
主体である「私」の脳裏には、積み重ねられた過去からの記憶が
再現され、現在の眼前に現れる驟雨が、それに重なる、という情
景が表現されている。「私」の、過去から現在に続く持続的な歴
史の中で、今の「私」が展開される。

永井の作品では、今という瞬間を生きる〈私〉が詠われ、藤原のそれでは、歴史性を担う持続的な〈私〉が詠われている。

永井ら、前衛短歌の第四世代にあたる歌人らが盛んに表現するのは、「たった今・現在」を生きる〈私〉（の感動）である。このような〈私〉のことを、誰よりもよく感得する〈私〉が表現する場合には、歌の作者たる〈私〉の実感は、当然誰よりも強いことになる。さらに、歌で表現する範囲を、「たった今・現在」に限定するという「話し言葉／実況タイプ」の場合には、感動のピークを経験した〈私〉自身が、その感動の時を逃さず、日常語を用いてリアルタイムで文字の形にする、という作歌様式が、作者の実感を表現するために最適な手法ということになる。なぜなら、人間の感情の動きは、「ひと登りした後、自然に下り坂となつて消失する」という法則にしたがうものだからである。結果として、これらの歌人の詠草には、瞬間的で奥行きがない、過去とは切り離された形の〈私〉が頻出することになる。

第四章 「私性」の構造

この章では、口語短歌における「私性」の問題を、その構造的側面から解き明かしていきたい。

「私性」といえば、「作者」そのものであつた「近代短歌」の時代を経て、塚本邦雄らの「前衛短歌」の登場を契機に、「作者」とは別に、「作中主体」（または主体）という、短歌における批評用語が生まれた。前衛短歌の世界では、その作品に内在する虚

構性のために、「作中主体＝作者」という図式は崩壊し、読者が作品の中で出会う「主体」は、おおむね実在の作者自身とは異なる存在となつた結果、そもそも「作者」とは何か、「作中主体（主体）」とは何かという、疑問が生まれることになつたからである。この混乱は、前衛短歌の旗手のひとりでもあつた、岡井隆によつて以下のように整理された（要点を筆者抄出）。「短歌における「私性」というのは、作品の背後に、ただ一人だけの顔が見えるということです。その顔を、より彫り深く、より生き生きとえがくためには、制作の方法において、構成において、提出する場の選択において、読まれるべき時の選択において、さまざまな工夫が必要なのです。」（『現代短歌入門』一九六九年）

岡井説では作歌の過程を、「作中主体」として見える、ただ一人だけの顔を、さまざまな工夫を凝らして表現する、と整理し、「作中主体」の帰属を明確化したのである。「作中主体」は「作者」と同一でなくてもよく、「作品の「われ」は、必ずしも「作者」を指すものではない、ということである。

さらに時代が下がつて、現代の「口語短歌」の世界になると、「作者」と「主体」の二つだけで説明がつかない短歌が出現するようになつた。たとえば、本来なら「過去形」で表記すべき「主体」の経験が、結句では「現在形」で終止するなどという、歌の中での特制表記のズレである（その実例は、第五章で取り上げる）。

その対策として、現代口語短歌の解釈に、同様な事例が豊富

な小説の世界での読み方を参考にしたらどうか、という提案がなされている(桑原憂太郎雑誌記録 二〇二〇年九月一三日)。これは、「作者」に加えて「主体」という概念が考え出されて、前衛短歌の虚構性の解釈が可能になったように、作品の登場人物(「主体」とその行動を「地の文」で語る「話者」、そして作品を叙述する「作者」の三者からなる小説における読みのモードを、口語短歌の読解に援用しようとする試みである。

以上のように、短歌における「私性」という概念の変遷を概観してきたところで、以降では、その構造を、「主体」「話者」「作者」の三つの観点から読み解いていきたい。なお、「主体」は作品の中の「私」を、「話者」は作品の中の「語り手」をそれぞれ意味し、小説でいえば「主人公」および、「地の文」の語り手に当る。「作者」は作品を「叙述」する者を意味し、短歌と小説における差はない。

ここで一旦、視点を変えてみたい。「私性」を以下の三類型に分けた上で、短歌鑑賞の観点から論じたのが大辻隆弘である『近代短歌の範型』(二〇一五年)。私①・一首の背後に感じられる「私」(「歌を読む視点の定点となる人物」「作中主体」)私②・連作や歌集の背後に感じられる「私」(「私像」)私③・現実を生きる「私」(「作者」)

大辻は、かつての近代短歌では「私①」「私②」「私③」という等式が成り立っており、「作中主体」の背後に「私像」を感じ取り、その作品を詠んだ「作者」の人物イメージを形づくるなかで、あ

らためて歌そのものに立ちかえって、一首を読み直すという鑑賞法が効果的であったという。さらにこの鑑賞法の背後には、「作者」自身にも把握しきれない「私」の核心を、「作中主体」として多方向から思索の光をあてて、「私像」として浮かび上がらせ、作品という目に見える形に変えて読者に呈示するという創作過程の中で、「作者」自身も自覚していなかった「私」に気付くという、副次的効果が生まれる余地があると指摘する。短歌作品の読者が、私①と私②の間を往復しながら鑑賞するなかで、私③にも連想はおよび、読者なりのイメージが形づくられていく。その中でしばしば、歌のなかの「作中主体」である私①に、読者という「他者視点」でそのものの見方が加わることで、私②には複雑な陰影が重ねられ、そのイメージは「作者」である私③にも及ぶからなのである。

繰り返しになるが、この図式が成立するのは、「私①」「私②」「私③」という場合であり、口語短歌のなかでも、歴史性を担う持続的な「私」が詠われる「書き言葉／追憶タイプ」に分類される作品の場合には、最も有効な鑑賞法であろう。

では、現代口語短歌のなかでも、「たった今・現在」を生きる「私」(の感動)を、ストレートに、リアルタイムで、モノローグのように歌う、「話し言葉／実況タイプ」に分類される短歌の場合ではどうであろうか。

「私①」「私②」「私③」という等式が成り立たないばかりか、私③が前景に立つことが多く、作中における私①の輪郭はかす

み、私②は実像を結ばないこともしばしばである。そこで有効となるのは、桑原のいう「話者」を新たな「私性」の枠組みに組み込むことである。「話者」が介在することで、「作中主体」は短歌作品の中で自由なスタンスをとることが保証されて、「作者」の意図する（リアリテイ）の強調も叶えられるのである。最も大きいのは、モノローグ的表現の短歌でしばしば見られる、「結句の『現在形』終止」に象徴される、「おかしな日本語」の問題が克服されて、作品の中を自由に動き回る「作中主体」の姿を「話者」がそのまま物語っても違和感のない短歌が成立するのである。

以上をまとめると、現代口語短歌における「私性」は、「主体」「話者」「作者」の三者からなり、それを包含するようにして、大辻のいう「私像」があるといえよう。

次章では、いくつかの作品を題材として、この現代口語短歌における「私性」の問題について考えていくことにする。

第五章 現代口語短歌における「私性」——今・この瞬間のかげへのなさを、リアルタイムに詠いたい——

口語短歌を作ろうとする出発点は、作者の念頭にある〈私の想い〉を、日常を送るなかで使い慣れた言葉を用いて、短歌という形式にのせたい、という動機からであろう。しかし、定型という型があるために、文語であれば無理なく収まる字句が、口語ではしばしばはみ出すために、伸びやかさを失うし韻律に乘ら

ない。仕方なく字余りや句またがりて、調べを曲げてでも、定型という枠内に収めたりする工夫の跡を目にすると、こうまでして口語短歌にこだわるうとするのは、なぜだろうという疑問に帰してしまふ。

この定型との格闘を、卓抜な技巧を凝らすことで克服したのは、俵万智である。俵の技巧の特質は、以下のように要約される。すなわち、①定型・三十一文字という外枠を堅持しながら、その内枠となる五・七・五・七・七という句切れにはこだわらず、字余りや字足らずが生まれた場合には、自在にそこを跨いだり越えたりすることで調整して、字数の外枠は守ること。②あえて内枠を外すことで、ひとつの句には収めることのできない会話文や固有名詞などといった、いわゆる長尺言葉までもが、短歌の用語として、採用可能になったこと。そして、③古語や枕詞を活用したり、本来、七音であるはずの結句を、「二音の動詞」プラス【五音の体言止め】という形にすることで、詠嘆の助動詞を語尾から省く、というテクニクによって、字数を節約する、という三点である。定型という外枠に拘ることをテコにして、その内枠の自由度を上げることで口語文を無理なく活用する、という俵の手法は、万人に通用する技法でないことは明らかである。ただ、日常で感じるちよつとした心の揺れのような題材を、日常使いこなしている口語を使つて、〈私の想い〉をちよつとだけ表現するのには、短歌にはちよつといいであろうことも、容易に想像できる。

以上のようなことを念頭に置きつつ、実際の作品を見ていくことにしたい。

たくさんのおんなのひとがいるなかで わたしをみつめてくれてありがとう

今橋愛 『〇脚の膝』

イルカがとぶイルカがおちる何も言っていないのにきみが「ん？」と振り向く

初谷むい 『花は泡、そこにいたって会いたいよ』

終バスにふたりは眠る紫の〈降りますランプ〉に取り囲まれて

穂村弘 『シンジケート』

非常勤講師のままで結婚もせずに さうだね、ただのくづだね

田口綾子 『かざぐるま』

今橋の作品の字数は(五／七／五／八／八)であり、下の句はいずれも字余りであるが、会話のワンフレーズのすべてをひらがな表記としたことで、字余りという定型からの逸脱感を感じさせない出来栄えになっている。特別な修辞や詩的修飾を施した跡も見られない。それでいて、その時感じた作者の想い、歌を投げかけた相手への感謝、という作歌動機は、しっかりと伝わっている。このことは、パツと心に浮かんた〈私の想い〉を、時を置かず、普段使っている日常言葉で表現するというリアリティの持つ力に依存した効果の賜物なのだと思う。先ほどの大辻の節にならえば、今橋のこの歌では「私①」私②「私③」という等式も成り立っており、この「私性」の一致が、リアリティ

の持つ力との間で、相乗効果をあげていることも、見逃せない点である。

次の初谷の作品の字数は(六／七／五／八／六)であり、初句は字余り、二句切れで、三句と四句、四句と五句の間には句またがり表記が含まれている。先ほどの斉藤斎藤の分類に従えば、「話し言葉／実況タイプ」の歌になる。歌意は、「主体」がイルカショーを見ていたら、イルカが水面から飛び上がって、やがて水中に落下した。それを見ていた「君」が、何も言っていない「主体」の方を振り向いて「ん？」といった。ということになる。この場面を描写するためには、「イルカショー」が行われている場にいる「主体」と「君」と同じ場所で、「主体」と「君」と「イルカショー」相互のかかわり方のすべてを見ている存在が必要になる。すなわち、実況しているのはだれかという問題である。

同様な事例が豊富な小説の世界では、すでに作品の登場人物(「主体」と、その「主体」の行動を「地の文」で語る「話者」、そして作品を叙述する「作者」の三者からなる読みのモードが成立している。これを参考にして初谷の作品を読み解くと、「主体」がイルカショーを見ていたら、イルカが水面から飛び上がって、やがて水中に落下した。それを見ていた「君」が、何も言っていない「主体」の方を振り向いて「ん？」といった。ということ。このことを、「話者」が実況した、ということになる。「作者」は「地の文」を書いて「話者」に実況させるという役回りを請け負って

いるので、その一部始終を叙述しているものの、作中にはその姿を見せない。

穂村の作品の字数は(五／七／五／八／六)であり、四句が字余りである。(終バスにふたりは眠る)と詠まれている以上、ふたりがバスの中で眠っていることを認識している第三者の存在が必要になる。すなわち、初谷の作品と同様に、「話者」の存在が必要になってくる。その「話者」の視点を、「作者」が叙述しているのである。

「話者」の存在する初谷と穂村の歌を題材として、大辻の「私性」について考えてみたい。厳密には、私①という「作中主体」は、私③という「作者」とは別の「主体」である。しかしながら、歌の舞台を実況する「話者」と「作中主体」との距離は、状況を即座に実況できるだけの近さにあることが求められ、その「話者」もまた、歌の「作者」の手になることを考えれば、広義には私①≒私③といっても太過はないようにも思われる。その意味でこれら二首は、今橋の一首同様に、「私性」の分類が困難な現代口語短歌に該当すると考えたい。違うのは、初谷と穂村の歌に、定型に収めるための修辞や韻律の工夫の跡が見られることである。

田口の作品に行こう。作品の字数は(五／七／五／七／七)であり、初句と二句、三句と四句の間の句またがり表記は、きちんと定型の音数で繋げて、結句では文語表記の字句を含めた七音で見事におさめている。「ひじょうきん／こうしのままでけっこ

んも／せずに さうだね／ただのくづだね」と書き下してみると、下の句にはいつて、四句目に一字空きと読点の両方をまとめたことで、上の句の屈託と響き合い、その共鳴音が、結句の七字に向かって収束するという、進化した韻律がしつかりと味わえる。また、〈さうだね〉〈くづだね〉と対句的なリズムによって脚韻を整えたことも効果的である。

一見しただけでは、作者のモノローグ風な体裁だが、リアルタイムにその時の「驚き」を口語表現にてそのまま落とし込むタイプの、短歌的修飾のない「棒立ちの歌」(穂村弘『短歌の友人』)ではなく、散文的な心の中のつぶやきを屈折した調べのなかに収めつつも、きちんと定型の枠を守る、という高い完成度がうかがえるのである。

以上見てきたように「話し言葉／実況タイプ」に分類されるモノローグ風な歌であっても、「棒立ち」感の漂うものから、整えられた定型の中に韻律が味わえるものまで、多彩な作風が混在しており、その当然の帰結として「私性」にも濃淡が生まれているのである。

第六章『一握の砂』の中を流れる、啄木の時間

石川啄木(一八八六・一九一三)には、『一利己主義者と友人との対話』という歌論がある(創作…第一卷第九号、一九一〇(明治四三)年一月一日)。啄木の名を後世に残す歌集『一握の砂』発刊に近接した時期に出されたこの歌論の中で、啄木は

以下のように綴っている。「一生に二度とは帰つて来ないのちの一秒だ。おれはその一秒がほしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。實際便利だからね。歌という詩形を持つてるということは、我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。」

しかしながら、啄木のこの認識を理解するためには、それ以前の思想的遍歴を念頭に置くことが重要である。盛岡中学を五年で中退して、文学立志を志した啄木の、一九〇二（明治三五年）年一〇月から約七年間にわたった天才主義信奉の時代が終りを告げたのは、一九〇九（明治四二）年秋のことであつた。

自ら執筆した小説が売れないという文学的挫折と、「ローマ字日記」の中で吐露された神経症的行動制約の果てに、妻である節子の家出という衝撃に見舞われたのである。啄木は、神経質としての性格特徴が濃厚な人だったため、この衝撃の中で、持ち前の「執着性」を発揮して自分自身を徹底的に直視し、「節子に戻つてきてほしい」という「自分の心のなかの真の欲求」をかなえるためには、自分と家族が生きてゆくための糧を得るための「仕事」という役割を、誠実に果たす、という責任感に、ようやくにして目覚めた。そればかりではなく、啄木自身の言葉を引くと、「ふと、今まで笑つてゐたやうな事柄が、すべて、急に笑ふことが出来なくなつたやうな心持になつた。」（弓町より）

食うべき詩」「東京毎日新聞」一九〇九（明治四二）年二月三〇日、二月二日（七旦）「そうしてこの現在の心持は、新らしい詩の真の精神を、初めて私に味わせた。」という。その結果「実人生と何らの間隔なき心持をもつて歌う詩ということである。珍味ないしはご馳走ではなく、我々の日常の食事の香の物のごとく、しかく我々に「必要」な詩ということである。」ということに目覚めたのである。

一九一〇（明治四三）年三月一日に、新詩社的・耽美派的な短歌雑誌「スバル」とは一線を画して、自然主義的な短歌雑誌「創作」が創刊された。編集に参加した前田夕暮は、創刊号のなかで、「自分は世間並の人間であることに満足している。その世間並の人が、周囲の世間並の人や自然から受けた印象を、唯正直に表白するために、たまたま選んだのが短歌である。（大意要約）」次いで同年三月一五日には、前田夕暮の第一歌集『収穫』が上梓されたが、その「自序」の中でも「自分の思つたことを、唯正直に歌へたらよいと思つてゐる」と、「創作」創刊号の「卓上語」同様の作歌方針を書き記している。

啄木の「弓町より食うべき詩」ときわめて似かよつた言い回しで、歌誌「明星」や「スバル」とは異なる詠唱指針を述べた、この前田夕暮の論調に勇気づけられた啄木は歌作を再開し、三月一八日から三〇日までの間の東京朝日新聞に計八回、「曇れる日の歌」の小題を付された四〇首が掲載された。

これらの新趣向の啄木短歌（いわゆる「啄木調短歌」）は、上

司である玄耳渋川柳次郎の目にとまって歌集としてまとめることをすめられ、その後の曲折を経て、この年の十二月一日には『一握の砂』として世に出ることになるのである。

以上見てきたように、それまでの思想的弱点であった天才主義を克服して、「生活」に即した平明なものの見方を歌の源泉として位置づけることによって編み出された啄木調短歌の神髄は自分の心理を詠う点にある。これを、「歌を作る」という技法的側面から整理してみたい。作歌の発端となるのは、日々の生活の中で、何かに触発されて浮かぶ「感じ」である。そのような「心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じ」を、自分の「いのち」のありようが自分の意識の中に投影されたものとして捕らえ、それらを、その時々「自分」と見做して言葉として定着させ、継続して記録に残すこと(A)を歌作の核心に据えたのである。

さらに、文字にした「刹那々々の感じ」を感知した「自分」を、その活動の集合体である「生活」の中に位置づけることで、自分同様に活動する他者の活動をも包含する「国民生活」の一部とした。そう考えることで、自分の「いのち」のありようが投影された「感じ」は、「生活」を仲立ちとして、「(自らを含めた)国民生活にしっかりと根を張るものである」という、ものの見方が明確になる(B)。さらには「感じ」の源泉は、それを捕らえた「自己」と「国民生活」との間で起こる相互作用の中にあり、そこから生まれてくるもの、という複眼的な捕らえ方も可能と

なる。

心理学では、「他者視点での私の体験」を「自己(Personality)」と言い、相手と共感することで「他人のなかの自己」が観察できるとした。一方の「自我(Identity)」は、自分が考える「自分」のことを指す。この観点から言えば、前記(B)は「自己」の歌、前記(A)が「自我」の歌ということになる。

啄木調短歌創出にあたって、啄木はどう心を砕いたのだろうか。その委細は、一九一〇(明治四三)年に土岐哀果が上梓した第一歌集『NAKIIWARAI』によせた、啄木の批評文に尽くされていると思われるので、大意要約して以下にその概要を示したい。

「この集を一讀して感じたのは、著者土岐哀果氏が、最も歌人らしくない歌人であらうといふ事であつた。其の作には歌らしい歌が少くない。歌らしい歌、乃ち技巧の歌、作爲の歌、裝飾を施した歌、誇張の歌を排し、日常生活の中から、自ら歌になつてゐる部分だけを摘み出して、不眞面目ぢやないかと思はれる程の正直を以て、其儘歌つたといふ風の歌が大部分を占めてゐる。たゞ誰でも經驗するやうな感じを、誰でも歌ひ得るやうな平易な歌ひ方で歌つてあるだけである。其所に此の作者の勇氣と眞實があると私は思ふ。」(『NAKIIWARAIを讀む』 一九一〇(明治四三)年八月三日「東京朝日新聞」)

ここで啄木が主張していることは、以下の三点である。

(a) 歌の題材は、日常生活で誰もが經驗するやうな「感じ」

に求める。

(b) 表現にあたつては、技巧も作爲も裝飾も誇張も加えない。

(c) 否応なしに三二文字という型の中に推し込めない。

一九一〇(明治四三)年八月といへば、啄木が歌集『一握の砂』の前身となる、歌稿「仕事の後」の第二次改稿を行つていた頃である。のちに『一握の砂』として結実した啄木調短歌には、啄木が意図した「中年の歌」の香りが濃厚である。与謝野晶子らの『明星』世代が追及した青春の歌から、仕事・家族・望郷・貧困・病氣・社会意識など、「国民生活」のなかに広く求めた歌の題材には、啄木の心の千姿万態が込められ、近代化という大きな社会変革の波に翻弄される人々の心の索引ともいうべき壮大さを見せることになった。

第七章 近代短歌と現代短歌の分水嶺「時間軸」に貫かれた時間の流れの希薄化

川野里子は、「時間について」という短歌時評(『短歌研究』

(二〇一四年二月号)のなかで、角川の二〇一三年版「短歌年鑑」に収載された座談会「秀歌とは何か」を題材にして、参加した三人の歌人があげた秀歌の条件について考察している。三人は、岡井隆(一九二八—二〇二〇)、米川千嘉子(一九五九—)、永井祐(一九八一—)で、奇しくも、前衛短歌の勃興世代、それを享受した、岡井から言えば孫といふべき世代、そして、前衛短

歌が当然視され、前衛という意識そのものが希薄となった曾孫世代、という構成であつた。

岡井は、「展開するイメージ(視覚的なもの)の美」「一首の韻と律のこころよさ」を、米川も、「くきやかな韻律・文体の味わいが渾然となつて、豊かに感情や認識が表現されている」という条件をそれぞれ挙げたが、微妙な差を除けば、両者の間には大差がない。これに対して、永井のあげた「面白い」「すごい」「見たことない」という条件には、両者との間に、明らかに異質なものがある。

岡井と米川の主張を要約すると、心に残る事象などに遭遇した作者が、その感動を詠んだ短歌という形式によつて生まれる韻律や文体などによつて、それを読む者の中に生まれる感情と、そこから二次的に喚起されてくるイメージの快さを、秀歌の条件としているのである。このことは、読者が短歌を、読んだ後、

「短歌の韻律や文体によつて(視覚的な)イメージが喚起される」↓「そのイメージの美しさを楽しむ快さ」を楽しむ短歌が秀歌である、ということである。さらに、短歌を読んでそこからイメージが喚起されるまでには、「時間」という、もうひとつの要素の介在が必要と指摘したことにも留意しておきたい。その「時間」に、読者は何をするのだろうか。一読した短歌を脳裏に留めながら、日常業務に携わり、ふとした機会にその短歌が甦り、その味わいを反芻することもあるだろう。いずれにしても、「時間」が果たす助力なくしては、果たせないことである。

これに対して、永井のあげた三つの条件は、いずれも瞬間的な感情であり、意外さが醸し出す、一種の「驚き」なのである。

その驚きは、作者が短歌を詠む際の契機となり、短歌という作品（表現）の中に溶け込ませようとするものであるが、読者に、作者と同様な驚きを喚起させ得るだけの力があるかとなると、そう簡単なことではないと考えられる。

永井の主張を要約すると、作者が遭遇した場面で感じた「見たこともない、すごい、面白さ」という一種の驚きを定着させた短歌を読んだ者に、作者同様の驚きを喚起できる作品が、秀歌なのだという。「作者の驚きと同様な驚きを読者に喚起させる作品が秀歌」という、永井の指摘に添う短歌の形とは、どのようなもののだろうか。

ひと読みすると、すぐに了解できるような情景や直感が支配する情景のことを想像するのなら、それらは、スポーツ中継の中で切り取られる、例えば勝負を決める劇的シーンに置き換えられるようなものではないだろうか。そのような、「瞬間」に重心が移ったような「時間」の中で遭遇する面白さ、が浮かんでくる。「瞬間を生きるということ」とは、「通過した瞬間は過去へと振り捨てるということ」を意味して、「永遠の現在を生きるということ」と同義で、極端に言えば、「思い出を持たない」ということになる。

この問題について考えるために、「現代短歌」と「近代短歌」から三作品をあげてみる。

横浜はエレベーターでのぼっていくあいだも秋でたばこ吸いたい
永井祐 『広い世界と2や8や7』

忘れずにいることだけを過去と呼ぶコトトンに瓶の口を押しあて
大森静佳 『てのひらを燃やす』

手套を脱ぐ手ふと休む／何やらむ／こころかすめし思ひ出のあり
石川啄木 『一握の砂』

永井の歌は、本来なら「ある秋の日に横浜でエレベーターに乗ったあいだじゅう煙草が吸いたかった」となるはずだが、倒置法を用いて、作者の動作の主体である「エレベーターでのぼっていく間」の前後に、「横浜」と「秋」という名詞を置いて挟み込んで前に置き、結句は「たばこ吸いたい」という、その「一瞬（の思い）」を閉じこめている。日常のしゃべり言葉を写しただけでは詩にならないことを念頭に置きつつ、できるだけ口語で書いてポエジーを発生させるために、名詞が少なく動詞の多い文体になっている。一般的に名詞は、動きを表さず、時間性を内包しないからである。永井の歌に動詞が多いのは、ありふれた普通の世界に生きる〈私〉の「今」という一瞬を表現したい、という作歌意図に由来していると考えられる。

大森の歌の主題は「時間の流れ」、それも「時間の流れに触れたときの悲しみ」である。万人に等しく与えられる時間は常に

流れており、人はその流れの中で一喜一憂し、その集大成が各人の人生と呼ばれるものとなる。人は、時間そのものに触れることは出来ないが、時間の流れを感じることは出来る。掲出歌の前半「忘れずにいることだけを過去と呼ぶ」が言うように、流れてくる時間の中で経験した出来事を記憶しておくことは可能で、その記憶の中にこそ流れ去った時間は、「過去」という名で残ることになる。後半の「コットンに瓶の口を押しあて」の部分は、その記憶の主体である「私」の实在を、「瓶の口にコットンを押しあて(る)」という動作を通して、「現在」という時間の流れの中で規定している。永井とは異なる、「私」の「今」が表現されているのである。

啄木の歌は、『一握の砂』の最終章、「手套を脱ぐ時」の章頭歌である。勤め人が帰宅して、緊張がゆるむ時。そんな時に心に浮かんでくるのは、とりとめのめないこと、どうでもよいようなこと。啄木の歌の主眼は、心をかすめた何ごとかが何だったかということではなく、帰宅直後に手套を外して緊張がゆるむという勤め人の動き全体でもなく、それが心をかすめた一瞬に置かれているのである。この「一瞬」を主題としたことで、後世になっても、この歌の読者は「そういうことなら、自分にもあった」と同感し、共感の輪が広がったのである。そればかりではなく、人の心の動きを題材にしたことで、「一瞬」という時間は、「人の心」と連動する形で、歌の基盤として長く存続出来るのである。

第八章 まとめ

感性の共同性を基軸とする古典和歌から離れて、「近代短歌」が切り開いた「自我の詩」では、「歌を詠む作者自身が、短歌という形式を用いて、作中で表現した自らの姿」が追及された。その後の「前衛短歌」から、さらに時代が進んだ「現代口語短歌」では、「作品中の主体」と「作者」との関係性を論じるだけでは説明がつかない短歌が出現するようになったため、短歌批評上の概念である「私性」が再検討され、それを、従来からの「作中主体（主体）」に加えて、「話者」「作者」にまで拡大されたことで、一定の理解が可能となった。また、その拡大過程の中で、「現在（の一瞬）」に重きをおいて、それをそのまま口語で表現した、モノローグ風な体裁をとる作品の理解にとつて、「話者」の存在が有用なことが認識されたのである。あわせて、「現在（の一瞬）」を切り取って作品にする、といっても、その作品の中にかがえる「時間」の觀念には、「近代短歌」と「現代口語短歌」との間には、大きな差があることも明らかにした。近代短歌では、「私」が捕らえた「現在（の一瞬）」を、それまで生きてきた歴史性を担った「私」の中に取り込んで表現するため、「時間」という要素の存在が作品の中にかがえるのに対して、現代口語短歌では、「私」が捕らえた「現在（の一瞬）」を「話者」がそのまま実況中継ふうに表現しようとする様式をとるため、時間という要素が希薄になってきている。

石川啄木が「啄木調短歌」を詠むための核心に据えたのは、

日々の生活の中で、何かに触発されて浮かぶ「感じ」であつたが、そのような「心に浮んでは消えてゆく刹那々の感じ」を、自分の「いのち」のありようが自分の意識の中に投影されたものとして捕らえ、その時々「自分」と見做したうえで言葉に定着させ、継続して記録に残すことまでも、歌作の目的としたのである。啄木は、そのようにして生み出された歌の読者として、明治維新以降急速に進展した近代化の結果人口の流動化が起るることによって出現した『都市住民』を想定した。その歌論の実践形として世に出た『一握の砂』を、そうした新しい階層のための「中年の歌」として位置づけたことは、啄木が歌作にあたって、常に「時間」を念頭に置いていたことを示すものである。

短歌の「私性」の観点に戻れば、啄木の「いのち」のありようを「感じ」る、「作中主体」である「私（＝啄木）」は、まず、その「感じ」を生み出す「生活」をなかだちとして、背後にある「（自らを含めた）国民生活」にまでしっかり目を配り、次に「作者」として、そのような「感じ」を、それを捕らえた「自己（＝私）」と「国民生活」との間で起る相互作用の結果として複眼的に捕らえて、歌を詠む、という図式が考えられる。その時々々の感じを、その時々々の国民生活というフレームの中に配置するという作歌手法は、啄木短歌が本質的に「時代の子」であることを示すが、時代が移ってもほとんど変わらない「人の心」をも、卓抜な表現力によって歌の対象に含めたことで、「啄木調短歌」は「近代短歌」の金字塔となり得たのである。

現代口語短歌を評する上で拡張された「私性」に「話者」という要素が新たに加えられたことは、作品の中で、短い時間に「主体」とそれ以外の登場者が交錯する状況を、リアルタイムで詠もうとする「作者」が多くなつたためだろう。作品という場の中で、「作者」に代わって「話者」が説明することで、短い時間に起きたことを整理するのである。作者の見つめる時間が、瞬きをして足りるような瞬間と、一人の人生を覆い尽くすような何十年にもわたるスパンとでは、見えてくるものが全く異なることは言うまでもない。生活者の送る「時間」という要素が、近代短歌に比べて大きく変容した現代短歌では、「過去から連続する「時間」が希薄になる中を、現在から未来に向けてどう生きるのか」という姿勢に表現の主眼が置かれているのかもしれない。前衛短歌の登場によって、「作中主体＝作者」という図式は崩壊し、現代ではモノログ風短歌の登場によって、作品という場の中を流れる時間は短縮した。いつの時代にあつても、短歌作品とは、時代の空気を体現する存在であることだけは確かである。

選 評

安東 璋二

小説は応募九篇。数は多くないが過半数の作品が制限枚数いっぱいか、それに近くを書き切っている。意欲的に書いたということだろう。筆力にも応分以上のものがあ
り、近年で最も読みごたえがあった。選考もいささか心を勞したが結果的に以下五篇が心に残った。

島田農「氣になること」、父の転勤で残された祖母と大学一年のわたしの家では高齢の祖父しかいなくなる。父は祖父の運転を危ぶみ、若いわたしが免許をとることに
も反対している。一方で必要な買い物などにも車のない生活は高齢者や学生にも不便な時代になっている。祖父の運転をやめ
させるには学生のわたしが免許をとるし
かないという家族の事情が手際よく描か
れる。平和な家族の日常がたとえば父の転
勤という一事で一氣に困難に見舞われる
という不安定な日常というものを考えさ
せるが、その日常がうまく落ちところに落

ちついてホッとさせるなりゆきが肯かせ
るように描かれている。若いわたしを視点
人物とした作者の老練な筆さばきに感心
した。

函館というマチの歴史的時代特性に取
材した対照的作風の二作も印象に残った。

山本大「ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシ
ケヴィチの離任」は、幕末の箱館に初
ロシア領事として赴任して足かけ七年、自
ら願ひ出て帰国するその一日の屈託した
思いを描く。その屈託は異国人である自分
と違和感なく接してくれた箱館の親しい
知人たちとの別れを惜しむ思いだけでな
くそれを通して当時の対馬事件をめぐる
日本とロシアの政治外交上の問題が必然
的に絡んでいる事情が明かされてゆく。そ
れを異国人であるが東洋の言語や文化に
造詣が深く理解もあるロシア領事の屈託
として、自ら戦友として評価するニコライ
修道司祭の前向きな覇氣と対比させなが
ら一篇の物語として消化した作者の筆力
はなかなか奥深く、またその主人公を異国
の領事として違和感なく自然に描き切っ

た筆力も評価したい。

水関清「後北海日乗」異聞」。前記山本

作品は幕末開港時の箱館に取材した作品
だが、これは明治十年代の函館と森林太郎
鵠外の若き日の交わりを描いている。前半
は維新後の森家の祖父、父の動靜から書き
出してやや冗長と感じではあるがよく調
べて書いている。ここから林太郎がドイツ
留学を経て陸軍省医官に任官し、その任務
で函館を含む東北方面への業務に従事し
た最古の日記に描かれた函館の三日間が
主たる対象として描かれる。解説的叙述が
目立つ文面が後半、函館の三日間あたりか
ら小説らしい展開となつて読ませる。鵠外
森林太郎と函館のかかわりも興味深く、山
本作品と並んで幕末から明治にかけて開
けてきた函館の歴史的時代の特性をあら
ためて考えさせる一篇になっている。

以上三篇を本年度入選作として評価し
たが、

佐藤健「さあ、行こう」もよく考えて書
かれている。定年退職者を対象とした時の
政府の退職者支援制度の説明会で、主人公

が希望する劇団入団の道が開ける。大手芸能プロが主管する有名劇団Aと中堅広告代理店が運営する劇団Bの体験入学から

Bを選んだ主人公が、地方公演で中学生の時に憧れた夢の記録と出会う話。近未来の退職者支援制度による話のなりゆきが興味をひくが、語り口がやや単調平板でもうひとつ描き方の強弱がほしかった。

園部敏恵「昭和期の回想」 昭和一ケタ生まれの母の人生を中心に、その家族の動静を、娘の視点で描き、昭和という時代を浮き上らせる。一方でその昭和という時代の

長さをあらためて感じさせる一篇にもなっている。この時代をひとくりに語ることとは容易ではなく、小説としての起承転結を求めるのは難しいが、家族が生きてきた昭和期を振り返り記憶に残る懐かしい回想を綴ったという末尾の文章通りの作品として評価すべき一篇だろう。上記二篇は佳作として評価した。

「薄紅の林檎の実よ」は若い時に最後にかう約束をした男女が高齢の女性の病床で約束通りに会う話。丁寧な語り口は好ま

しいが着想を活かす話の工夫が欲しかった。

「オレンジ色の…」 不可解な突然死の事故が相つぎ、必ずオレンジ色の上着の人物が目撃される。怪談風の雰囲気のある作品だがまとめて評価する手がかりを得られなかった。

「誘惑」 はゆきずりの男女がバーで出会う話。よくある話のその入り口で終わっている。

「あかねちゃんとみさきちゃん」 写真つき童話というタイトルでほぼ笑ましいが、そのつくりになりきれていなかった。

評論二篇

高橋剛治「孔子を巡る物語」 は、孔子一

門の言行録としての「論語」が、孔子没後三百年の漢代から国家教学の儒教として伝来され、以後、千年に及ぶ中国官僚制国家のイデオロギーとなり、孔子も聖人として偶像的存在となってきた由来や、日本に於てもとくに江戸時代では朱子学を官学として武士階級や富裕町人層にも波及し

て幕藩体制を強く支えてきたことなど、それが欧化政策をとる明治維新政府から除外されるも、知識層には深く根づいて現在は優れた処世法として国や時代を感じさせないものになっている事情などをまとめ、後段では中島敦など六人の作家の作品から孔子とその一門のエッセンスをとりあげ、現在でも尊敬されるべき歴史的人間として記述されていることなどが、要を得て述べられている。大きなテーマをセンスよくまとめあげている。

水関清「短歌における『私性』とは何か？」

前回入選作にひきつづく論作だが、前回よりも更に論が曲折してまとめにくい。論のまとめとして書かれた第八章のみを辿ってみる。感性の共同性を基軸とする古典和歌に対して近代短歌の「自我の詩」は、作者自身が作中で表現した「自らの姿」が追及されたが、その後の前衛短歌さらに現代口語短歌では作品中の主体と「作者」の関係性を論ずるだけでは説明のつかない歌が出現するようになったため、短歌批評上の概念である「私性」が再検討され、それ

が「話者」「作者」までに拡大されたことで一定の理解が可能となった。また現在の一瞬に重きを置いたモノローグ風な作品の理解には「話者」の存在が有用なことが認識された。ただその中にかがえる時間には近代短歌と現代口語短歌の間に大きな差があることも明らかになった。石川啄木は、啄木調短歌の「いのちの一秒」を自分と見做して言葉に定着し記録することを自作の目的としたことで「時代の子」であることを示して近代短歌の「金字塔」になりえたが、一方現代口語短歌で拡大された「私性」に話者が加えられたことで、多彩な作風が混在している。いつの時代でも短歌作品とは時代の空気を体現する存在である、と結ばれている。制限枚数を意識して、詰めて書いた影響もあるかと思われるが、前衛短歌以降の複雑な現代口語短歌の諸相などを大づかみにまとめあげた筆力は労作として評価したい。

あの水舞台に帰る日

佐 藤 健

今年の第三五回『市民創作函館野外劇』が千秋楽を迎えました。

野外劇は、毎年夏の夜に国の特別史跡『五稜郭』で市民ボラティアによって上演される歴史劇です。提唱者フィリップ・グロード神父の祖国、フランスの『ル・ピディフ野外劇』から火種をもらい、一九八八年から公演が始まりました。

奇しくも、その夏に私は函館に転勤して来ました。一九八八年八月一日の夜、函館駅のホームに降り立った私は大輪の打ち上げ花火に迎えられたのでした。しかし、野外劇のことを知ることも観ることもないまま、三年間の函館勤務を終えてしまったのです。

次に私が函館に戻って来たのは、十六年後の二〇〇七年でした。前回の函館勤務で結婚した私は、それ以来函館を離れて、横須賀、大湊、佐世保、東京、木更津、大湊、函館と二、三年ごとに転勤を繰り返す生活が続けて来ました。

翌年はネズミ年で私の干支でした。それを機に何か新しいことに挑戦したい思いがありました。そして、年が変わった二

月の新聞記事に見つけてしまったのです。『函館野外劇』オーディションの記事でした。

○第二一回（二〇〇八年）公演

公演回数 全十二公演（七月四日からの金曜日と土曜日）

開演時間 十九時四五分

会 場 五稜郭跡特設会場

早速、オーディション申請書を事務局に提出したのでした。

第一希望・弁士

第二希望・ブリュネ大尉

その時は、弁士がどんな役でブリュネ大尉が何者であるかも知りませんでした。が、弁士なら何とかなるだろうと考えたのです。小学生の頃から朗読は得意な方でした。ブリュネ大尉は、軍人の役だと想像でき、当時の私の職業と関係があるものでした。

二〇〇八年三月二日（日）にオーディション会場の千代田小学校に行きました。確か自転車で行った記憶があるので、街中に雪はなかったように思います。会場には若い人ばかりで、四

八歳の私は場違いな感じがしたものです。私の希望役の弁士は、箱館戦争を解説する役でした。若い女性を含む三人が、審査員の前で台本の指定部分を読み上げます。

「なかでもすさまじかったのは土方歳三が守った二股口での戦い。土方は命じた。撃て！撃って撃ちまくれ！その恐れを知らぬ戦いぶりに、新政府軍はひるんだ。（略）土方は自ら突撃隊長となり、当たるを幸いに斬りまくった。血煙のあがる激闘が続くこと三日三晩。ついに新政府軍は敗走したのであります。恐るべし、土方」

箱館戦争の土方歳三が活躍した場面を、私は滑舌よく声量上げて読み上げました。すると審査員の一人が質問して来たのです。

「どうして、声が大きいのですか」

意外な質問に一瞬戸惑いましたが、

「仕事上大きな声を出すことが多いので」

と答えたのです。その時は具体的な仕事の内容を話していませんでしたが、私は海上自衛官でした。入隊以来、大声での挨拶、返事、報告、号令を求められます。

「腹の底から声を出せ」

班長、教官から大声で指導を受けました。整理して上官から点検を受けるとき、質問に答えられなかった場合、ひと呼吸おいて、

「忘れしました」

と、大声で答えます。自衛隊では大声と勢いで物事を乗り切る文化がありました。もともと、四十年以上も前の話です。

果たして、届いたオーディション結果通知には、『弁士』ではなく『長老』と記されてありました。

三月十六日（日）に、稽古場所になっている五稜郭公園に隣接する『最上寺』でオリエンテーションがあり、今後の稽古の進め方等について説明を受けました。

翌週からの土曜日と日曜日の十三時から十六時までが稽古の時間でした。

それぞれの役はダブルキャストで、一つの役に対し複数の人がいます。長老の役も私のほかに、ベテランのTさんもしました。演出担当のIさんからは、ダブルキャストの理由を「不慮の事故に対するほか、同じ役を続けているとマンネリとなつて演技に新鮮さが欠けるから」との説明を受けました。

稽古に参加するのは、前年までの経験者を除いた今年の新人メンバーに限られました。ペリー役のAさんとコロポックル役の小学生から高校生までの女子たちでした。

演出のIさんは三十代の男性でしたが、呼吸法や発声法など演劇の基礎を丁寧に、根気よく教えてもらいました。

「喜怒哀楽の表現にメリハリをつけて、佐藤さんの長老をつくりましょう」

その時の台本には、演出から指導されたことがいたるところに書き込まれています。

コロポックルは『カゼ』『ソラ』『ニジ』『ウミ』の四役あり、一つの役に三人が当てられていました。総勢十二名の女子たちのエネルギーは凄まじく、おしゃべりが始まると際限ない状況です。その度に演出から、

「遊びじゃない。うるさくするなら帰れ」

と、厳しい注意を受けていましたが、そんなやり取りは、ずっと続きました。コロポックル役の彼女たちは、セリフのほかにもソーラン踊りとフラッグダンスも覚えなければならず、水曜日の十七時から十九時の稽古もありました。

稽古を重ねるうちに、彼女たちとの距離も少し縮まって、リクエストに応じて、当時流行っていた芸人のギャグ、

「ラーメン、ツケメン、ボクイケメン」

を言わされたりしました。

時には、劇団四季のメンバーが来て指導を受けました。私が注意を受けたのは、セリフの語尾が上がってしまうことでした。

「言葉は頭から最後にかけて、ピッチが弧を描いて下がるのが基本です」

手振りを交えながら説明を受けました。語尾を上げるとリズムが出て次のセリフが言いやすくなります。演劇用語ではそれを『うたう』と表現します。

この時の教えは、今私が参加しているボランティアアの『音訳』（視覚障害者のために本の録音データをつくること）にも大

変役立っています。

また、彼らの身振り手振りは実にスマートで、指先、足先まで神経がゆきわたっているのがわかりました。今から思えば、随分と贅沢な時間だったと思います。

劇団四季との繋がりは他にもありました。もらった台本に記されていた脚本家の名前が『高橋知伽江』さんです。彼女が劇団四季に所属していたことを知ったのは、ずいぶん後のことです。最近では、二〇一四年に公開されたデイズニー映画『アナと雪の女王』の挿入歌『レット・イット・ゴー』の歌詞を翻訳したことで有名な方です。

四月十九日（土）の夜に市内の飲食店で総決起集会が開かれました。その自己紹介で、「弁士を希望して、オーディションを受けたら長老になりました」

と言うと、

「声の大きさが決め手でした」

東京から来ていた制作スーパバイザーの方が答えてくれました。

翌日の午後、市内の小学校の体育館で稽古があり、そこに制作スーパバイザーの姿がありました。いきなり、長老とコロポックルのオーブニングの場面の稽古です。

「悲劇はアイヌだけに降りかかったわけじゃない。宗教が原因で尊い血が流された事件もあった。徳川家康がキリシタンを禁止したあと幕府の目の届かない蝦夷では信者の数は増

えていった。(略) 結局、大沢金山、千軒岳の金山で一〇六人の信者が神に召された。むごいことじやのう」

長老のセリフの中で一番長いセリフです。

「ここは、おいしいさんが、孫たちを集めて語って聞かせるように」

との指導をもらい、また、こんな質問もされました。

「弁士の役が、なぜ上下とも赤い服を着ているのかわかりますか」

明治二七年、全身赤ずくめの服装で北海新聞の号外を函館市民にまいていた信濃助治をモチーフにしたものでした。野外劇に登場する人物は、みんなこの土地で生きた人であることを思って演じてほしいと言っていたのを覚えています。

公演の一月前になると五稜郭の堀の上に舞台が設置され、そこで稽古をしました。その水舞台から階段を上ると平地があり、さらに奥には高い土塁を背にした大階段が組まれています。堀を挟んだ対岸には、建築用足場で作られた一五〇〇人収容の客席がありました。舞台奥の土塁を越えた裏側にキヤスト村があり、衣装が入ったコンテナと役者が着替える Tent がずらりと並んでいました。

他の役者さんたちと顔を合わせたのは、七月二日(水)の本番二日前のゲネプロ(総練習)のときでした。その人数は、私の想像をはるかに超えたもので、役者が三〇〇人、スタッフが一〇〇人以上です。みなさんがボランティアとして参加して

いるのです。

五稜郭の地形を利用した舞台上を馬が疾走し、堀では船が行き交っています。戦闘場面では、船の大砲が大音量で火を吹き、地上では火柱が上がります。レーザー光線や色とりどりの照明が、フラッグダンスやソーラン踊りを盛り上げます。

本番では、当日飛び入り参加の人もいて、その人たちへの踊りや動きの指導と衣装の着付けでスタッフは大忙しです。また、複数の役を掛け持ちする人も多く、戦場のような舞台裏でした。

初めて舞台に立った夜は、ただ夢中で覚えたセリフを言うことだけに集中し、あつという間の七五分間でした。

長老の役がないときは、黒子をしました。セリフの多い長老が詰まったとき、助けられるようにとのことでしたが、先輩長老の方には、そのような場面はありませんでした。先輩の黒子の指示を受けながら、松明(たいまつ)の受け取り、フラッグの手渡し、船の横付け、可動浮橋の固定など色々な作業がありました。当時の浮橋は、水中電動ポンプを利用して可動できるようになっていました。過去にはロープを人力で引く張って動かしていたそうです。また、浮橋作業で心に強く残っていることがあります。

フィナーレでコロポックルに扮した小さな子供たちが手前の水舞台から浮橋を渡って対岸に移動する際に起きた事件です。水舞台と浮橋には二〇cmに満たない隙間がありました。

渡るときにつまずかないように、

「足元に気をつけて」

と、一人ひとりに声を掛けていた私の視界から突然子供が消えたのでした。足元を見ると小学校低学年の男の子が胸までその隙間に落ちていました。すぐに引き上げて怪我の有無を確認しましたが幸い無事でした。ヒヤリとした瞬間でした。

ロボツクルのヘッドセットマイクが壊れて、ハンドマイクを渡したこと。堀に放水した水が風向きで舞台にかかってしまい、大急ぎでモップで拭いたこと。その年はありませんでしたが、必ず一人は堀に落ちる人がいてその救助にも当たらなければなりません。

黒子として、舞台に立つ場合は、舞台全体に注意を払わなければなりません。舞台進行の先に意識を集中すると役者の動きや音響、照明の効果がよくわかりました。何より裏で働くスタッフの方の仕事に目が行きます。馬の世話をする人、馬糞の掃除をする人、早く来てたくさんの松明のスポンジに灯油を染みこませる人、何丁もの銃に火薬を詰める人、多くの裏方に舞台が支えられているのがわかりました。

本番前の練習時間に撮った写真をアルバムに整理して『ロボツクルたちと遊んだ夏』とタイトルを付けました。

翌年の一月に転勤の発令が下り、私は妻と二人の子供を函館に残して東京に向かい、五五歳の定年まで単身赴任生活を続けました。単身赴任中でも正月や五月の連休、八月のお盆に

合わせた夏休みには家族の元へ帰っていましたが、野外劇の公演時期とは合わなかったため観ることはありませんでした。六年後、定年を迎えた私は函館に戻って地元の造船所に再就職しました。そして、私は衝撃の事実を知ることになります。

○第二八回（二〇一五年）公演

公演回数 全三十二公演（七月十八日から土曜日と日曜日）

開演時間 十四時と十五時三〇分（一日二回公演）

会場 五稜郭タワーアトリウムおよび五稜郭公園一の橋付近

この年に演じられた野外劇は、五稜郭タワーのアトリウムと五稜郭公園入口広場を使ったもので規模を縮小した昼の公演でした。昔のダイナミックさも照明の煌めきもないものです。聞けば、前年の二〇一四年に野外劇の舞台として使っていた場所を含め、堀の石垣の一部が崩落したのです。野外劇での使用が原因ではないものの安全のために堀での舞台設置許可が下りなかったのです。その年は急遽キヤスト村があつた場所に特設舞台を設置して公演したとのことでした。その後の野外劇の存続について、一時は終了することでも検討されたそうです。また、緑の島に場所を移して継続する案も出されました。しかし、五稜郭での公演にこだわったのです。そして、これまでロボツクルや殺陣などで参加していた若い人たちが中心となって実行委員会を組織して続け

ていたのです。

この状況でも、演者や陰で支えるスタッフの熱意を感じました。そして何より、それを温かく見守る市民の皆さんの姿を見て心を揺さぶられたのです。

○第二九回（二〇一六年）公演

公演回数 全一〇公演（七月九日からの土曜日と日曜日）

開演時間 土曜日 十九時三〇分

日曜日 十四時三〇分

会場 土曜日 五稜郭公園一の橋広場

日曜日 五稜郭タワーアトリウム

昨年の野外劇を観た私は、八年ぶりのオーディションに臨みました。オーディション会場の受付に行くと、

「あら、佐藤さん久しぶりですね」

と、声を掛けてくださる年配の女性にお会いしました。八年前の舞台でも公演の日は、受付にいて出演者の出席確認と飛び入り参加者の受付を担当していた方でした。

「今日は、〇〇さんは〇〇の役ですね。頑張つてね」

と、一人ひとりに声を掛けていました。その時の私はその方の名前を知りませんでした。Kさんであることを初めて知りました。

オーディション会場は、私の知らない顔ばかりでしたが、二人だけ知っている顔がありました。弁士役の方と黒子役の方です。黒子役の方はMさんです。演出のIさんと対面でセ

リフの稽古をするときには、傍らに位置してセリフに詰まったとき、すかさずセリフを教えてくださいました。演出が言いしました。

「セリフを忘れたら、そのまま間をとって、黒子からのセリフを待ちましょう」

稽古中は、何度も助けられました。本番中も一度だけ助けられたことがあります。

「当時、箱館には二千人ほどしか人が住んでいなかったそうじゃ。港としては松前港のほうがはるかに賑わっていたんじやが、箱館の港の噂は、嘉兵衛の耳にも届いておった」

このセリフのタイミングを逸してしまったのです。高田屋嘉兵衛の登場シーンに見とれていたのだと思います。

「当時箱館には」

すぐに、黒子から助け船が出されました。

転勤で函館を離れることを話した際に、弁士役のSさんから言われた言葉があります。

「帰つて来るまで、野外劇が続いていればいいけど」

お世話になった二人が審査員席に座っていました。

私は高田屋嘉兵衛の役をもらいました。その年は、五稜郭タワーのアトリウムでの昼のミニ公演と五稜郭公園の入り口広場での夜公演でした。堀を使った八年前の舞台で、船に乗って颯爽と登場する高田屋嘉兵衛に憧れていたのです。でも、今は舞台上手から歩いての登場です。

「おお、うわさに聞いたとおり、箱館はすばらしい港だ。山背が吹いても大波は立たず、水深が深いから大きな船でも安心だ。本当に『綱いらずの港』だな。こんなに穏やかな港は神様がくださったとしか思えんぞ。蝦夷はこれから箱館が中心となる日がきつと来る」

演出からダメ出しが出る。

「言い回しがかたく武士のようです。嘉兵衛は商人なんだから、商人らしく」

高田屋嘉兵衛を題材にした、司馬遼太郎の『菜の花の沖』を読んでみました。まだ三〇前の若い嘉兵衛が、初めて箱館に來た喜びをどう表現しようか悩んだりしました。

ダブルキャストで、もう一人の高田屋嘉兵衛役の方と交代で演じました。嘉兵衛役でないときは、同じ場面に登場する弟・金兵衛の役をやります。セリフはありませんが、高田屋の函館の店の賑わいを表現する大事な役どころです。店前の掃除を仕切ったり、人足が運んで來た荷物を手際よく捌く様子を演じます。嘉兵衛を出迎えて大福帳で商売の順調さを報告します。

○第三〇回（二〇一七年）公演

公演回数 全八公演（七月十四日から金曜日と土曜日）

開演時間 十九時三〇分

会場 五稜郭公園一の橋広場

前年まで嘉兵衛をやっていた方が引退したため、配役は私

ひとりです。嘉兵衛は箱館に自身所有の船『辰悦丸』でやって來ました。その状況を表現するために、五稜郭公園入口広場から公園内に渡る橋を利用しました。橋の欄干を船べりに見立てて、奥から橋を渡りながら両側の欄干に走り寄って遠くを眺める演技をしました。ただ、残念ながらそこには照明もなく、手前に『五稜郭跡』と彫られた大きな石碑と看板があつたのでスポットライトも届きませんでした。でも、自分としては舞台上に登場する前の嘉兵衛の気持ちをつくるための時間として有効だったと思いました。

○第三一回（二〇一八年）公演

公演回数 全八公演（七月十三日から金曜日と土曜日）

開演時間 十九時三〇分

会場 五稜郭公園一の橋広場

高田屋嘉兵衛の場面で人足が登場します。協力団体から参加した方々で、毎回違う人が交代で演じています。これまで、荷物を担いで舞台の後ろのほうを通り過ぎるだけの動きでしたが、何とか彼らにもスポットライトを当てたいと考えた私は、演出にお願いしたのです。

「上手に嘉兵衛と並んで一緒に登場したいんです」

嘉兵衛を中心に腕組みをした人足集団の構図は絵になりました。お蔭様で、翌年の野外劇カレンダーの写真の一枚に選ばれました。

○第三二回（二〇一九年）公演

公演回数 全八公演（七月十二日から金曜日と土曜日）

開演時間 十九時三〇分

会場 五稜郭公園一の橋広場

その年の初日の公演は雨で中止になりました。次の日の土曜日も朝から雨が降っていました。午後には止むだろうとの予報もあり、一九時開場を目指して準備に入りました。今年も高田屋嘉兵衛の役です。小降りになって衣装に着替えた私が舞台に向かうといきなり雨脚が強くなって、近くのテントに逃げ込みました。開演三〇分前の開場の時間でした。そこで見た光景に私は感動を覚えました。入場を待ったくさんのお客さんが傘をさして並んでくださったのです。そして、客席に目を向けると雨に濡れた椅子の上を黙々と拭いているスタッフの姿がありました。事務局長が、気象台に問い合わせ、スマホで雨雲の動きを確認して開演を決定し、三〇分遅れで始まったのでした。

先ほどの感動を抱いたまま舞台上に登場した私は、思わずセリフに感謝の気持ちを込めていました。

「おお、噂に聞いたとおり箱館はすばらしい港だ。いや、この雨の中でも観に来てくださったお客様はもっとすばらしい」

思いがけず、会場から拍手をいただいたのです。翌日の新聞記事ではそのことが取り上げられていて恐縮しました。

○第三三回（二〇二〇年）公演

還暦を迎えたら、『長老』に再挑戦しようと決めていました。決心が鈍らないように前年の打ち上げ会の席上で宣言していたのです。最初の稽古があつた日の夜、メールが送られて来て理事会の決定が通知されました。

『新型コロナウイルス感染拡大で今年の野外劇は延期になりました』

こうして、私の『長老』再デビューは幕を閉じました。

○第三三回（二〇二二年）公演

屋外公演

公演回数 全五公演（七月十一日から日曜日）

開演時間 十五時

会場 五稜郭公園一の橋広場

屋内公演

公演回数 全二公演（八月十五日日曜日）

開演時間 十五時、十八時

会場 函館市芸術ホール

コロナ禍の世界は続いています。新人だけのオーディションが行われ、経験者は免除されました。そして、私は『長老』の役をいただいたのです。しかし、関係者全員がマスクをしたままでの参加です。ダンスも演技もマスクをしたままです。激しい動きのソーラン踊りではマスクの形状を工夫しました。表情を隠しての演技は、セリフの言い方と目力で表現しました。そして何より、公演時間が夜から昼に変わりました。

した。客席のパイプ椅子も間隔を空けた配置なので收容人員も半分になりました。それでも、

「皆様、函館の星の城、五稜郭にようこそ」

オーブニングの長老のセリフの瞬間、私の中に十三年前に水舞台から見た、あの光景が蘇りました。私の目には堀の向こうの満席の客席が見えていたのです。

毎年観覧に来てくれていた札幌の小学校の六年生の皆さんが、研修の一環で観に来てくれました。少しずつ元の世の中に戻りつつあるのを感じました。

野外劇は進化を遂げています。この年から新しい場面が追加されました。

「ようやく立ち直った函館で二人は出会った。函館カールレイモン創業者、ドイツ人のカール・ワイデル・レイモンと当時の函館の老舗勝田旅館の長女、勝田コウじゃ」

二人の出会いと別れの場面です。野外劇初のロマンスです。そして、大きな試みがもう一つありました。屋内公演の実施です。照明を使った野外劇の世界観を表現するための決定でした。

「芸術ホールじゃ、野外劇じゃないべ」

そんな声もあつたかも知れませんが、舞台が立体的になり、音響と照明が加わって昼公演では実現できない世界が広がりました。

長老役でないときは、これまでどおり、高田屋嘉兵衛を演

じました。役者の人数が限られるため、配役のやり繰りが大変なのです。観客数は、思いのほか伸びなかったもののお客さんの感想は好意的なものでした。

○第三四回（二〇二二年）公演

屋外公演

公演回数 全四公演（七月十日からの日曜日）

開演時間 十六時

会場 五稜郭公園一の橋広場

屋外公演

公演回数 全三公演（八月十三日土曜日一回、十四日日曜

日二回）

開演時間 土曜日 十九時

日曜日 十五時、十八時

会場 函館市芸術ホール

この年は、前年に亡くなった新井満さんの追悼公演になりました。『千の風になつて』の訳詞・作曲で有名な方です。

野外劇のテーマ曲『星のまちハコダテ』は、新井満さんの作詞・作曲です。多くの著名な方に支えられているのが函館野外劇です。コロナ禍が収束する見込みがない状況ですが、主要な役はマスクをはずして舞台上立つことが許されました。私は長老役で、ようやく長い髭を付けることができました。ずいぶん前から自作していたものです。十四年前の長老のときにもスタッフが私のために毛糸を使った髭を作ってくれま

した。私の長老のイメージは、世界的に有名になった映画『ハリー・ポッター』のホグワーツ魔法魔術学校の校長、アルバス・ダンブルドアであり、NHKドラマ『精霊の守り人』の呪術師、トロガイです。高島礼子さんが演じていました。

この年、昼の開演時間を十五時から十六時に繰り下げました。いくら函館といえども、夏の暑さは変わりません。七月十七日（日）の二日目の公演は、初めて途中での中止になりました。雨脚が弱まった時点で開演したものの途中で急に雨脚が強まって中止を余儀なくされたのでした。

私は、高田屋嘉兵衛を演じたあと、ロシアの領事ゴシケーヴィッチとして再登場する予定でした。高田屋の場面までは何とか持ったもののペリー提督の場面に入ると次第に雨脚が強くなっていきました。それでも私は、下手の隠しのテントで着替えを終え、必ず雨脚が弱まることを信じて出番を待ちました。しかし、願いは天には届かず、私のゴシケーヴィッチデビューは叶いませんでした。私同様に、衣装を着けたまま舞台に立てなかった大勢の人がいました。中止になった舞台はその回で終わりです。その日だけの出演だった人もいたかも知れませんが、観ていただいたお客さんには観覧料を返金しましたが、中には、

「途中までも観られてよかった」

と言って、受け取らずに帰ったお客さんもいたそうです。

こんなとき、野外劇がそうした市民の皆さんに支えられて存続できていることを、改めて実感したのでした。そして、舞台は『一期一会』であることも強く思うのです。

昼公演の千秋楽も雨模様の日でした。幸い雨に降られることはありませんでしたが、フィナーレを迎えるところに、青空が見えて来て何と虹がかかったのでした。

芸術ホールでの公演では、ちよつとした冒険を試みました。港まつりへの舞台転換の間少し時間が空きます。昼間の公演では、長老とコロポックルのお祭りの話で場をつないでいました。せつかく舞台の明かりが落とされている状況を利用して、百円ショップで購入した光るステイックを取り出しました。

「ほら、魔法の杖じゃ。この光で世の中を明るく照らすのじゃ。まずは、この会場に光を飛ばしてみよう。えいっ」
そう言つて、光っている杖を長老が振ると会場の中に光が灯り出しました。観客の皆さんがフィナーレで振るために入場時に購入していただいたペンライトです。

「さあ、ソラとウミもやつてごらん」

そう言つて、コロポックルの二人も光るステイックを振ると光は会場の中でどんどん広がっていきました。ぶつつけ本番でしたが、願いどおりの結果になってほつとしたものです。

○第三五回（二〇二三年）公演

屋外公演

公演回数 全四公演（七月九日からの日曜日）

開演時間 十六時

会場 五稜郭公園一の橋広場

屋内公演

公演回数 全三公演（八月五日土曜日一回、六日日曜日二回）

開演時間 土曜日 十八時

日曜日 十五時、十八時

会場 函館市芸術ホール

コロナ禍では、新人のみに限って行われていたオーディションが四年ぶりに行われました。三月十二日（日）に会場に行くと、新しい顔ぶれも何人か見えましたが、ひと頃の人数には及ばないものでした。

翌週の日曜日から稽古が始まりました。ストレッチ、発声練習から始めて台本読みに入ります。以後、土曜日と日曜日の午後三時半から六時まで稽古の時間です。加えて、フラッグダンスとソーラン踊りの練習が、土曜日が十九時から二十一時まで、日曜日が十三時から十五時まで場所を変えてあります。案内役のコロポツクルは必修です。他のセリフの役も芸術ホールのカーテンコールで踊るためにソーランの練習に参加したりします。

大きな変化は他にもありました。昨年まで演出を担当して

いた方が、学業に専念するために今年は一旦休むことになりました。事務局から私に演出の打診が来ました。私は、演出助手ならばとその大役を受けることにしました。演出は、舞台監督が兼任しました。

私には試してみたい演出がありました。舞台監督兼演出に変更のアイデアを提示して了解を得ながら実践してみます。即OKになるものもあれば、ダンスや殺陣、音響との兼ね合いで要検討になるものもありました。

そんな中で実現できたものにコロポツクルの動きがあります。夜の公演では照明の関係もあつて舞台上で動ける範囲に制約が生じます。しかし、昼間の公演では舞台の隅々までスポットライトが当たっている状況です。すべてが観客から見えてしまったため、観客の視線があらこちらに跳んでしまい集中力を欠くばかりか、スタッフの動きなども丸見えです。そこで、コロポツクルの二人に頑張ってもらうことにしたのです。誰よりもセリフが多いコロポツクルの役は、誰よりも厳しい稽古を積んで舞台に立ちます。コロポツクルは物語の案内役です。だから、舞台を駆け回ってもらって登場人物に関する説明に加えて、観客の視線や拍手の誘導をしてもらい、舞台の雰囲気づくりに貢献してもらおうと考えたのです。

でも、この動くというのが、演劇では難しいのです。動きには必然性が求められます。ともすれば、セリフを言うため

に移動したように見えてしまいます。無駄な動きを排除し、指先、足先の一本一本まで神経を通わせて、格好よく動かなければなりません。

コロポックルたちは、元気に舞台を飛び回ってくれたと思います。

登場人物の一人ひとりにスポットを当てる演出を目指しました。みんながこの舞台になくてはならない主役です。だから今年は、役者の力量を上げて視線を集められるようにしたいと思いました。舞台中央で紹介を受け、舞台中央で演技することになりました。

特に、ロシア領事とイギリス領事の対峙の場面では、観客の視点が現在のロシアの情勢に重ならないように手の動きまで注意を払いました。史実を淡々と伝えることに配慮したつもりです。

そして、勝田コウの場面です。去年は結婚に反対されたコウとレイモンの別れの場面を表現し、この後のことは長老が、

「こうして一度は旅立った二人は、二年後再び函館に戻って、ハムとソーセージの店を作り、日本の食肉業界の発展に大いに貢献したのじゃ」

のセリフで説明していました。今年は、再び日本に帰って来たコウとレイモンが自分たちの店を見上げる場面を加えて、二人の満面の笑顔は、観客席の皆さんに明るい未来を予

感してもらえたのではないかと思います。全てがうまく行ったかのように書いてしまいましたが、つらいこともありました。

最初の練習から十五日目の五月七日（日）の稽古で、コロポックル役の一人に役を降りてもらうことが告げられました。告げたのは舞台監督兼演出の方です。その時点で彼女はまたセリフが入っていない状況でした。中学三年生で受験も控えているため、これ以上の稽古の時間を取ることができないと判断したためです。毎回稽古には欠かさず参加して、一生懸命頑張ろうとしていた姿を見ていた私は思いました。

「もう少し、彼女にふさわしい稽古のやり方をアドバイス出来なかったものか」

私と言えば、自分が思い描くコロポックルたちの動きに目が行ってしまつて、すぐに立ち稽古に入ったのも少し性急過ぎたかもしれないと反省しています。

演技指導をする中で、人をまとめ、人に教えることの難しさを今更ながら痛感します。

今は函館の夏の風物詩と自負している『函館野外劇』ですが、実際に会場に足を運ぶ人は限定的です。

「名前は聞いたことがあるけれど」

という人が予想以上に多いのです。反対に毎年楽しみに観に来てくださる方もいらつしやいます。

また、出演者も慢性的に足りない状況が続いています。今

年のセリフチームは一回の公演で一人で二役、三役掛け持ちでやらなければならない状況でした。ダブルキャストどころではなく、誰かが欠けたら補充できる人がいないギリギリの状態でした。

問題が山積の中で、もうこの瞬間から来年に向けた準備が始まっています。来年は今年よりも面白いものにするために知恵を出し合います。

こうして、毎年の公演を続けて行く先に、『あの水舞台に帰る日』が来ることを信じてコツコツ積み上げて行きます。

来年の夏も、五稜郭でお会いしましょう。

手書きの手紙

小島 栄 樹

四十以上も歳の離れている働き盛りの青年と手紙のやりとりを始めてからもうかれこれ六年が過ぎた。事の発端は大沼湖畔にあるシャレた佇まいの小さな喫茶店でのことだった。

そう広くもない店内にはその青年と私たち夫婦だけ、それとなく耳に入るマスター夫妻とのちよつとした会話の様子から彼もこの店の常連さんらしかった。

その当時私の写真が時折新聞の「読者の写真」欄に掲載されるようになっていた。私たちとマスター夫妻との雑談のなかで最近掲載された写真のことが話題となり、隣のテーブルの青年もその写真を見てくれていたらしくいつしか会話の輪に加わりその写真についてコメントしてくれた。別れ際に名刺をもらったので後刻この写真を絵ハガキにしてお礼の言葉を添えて送った。それからしばらくしてその青年から封書が届いた。開封してみると便箋二枚にびっしりと書かれた手書きの手紙、内容もユーモアたっぷり面白く楽しく読ませてもらった。

さて次はこちらが返事を書く番であるがこういうプライベ

ートな手紙を書く機会というのは考えてみればこしばらくなかったのといざ書く段になって手紙について何かと思いを巡らせることになった。

現代では手紙を書くときに手書きにするかワープロにするかという問題がある。手書きの場合には字の上手下手が気になるし漢字についてはそれなりに気を使わなければならない。さらに言えば手書きの場合には手紙の内容にある程度似つかわしい便箋を用意する必要がある。ワープロで認めるときには字の上手下手とは無縁だし漢字については選択さえ間違わなければ細かいことに頓着する必要もなく、また文章の修正は自由自在、そして仕上がりもきれいだである。また使う用紙は特別の目的があるのでなければ普通に使われているコピー用紙で何ら差支えはない。先日会ったときにもらった名刺からこの青年にとってワープロ操作は自在であろうことは想像に難くない。にも拘らずあの手紙を手書きで綴ってくれたのである。

手紙を手書きで書く場合とワープロで作成する場合の手間

暇を考えるとワープロの方に軍配が上がるのだがそれは送る側の都合であつて、手紙の文面が全く同じであつたとして、手書きにした場合とワープロで認めた場合とでは受け取った側の気持ちはどう違うのだろうか。手書きの手紙を読んだときはワープロの手紙にはない何かホツとするようなものがあるような気がするのだがその正体は曰く言い難いで端的な表現はなかなか思い浮かばない。一般的には思いが伝わりとか情緒的であるとか言われているし、また気持ちのこもった温かい印象を受けるとか言い方をされることもある。謝意を表すときには手書きにした方が誠意がより強く感じることもあるようだ。つまるところこういうことは手紙の内容にも関連していると思われるので手書きの手紙が醸し出すワープロのときとは一味違つた雰囲気を一概にこれこれしかじかです、と簡単な言葉で言い切つてしまうのは難しいのかもしれない。やつぱり手書きだよなあ、ある日ある時どこからかそんな声が聞こえてきたような気がして返事は手書きにすることにあつさり決まつた。彼の青年は横書きで書いてくるのだが私は縦書きの手紙が好きなので縦書きで書くことにした。

いざ書き始めてみると先ずぶつかつた壁が便箋の罫線と罫線の間になつて書くということだつた。簡単なように見えるがこれが意外と難しい。それなりに気を付けて書き、一行書き終えるたびに眺めてみるのだが思い通りになつたためしがない。何とかしなければと思ひながらもこれといった妙案

もなくこの悩みは今になつても続いている。

次は厄介な漢字の話二題。たまにはあるが厄介な漢字に出会うことがある。夏が近づくと狭いわが家の庭にもバラが咲く。手紙に書くときにはカナ書きのバラでもよいのだがたまには格好をつけて漢字で書くかなどという気も起きてくる。結構難しいところに見える薔薇の一字目、クサカンムリの下は吝嗇の吝である。これは楽勝と気をよくして二文字目に挑戦、クサカンムリの下はちよつと見たところ微妙の微妙らしいがどうも微妙に違うようだ。微妙の微はギョウニンペンを書いたあとその右側にまず山を書きその下に兀を書くのだが薔薇の薇の場合は山と兀の間に横棒が一本入っている。違いはこれだけかと思いきやよく見てみるとなんと横棒の下は兀ではなく几となつてゐる。やれやれ。

「羨ましい」の「羨」という文字も曲者である。この青年から届く手紙にはうらやましいなあと思うことがときどき書いてある。活字の印刷物で「羨ましい」を読むときには何とはなしに「うらやましい」と読み流しているが返信で「うらやましい」を漢字で書くうと思ひ調べてみたところ、「羨」の部首は羊なのだが下半分はニスイに欠と書く「次」ではなくサンズイに欠と書く普段は見かけることのない文字なのである。こういうことは書いてみないと中々気がつかない。

手書きの手紙を認めるときの筆記用具、代表格としては万年筆そしてボールペンがあげられるだろう。筆字でサラサ

ラと流れるような文字で書かれた手紙は素晴らしいと思うしできることならそのようにして書いてみたいのはやまやまなのだが残念ながら私にとつては願望のはるか彼方のことである。

そうなると次は万年筆とボールペンであるが私の好みとしては万年筆の方が数段上である。手元に一本だけある万年筆、七十年ほど前に高校の入学祝いに叔母からいただいたものである。学生時代はうれしめずらしさも手伝つて授業のノートをとるときなどに多用していた。社会人になってからもしばらくは使っていたのだがいつの頃からかボールペンにとつて代われ、出番がほとんどなくなってしまった。最近ではせいぜい年賀状の添え書きに使う程度であつた。しかしこのたびの手紙のやりとりが始まつてからは毎回が出番となりフル回転している。余談ではあるがこの万年筆に使われているカートリッジインキ、何でも使い捨てが当たり前のようになっているこの時代に、七十年前と同じ規格のものが今でも近くの文房具店で容易に入手できるというのは驚きである。

とまれお互い手書きでの手紙のやりとりが六年以上も続いている。件の喫茶店のママさんに、男同士なのによく続いているわね、などと冷やかされたりしたこともあった。彼の青年から送られてくる手書きの手紙は多いときには便箋六枚にもなる。それだけの枚数を書いているのに最後まで字の乱れもなく一生懸命書いてくれている様子がそれとなく伝わってくる。

こういうことが感じられるのも手書きの効用の一つか。一方返事を出すときには内容についてあれこれと考えを巡らせる段階でそれなりに脳を使うしそれを便箋に書く段になると頭や指先に心地よい緊張感が漂う。ただ生来の悪筆に加えて手紙の後半になると指が疲れてくるせいか字が乱れてしまうのでいつも末尾には字が乱れて申し訳ないとか乱筆乱文ご容赦願いますとか書くことになる。

すでに八十代後半に差し掛かっている今、身体のうちこちの劣化を実感する中であつて曲がりなりにも自分の手でそれなりの長さの文章を書き綴り、こうやつて手紙のやりとりを続けることができているのはありがたいことだと思つている。そしてこのことが長年使つてきた脳の更なる老化を多少なりとも抑止するのに役立っているとしたらそういう意味でも彼の青年には感謝感謝である。

川上理容院 でも気持ちは「床屋」 外山 聖 武

桔梗小学校前の『川上理容院』は、桔梗町でも古くからの「床屋」である。二代目店主の横山和子さん（八五歳）三代目店主予定の福井美知恵さん（五三歳）に、店の歴史や理容師からみた、お客様の移り変わりなどを話していただきました。

私（わつし）が小学生のころだから、終戦間もなくの頃だと思えます。店の待合室のつながりに、二畳半の小上りがありました。店の閉店後もね、夜十時ころまで近所の若者が集まっていましたね。周りは田んぼばかり。農家の若者の遊びに行くところもなくってね。床屋が娯楽場でしたね。十代末から二十代の若者がばかり。酒？みんな貧しかったから、そんなゼイタクはできなくて、自分の家でとれた野菜などを持ち寄り、鍋や茶碗を借りて、なんやかやしてつつきながら、ワンワン騒いでいたね。ある時なんかは、椅子を寄せて、相撲をどつてんばったんしてたさ。いつも五〜六人いたかな、男ばかりでした。両親は時々差し入れなんか、してたね。江戸時代の農村の、若者宿みたい役割をしていたんだろうかね。

当時の若い娘は、夜に出歩くなんてとんでもない。しかし、祝祭日などの時節句には、顔そりを口実に床屋に来て、店は一層にぎやかになったね。青年団のもとだね。今でいう4Hクラブだろうかね。その頃のことを知るなじみの人も、うん、もう少なくなってしまうたな。

（「理容院」というと調髪に行くところ、「床屋」というと、床屋談義という言葉があるっており、町の小さな集会所、息抜きの場所という感じがします。そういえば『浮世風呂』『浮世床』（式亭三馬）なんていう江戸時代の風俗小説がありました。昔からお風呂屋さん床屋さんは庶民の社交場でした。だから、この店は「理容院」ですが、地元の人々との心のつながりをなにより大事に続けている店です。タイルの洗髪台なども残ってます。今風にいうと「レトロ」というのでしょうか、昭和の風情の漂う店なので、『気持ちは「床屋』』と聞き手トヤマは、タイトルを考えてみました。もちろん、理容師としての最新の調髪技術も安心で、カット技術もプロとして日々みがいていますよ）

床屋三代

川上家は、もともとは函館の神山の農家でした。父の代は兄弟六人、学校を終えるときみな奉公に出されたものです。

父、川上利三郎が尋常小学校四年の時、何か悪さをしたのかな、廊下に立たされていて、そのまま先生が帰ってしまつてね。

川上の家では、「子どもが帰つてこない」と心配になつて学校に行つたら、暗い廊下で子どもが泣いている。

「そんなに学校が嫌なら、高等科に行かんでいい。」

それで、父は義務教育の尋常四年を終えると、高等科に行かず、青森の床屋に奉公に出されました。

そのあと函館の大門の床屋に移つて、そして知人のいる桔梗のここに店を構えました。

『床屋川上』、地域の人には「とこや」で通つていましたね。人の出入りがいっぱい、いつの間にか私の後ろにもお客様がいる。いつ入つてきたんだか。そんな店でしたね。

父の子供は四人。一番活動的で社交的な娘の私が、後を継ぐことになりました。中学の卒業式の一週間後には、もう亀田町の床屋にいましたね。

私が店を引き継いだ時に、店名を少しはモダンにと思つて『川上理容院』にしました。ちょうど亀田市が函館市と合併した頃だから、1975年（昭和五〇年）頃かね。実家で今も働いているから、私は結婚して「横山」だけど、店名は由緒ある

「川上」理容院のままで。私にも子供が三人いて、末娘の美知恵と一緒に働いている。代替わりしたら、今風な『サロンの KAWAKAMI』とか『髪いんぐ川上』とかに変えるんじゃない。

美知恵さんは、このままでいいよ、といいます。

（お母さん和孩子さんが秘話を披露します。カミングアウトでしようか）

美知恵は小さいときから違つていたね。鉛筆の軸におばあちゃんの髪を巻いて、パーマのマネとかしていました。美知恵が高校の後の進路を考えていたときに、「店を継いでくれるなら、この札幌の理容専門学校に行かせてあげる。修学旅行は、ヨーロッパ二週間だつて……」

福井美知恵さんが語ります。私はそれにつられたわけではないけれど、理容師になつてもいいと思つていたよ。自分では手先が器用だと思つていた。それを生かせる仕事に就きたいと考えていたよ。小さいときから店を手伝つていた。床を掃いたり、タオルを洗つたりしてね。だから札幌に行きました。

（四代目はどうなるのでしょうか）

私の子供は三人いるけど、どうもね。男二人は学生だけど跡を継ぐことは考えていないようだ。娘は今中学生。「儲からないトコヤは、いやー」(笑)だつて。でもしっかり将来を考えていて、「看護師を考えている」みたい。だから、『床屋川上』は三代限りかな。寂しいけど、仕方ないね。

床屋 いま・むかし

私(わっし)の奉公時代は大変だった。技術は見て覚えるものだという時代。なーんも教えてくれなかったね。住み込みでタオル洗いや下働きをしながら技術を覚える。六時に起きて掃除をして、それから夜の九時まで働きつくめ。電気代がかかるからと、十時には寝かされた。食事も、朝はおかゆ、昼は仕事のあい間にアンパン、夜は盛り切りご飯と一汁一菜。菜葉のお浸しと小魚かな。給料なんてもらえらるわけなく、顔そりができるころに、小遣い程度がもらえたぐらいです。今みたいな練習用のウィッグ(かつら)なんてなく、練習もなかなかできない。

「ネツちゃんでもいいよ、練習台になってもいいよ」という常連のお客さんに甘えて、顔そりなどをさせてもらった。

それに比べると今はいいね。住み込みでなく、寮でのびのび暮らしている。インターンの時も、手とり足取り技術を教えてくれる。娘がインターンで入った店では、店主一家から技術指導も何もよくしてもらい、娘はとてもかわいがられた。

美知恵さん「わたしも頑張ったんだよ。夜遅くまで、本を読んで勉強したし、ウィッグを使って練習したし、店の手伝いも気を利かせてやったしね。」

「それは、そつだよ。今、私たちの奉公時代のようなことをやったら、子どもがすぐ逃げるし、人権問題だよね。」

田中角栄さんが首相のころが、一番よかったね。朝早くから

夜遅くまで、お客様が途絶えなかった。今はほんとに暇になりました。その頃に比べると、売り上げは三分の一ぐらいだね。少子化とかで人口が減りすぎた。町を歩いて、人がいないねという話ばかりだ。若い人はみな東京に出て行ってしまう。亀田商工会の役員をしても、一番利益が上がっていないのは、理美容だという感じがするね。理容組合で集まっても、昭和のころは、函館市で理容組合の加盟店は二百余りもあった。今は八十を切っている。最近、男の人もパーマ屋さん(美容室)に行くようになったしね。

（和子さんはお客様のために席を立ちます。美知恵さんが今の理容室の状況を話します）

今は予約制のところが増えました。理容師が一人だと、待たせないために予約制になります。お客様がいたら、ご飯支度など家事ができなくなってしまう。うちは母さんと私、理容師二人だからいつでも対応できる。母さんが引退したら、うちも予約制にしなければ回らなくなるかもしれないね。

床屋が結ぶ縁

理容師に必要なのは、カットなどの技術も大切だが、会話をひきだす技術も大事です。おじいちゃん(初代店主)から、政治と宗教の話はしないようにといわれました。人それぞれだから。ちよつとしたことを糸口に話を広げ、お客様が退屈しないようにしています。古くからのお客様なら、近所の人の消息など

で話ができるけど、飛込の人なら天候の話などを切り口に、関心のありそうなことを引き出していきます。

でも、お客様が目を閉じていたら、話したくないか、安らぎに來ていると考えて、話しかけません。理容院は典型的なサービス業、お客様にくつろいでいただく場所だと思っています。

「誰その家はどこ」となると、「床屋で訊いて」

「あの人はどこ行つた？」娘さんが札幌で看護師をしているから、そつちの病院に入院しているつて聞いたよ。

だいたいこの地域の人の動きはわかる。クチコミが集まつてくるから。隣が交番なのに、なんでうちに住所案内を訊きに來るつて思つたけど、うちの方が分かっていると思つたんだろうね。

（そうだね。和子さんが話を引き継ぎます）

確かに警察の駐在さんは、代替わりがあるから、地元のちよつと前のこともわからないんだね。仕方ないね。

話が弾むと、手先も滑らかになるね。恋バナを聞いて、なんとなく縁を結んで、十組ぐらい仲人をしました。親子代々のお客様もいて、あの赤ちゃんがだんだんとやんちゃになって、いい男になって（ほんとですよ）、社会人になつて東京に行くなんて、ほほえましいやら、寂しいやら。孫みたいなものだからね。

私が継いだころは、戦地から帰還した人も多くいました。戦場のはなしを美知恵が好きで、よく聴いていた。その人たちはみんな亡くなつてしまつたね。

その頃はお客様同士も顔なじみで、ソファで話し込んだり

していた。今はお客さんがいると、待つのが嫌で帰つてしまふ。みんなせわしくなつたのだろうか。

つながる縁

体が不自由になつて、床屋まで來ることができない人には、出張理容もしています。さっぱりした頭になる。でもお客さんは何より話をしたかつたようだね。知っている人の近況を知らせる。感謝してくれる。人に喜んでもらえるといいね。縁を結んでいます。喜ぶ顔を見て、幸せだなと思いますね。

コロナで、人との行き來がなくなつた。家に閉じこもつていと、鬱（うつ）になる。ぼけてしまふ。お客としてでなくていいですから、たまには床屋に顔出してほしいですね。電話での近況報告でもいいですよ。昔からの消息交換の場。町の人に「だれだれは、元気だよ！」と伝えるからね。

（地域のつながりが薄れてしまつた。途絶えがちなコロナ禍の今だからこそ、地域のクチコミ・ステーションとして「床屋」が役立っている。「川上理容院」は、いまもこころと心が集う「桔梗の床屋」である）

了

俳句の力

末永玲子

2023年1月11日の北海道新聞に「ウクライナの23歳女性 戦争の影響 俳句で発信」という記事が掲載されていた。

英語

Children are playing
Flying their paper airplane
In the bomb shelter

Scooping up water
I reach into the barrel
and touch the bottom

日本語訳

子供たちは遊んでいる
紙飛行機を飛ばして
防空壕の中で

水をくむ

樽に手を伸ばし
底に触れる

五七五

地下壕の
紙飛行機や
子らの春

水瓶の
底に触れたる
寒さかな

彼女は「俳句を詠むことで自分の感情を形にでき気持ちになる」と語っている。

また昨年、函館市文学館主催「箱館戦争の旧幕臣たちが残した詩歌とその背景」と題した講演で講師の田原良信氏（市立函

館博物館友の会会長）が箱館戦争中に詠まれた俳句を紹介された。

中島三郎助（箱館奉行並）

「やぶの ままにみぎはの 氷かな」 俳号（木鶏）

川村録四郎（會計奉行）

「包丁の 切味見せん 初鯉魚」

上記の2句は明治元年12月29日 咬采園で旧幕府脱走軍の幹部が集まった句会での俳句

甲賀源吾（軍艦回天艦長）

「和田津海の 底にも咲か 桜鯛」

明治2年3月14日 咬采園において奇襲作戦開始壮行式での俳句

伊庭八郎（第二大隊長）

「猛る気の 満て勞れし 若（わか）鶏（う）かな」

明治2年4月の句

土方歳三（陸軍奉行並）

「たたかれて 音のひびきし 薺かな」 俳号（豊玉）

明治2年5月11日。土方歳三が銃弾を受け戦死。落馬した際に背中から出てきた、一枚の血に染まった短冊に書かれていた俳句。

古屋佐久左衛門（第四列士満隊長）

「其聲の 残る雲井や 郭公（ホトトギス）」

明治2年5月12日

※箱館戦争が終結したのは明治2年5月17日である。終結間際まで自分の感情を俳句という形で表したのである。

また、『戦時中 海外に送り出された兵士が戦地で俳句を詠んでいた』という話もある。「紙も筆記用具もない中で、砂浜に俳句を書き、それが唯一の楽しみ。俳句のお陰で戦火の苦しみに耐えられた」という。実際に戦地で激しい戦闘を体験した中曾根康弘元首相は「戦友を焼く鉄板かつぐ夏の浜」という俳句を遺している。（中曾根氏は「ユネスコ文化遺産登録」推進協議会設立（有馬朗人会長）の名誉会長も務めていた。）

俳句は紙と筆記用具、砂の上でさえ、5・7・5のリズムで自己表現できる、そして今や世界70カ国以上の国々で詠まれている。俳句を嗜まれている方々の理由は様々である。俳人として活躍を求める方、日々の気持ち、自然の移り変わりを、自分史を、戦火の状況を、生きる力として、病気で小説や詩は長くて書けないけど俳句ならできるという方、俳句を通して友達を作りたいという方など様々である。

そして、今年私は、新たな俳句の力を発見した。

実は、教育テレビに「夏井いつきのよみ旅」という番組がある。ご存じでない方も多いのでないかと思う。

22時50分という遅い時間帯であること、教育テレビというお堅い局番であるからである。私は偶然にも2、3回見たことがあった。詳しい内容は分からなかったが、面白い企画だと思っていた。

詳しく知りたいと思い、調べてみると、「俳句の種まき」が信条の俳人・夏井いつきさんが、各地に設置された「俳句ポスト」の中から、ユニークな「あなたの一句」を求めて全国を旅する番組。夏井さんの相棒は、ホスト界の帝王と呼ばれ、数々の名言で知られる実業家のROLAND（ローランド）さんである。このお2人は俳句を鑑賞するだけでなく、作者を招いてトークするという人情味あふれる、新感覚の俳句紀行バラエティーである、という。

今回、8月放送のロケ地は函館であった。「俳句ポスト」は「函館ショッピングセンターポールスター」と「スーパーアークス戸倉店」に設置される、とのこと。四国松山局の俳句担当者から函館市中央図書館に応募のチラシを置かせてもらえないかとの依頼。それを引き受けた館長さんは俳句に係っている方々に声がけをなさっていた。応募チラシを見ると、チラシには

北海道函館市のみなさん！

夏井いつきさんと「俳句でトーク」しませんか？

テーマ・・・最近の「ハッピーニュース」「バッドニュース」最近、あなたに起きた「ハッピー（うれしい）ニュース」「バッドニュース」、どちらかのエピソードを俳句に詠み込んでください。一句の中に、地元の言葉や季語をいれていただいてもかまいません。

俳句募集期間

2023年5／1（月）～5／19（金）

夏井さん、ROLANDさんと俳句でトーク！

気になる俳句の作者にお話し伺います。

事前にご連絡し、撮影日時などお知らせします。

是非、遊びに来て下さい！

放送予定 ※全国放送！

2023年8月Eテレ

そして裏面には、「夏井いつき伝授！初心者でも簡単に1句でさる虎の巻を公開！」

※俳句の作り方、基本が丁寧に分かりやすく説明されていた。

このチラシをみて、「是非、俳句で函館を紹介したい、函館の魅力を伝えたい」、という思いにかられた。

何をテーマに詠むか、からスタートだった。

・誰かに住む町聞かれたらはい、函館と答えます」という「函館賛歌」

・函館に寄港する豪華客船

・函館の歴史を語る「市民創作野外劇」

・文化の町函館：市民オーケストラ、巴歌舞伎、子供歌舞伎、市民オペラなど

・箱館戦争、箱館奉行所、函館五稜郭公園

・黒船5隻を率いて1854年箱館に来航したペリー提督

督

・元町のコスモポリタン情景

・青函連絡船（昭和63年廃止）

・烏賊の町「函館」

・啄木公園、啄木墓、啄木

・国宝滑空土偶、縄文史跡大船遺跡、縄文垣の島遺跡、などなど。俳句の種は沢山あった。

最終的に選んだのは「烏賊の町函館」であった。

私の子供の頃、烏賊は大漁に獲れていた。毎朝リヤカーや籠を担いで「イガーイガー」と烏賊売りが山の上にある我が家に

まで来ていた。しかし、いつの頃からか、その声が聞かれなくなった。

ところが昨年、本当に久しぶりに「イガーイガー」という烏賊売りの声が聞えてきたのだ。嬉しくなつて窓からのぞいて見ると、なんと「軽トラックでマイク片手に」烏賊売りが来ていたではないか。昔と様子は違つても、烏賊売りが復活したのだ、烏賊が獲れるようになったのだと嬉しくなつた。烏賊はいか刺し、塩から、いかソーメン、いかぼつぽ、スルメなど様々な調理法で函館の食文化を支えてきた。お菓子にだって烏賊せんべいや烏賊羊羹まである。マンホールにも烏賊の絵が描かれている。

それなのに、最近の烏賊の不漁は嘆かわしい。2、3年前、友人にスルメが欲しいと言われ、市場に買いに行つて見つけたのは、加工地が名古屋。産地は函館ではなかった。市場に烏賊を買いに行つても「今日は獲れなくてね。入らなかつたよ」と言われることもある。昔は安い魚の代表であつた烏賊が今や高嶺の花である。

それでも烏賊は今なお函館の看板である。摩周丸の近くには函館市が7、8千万円かけて作った「いかモニュメント」があり、その場所は「烏賊広場」とも呼ばれ、「わっしょい函館」を盛り上げるのも、豪華客船を出迎えるのも、留学生との交流で踊るのも「いか踊り」である。つまり今でも函館は「烏賊の町」なのだ。

「昔のように漁火が光輝く夜景の町、函館」、「大漁の烏賊の

町「函館」を強く願っている。

（鳥賊の不漁は海水温の上昇と考えられている）

こうして作った句は

復活のイガーイガー売りに 街踊る

この句を投句するとディレクターから電話があり、「どんなお仕事しているか、どんな経歴か、今は何をしているか」などなど色々な質問を受けた。「又なにかありましたらお電話かメールをします」とのことだった。その後、

○リヤカーで鳥賊売りしている昔の写真の依頼

○函館市中央図書館の『デジタル資料館』には見つからず

○函館の昔の写真を管理している会社でリヤカーを引いて鳥賊売りしている写真を発見

○留学生受け入れの写真の依頼、色々な写真を数枚送付

○教職時代の写真の依頼

卒業アルバムからスマホで撮影して送付

○鳥賊踊りを踊ってもらえないか、との依頼

函館観光協会はじめ色々なところに依頼するも、撮影日が知らされたのは5日前。しかも平日とあつて仕事のやりくりが難しいと断られた。学校、幼稚園も無理、鳥賊踊り実行委員会もこの3年活動がなく休止状態との事、NHKからは宣伝を兼ねる

会社の出演は禁止とのこと。もし誰も踊ってくれる人がいなければ私が踊るはめになる、だから本当に真剣だった。

函館市中央図書館館長落合さんにも相談。館長さんは親身になって色々手をつくしてくれたがやはり平日の昼間に踊るためには仕事の調整が難しいと頼む先からすべて断られたとのこと。しかしロケが2日後と迫った中、館長さんから思いがけない朗報が飛び込んできた、図書館スタッフで鳥賊踊りしてくれる人を募ったら10人集まりましたと。こんな身近なところに協力者がいたとは、ただただ感謝、感謝、感謝。直ぐにディレクターに電話すると「会場が狭いので4人してくれ」とのこと。4人に絞ってもらうのは申し訳ないと思いますがもしもそうお願いした。鳥賊踊りのCDは柏木町会館からお借りできた。（町会で3年間祭りをしていないのでCDもあるかどうか不安だと言われながらもなんとか見つけて下さった。本当に感謝です）

撮影当日は午前10時鳥賊モニュメント前集合と言われていたが、信じられないような悪天候。土砂降りだった。

こんな悪天候の中、丹羽秀人前函館市中央図書館館長、落合仁子現函館市中央図書館長、図書館スタッフの皆さんが集まって下さった。踊り手4人は五稜郭タワーでゲットした土方歳三のTシャツ（Tシャツの前には鳥賊の絵と「刺身ニシテヤル」という文字がプリントされ、背中には新選組の「誠」が、ばつちり）。そして図書館長さんはお父様との思い出の大きな真つ赤な

祭りのうちわを持参くださり、祭り気分は最高潮。

ディレクターは最初チラツと踊りを見せる予定だったようだが、急遽変更。大写しにし、大きな真つ赤な祭りのうちわの館長さんにも前に出て踊るように指示。素晴らしい鳥賊踊りの誕生だった。図書館スタッフの協力には感謝の言葉しかない。

これが、みんなで作り上げた「夏井いつきのよみ旅」 函館 前編であった。

そして、後編は翌日、函館五稜郭公園内にある箱館奉行所での撮影だった。前日とは打って変わって最高の撮影日和であった。

この「夏井いつきのよみ旅」の番組は、日本の小さな町々を訪れ、その土地の文化、訛り、生活などを俳句を通して紹介するものだ。この企画の人氣は夏井いつき先生の気取らぬお人柄、ローランドさんの温かく包み込むような助言や会話にあるように思う。そしてお二人ともとても聞き上手である。

もう一つ夏井いつき先生の出演する「ブレバト」という番組がある。2012年10月11日から、放送されているバラエティ番組である。「使える芸能人誰だ？プレッシャーバトル……」で、現行タイトルの「ブレバト」は、元元はその略称であった、とのこと。夏井先生の的確なアドバイス、バサツと相手の不満を納得させる技、芸能人の俳句の出来を順位で表しハラハラド

キドキさせる。エンターテインメント、バラエティーとしての要素を持つ。

今までこんなに楽しみながら俳句を学んだことがあったらうか。若い人にとつて俳句は昔の人のもの、年配の方々が楽しむものというイメージだった、と思う。

それをこんなに分かりやすく、楽しく、しかも俳句の基本をしっかり教えてくださる夏井いつき先生は俳句を身近なものにし、俳句人口を広げて下さっていると言える。

又2023年（令和5年）8月21日付けの北海道新聞に「俳句甲子園旭川東高等学校準V」という見出しの記事が出ていた。その内容は

高校生5人1チームで俳句の出来栄や鑑賞力を競う第26回「俳句甲子園」の決勝戦が20日松山市で開催され、旭川東高等学校は東京開成高等学校に敗れ、準優勝した。開成高は大会史上初の4連覇を果たした。決勝では両校が「道」を題材に戦った。それぞれ用意した5句を交互に発表し、1句ごとに4分間のタイムアウトを繰り返した。句の創作力だけでなく、意見のやり取りを通じての鑑賞力も評価された。

19都道府県32チームが全国大会に出場し、熱戦を勝ち抜いた6チームが決勝リーグに選出。このうち旭川東高等学校と東京開成高等学校が決勝に駒を進めた。

こういう俳句の嗜み方もある。今年度の毎月第4日曜日 午前6時35分からEテレで放映されているNHK俳句でも、この形式の講座がある。

こう考えると俳句は

・世界で一番短い文学作品
・子供から老人まで楽しめる文学
・人と人を結びつけ、交流できる
・自然と向き合わせる（環境汚染、自然破壊、温暖化にも気づく機会を与える）

・心を外に開いて、色々なものを受け入れようという心を養う（他を理解しようと努力）

・受容する心を養う（マイナスな感情の解毒剤になる）

・季節の移り変わり、自然を観察して俳句を詠むことで言葉を紡ぐ時間を生み出し、心を落ち着かせる

・エンターテインメント、バラエティーの要素としても楽しめる

・怒り、惨状、平和の願いを訴える力ともなりえる

ということが分かる。

このような力を持つ俳句を「ユネスコ無形文化遺産登録」しよう、という運動が盛り上がり、俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会が立ち上がり、現在活動しているのをご存じだろうか。

前国際俳句交流協会会長の有馬朗人氏が2016年7月に伊賀市岡本栄市長とともに俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会発起人会を立ち上げられ、翌年の4月に俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会が設立された。俳句は5・7・5という世界で一番短い詩形であること、俳句は自然と共生する文学として自然を大切にすることが養われること、さらに子供から百歳に至るお年寄りまで、幅広い人たちと創作及び鑑賞が共有できること、この世界で一番短い文学作品を通して交流をし、世界の平和という観点から推薦する、とうたっている。

ベルギーの元首相で第1代目E.U大統領を歴任し、ご自分でも俳句の句集も出しているヘルマン・ファンロンパイさんも、俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進に共感するお1人である。彼は、俳句とは、世界の調和という夢を込めた文学であり、俳句は聴く人にイマジネーションを膨らませる、自然と向き合い、様々なことをじっくりと考えさせてくれ、心を外に開いて、いろいろなものを受け入れる受容する心を育てる、と言う。俳句を作る精神が、ひいては差別や偏見などのマイナスな感情さえも

抑えてくれるとも考えている。気ぜわしい現代社会では、ついつい気持ちに余裕がなくなってしまう、空に浮かぶ雲をじっと眺め、花に止まった虫の動きを観察して、心を静かに、じっくりと言葉を紡ぐ時間も無くなっている、そんな時代だからこそ俳句が必要である、と言う。そして世界で一番短い詩形である俳句こそがこの目的を達成できる力を持つ文学だ、と話している。

昨年、私は我が家にホームステイしていたウクライナの学生、ブラッドのことを書いた。彼はウクライナからの留学生であったがロシア語を話し、ウクライナ語を話す人をちよつと軽蔑というか、蔑んでいる雰囲気があった、ということも書いた。ウクライナの東部のドネイツク出身のブラッドであったが、その地域は親ロシア勢力区域であり、彼の町はまさにロシア語を母語とする地域であった。日本人には理解できない複雑な問題が絡み合っているのがわかった。だからウクライナ戦争が起った時にはやはりという思いであった。彼の行方については本当に心配であった。テレビで戦場の様子を見て亡くなっているのも不思議じゃないとさえ思えた。思い切って昨年9月に彼にメールを打ってみた。すると「今、家族と共にカナダにヴァケイションで来ている」と返ってきた。

ああ、無事だった、と本当に安堵し、家族みんなで歓び抱き合った。本当に神に感謝した。また折り返し戦争について聞くと「ひどい戦争だ。信じられない。でももうすぐ終わるだろう。」

と返ってきた。さらにメールすると「函館のことが思い出される。函館の町、山、とても懐かしい」と返事がきた、現在何をしているかと尋ねると「家族と共にドイツにいて、自分が望んでいたエンジニアの仕事をしている」とのこと。彼は幸運にもドイツで生きる術を手に入れたのだろうが、たとえドイツで生活できるとしてもウクライナのドネイツクに戻りたいのではないかと想像できる。彼のおじいさんは大きな向日葵畑を所有し、向日葵から蜂蜜を採取していた。もう一人のおじいさんは大きな家に住み大きな農場を所有していた。そんな母国に帰りたいのは当然だ。しかし、ブラッドの予想に反し、戦争の終わりは見えない。

今、私はどちらの味方でもないが、とにかく早く戦争を終わらせ、人間としての話し合いをしてほしい。戦争が長引けば長引くほど、死者の数が増え、地球は破壊され、温暖化は進み、食糧難になり、人間そのものが生きていけなくなる。どちらが勝っても、負けても悲惨な結果しかない。

戦争が終わっても、民間人も兵士も精神的ダメージに悩まされ続けるだろう。

話し合いでダメなら暴力。戦争とは殺傷能力の高い方が勝利する。これで良いのだろうか。

常に、疑問を抱いている。戦争になるとすべてのルールがなくなる。人間の心が奪われる。

最後に、私の「平和」への願いで終わりたい。

We all are people on the earth
there's no countries
nothing to kill or die for

我々 地球人！
国など無い
殺しあう理なし

the world is as one
a brotherhood of man
sharing all the world

世界はひとつ
みな兄弟だ
助け合おう

color, culture, language
don't matter
we all are people on the earth

肌、文化、言語
関係ない
我々みな地球人だ

war only destroyer
no merit
no more war

戦争は単なる破壊
メリットなし
もういいよ、戦争！

whose is the earth?
for human beings?
for all the living things?

地球は誰のもの？
人間のもの？
すべての生き物？

Let's love the earth
Let's keep our planet
The earth is our lives

地球を愛そう
地球を守ろう
地球は我々の命

Let's dream
All the people
Living life in peace

みんな、夢を見よう
すべての人が
平和に暮らす

War only destroyer
No merit
No more war

戦争は単なる破壊
メリットはない
もういいよ、戦争！

Reiko

玲子

選 評

木村 裕俊

今回から「ノンフィクション部門」を担当することになりました。どうぞよろしくお願い致します。

応募作品を拝見させて頂きましてまず感じましたのは、意外にも原稿枚数の少ない作品が多かったことでした。「ノンフィクション部門」の原稿枚数の規定が35枚以内ですから、その意味では特に問題になることではないのですが、「ノンフィクション」作品の特性上、何かのテーマを決めて書き進めますが、その際テーマに沿った調査と評価をきちんとしておかなければなりません。これがしっかりしていないと読者に伝えたいメッセージが伝わりにくいのではないかと思うのです。遠慮せずに規定内の原稿用紙を十分に使って、明確なテーマの設定と深く掘り下げた調査・評価をもとに、どうぞ読者の方々に「新しい視点や発見」を与えられるような作品を目指して頂きたいと思っています。

もう一点基本的なことですが、応募作品の原稿の中で「誤字・脱字」や原稿用紙の「禁則処理」が行われていないものが目立ちました。これは私自身も、何度直してもいくら気を付けていても、時々ヒョコリと顔を出すことがあります。これを防ぐ特效薬はないと思います。原稿を何度も読み返して注意するしかなさそうです。こうしたことに注意して頂き、楽しいワクワクするような「ノンフィクション」作品を作って頂きたいと願っております。

【受賞者の選評】

(1) 入選

「あの水舞台に帰る日」

佐藤 健

この作品は「函館野外劇」の活動に参加され、その練習風景や上演時の心情などに触れた作品です。文章には筆力もあつて、迫力に満ちた作品に仕上がっています。

「函館野外劇」は、函館と道南の歴史を題材に、和人とアイヌ民族との確執、北前

船交易、幕末動乱など、かつて箱館の街で起こった数々の事績を野外の舞台劇にして公演している市民団体の活動です。箱館という街は歴史の宝庫です。それは、私の郷土史研究と重なる点もあり、とても興味をもって注目していました。

かつて野外劇活動は、公演の一ヶ月ほど前には五稜郭の堀の上に舞台が設置され、五稜郭をバックに迫力ある上演を行っていました。しかし近年「郭」の石垣が崩れ、安全上の措置等から舞台の位置を変えて、公園入り口広場や五稜郭タワーのアトリウムを使用して行うようになりました。以前に比べると公演規模が随分と縮小されてしまい、淋しくなりました。

しかしこうした状況の中であつても、出演者やスタッフの方々は、皆一丸となつて今も頑張っているとのこと。そして、彼らの見つめるその先には、いつも「かつて五稜郭公園の堀の上に作られたあの大きな『水舞台』」の上で、もう一度伸びのびと大きな演技をしたい」という大きな夢があり、それに向かって今日も練習に励んで

いるのでしょうか。

(2) 入選

「手書きの手紙」

小島 栄樹

よく書き慣れた上手な文章で綴られています。小島さんの今回の作品は「随筆」的な要素もあるような、楽しい作品に仕上がっておりませんが、原稿用紙を8枚で終わらせているのはもったいないという思いが致しました。テーマの問題点をもう少し深く掘り下げるなどの工夫をしてみてもよかったです。例えば一時期ワードプロセッサ全盛期であったものが、手書きに回帰したのはなぜなのでしょう、文字をきれいに書けない人はどうすればいいのでしょうか、この際手紙の内容は問われないのでしょうか、世の人々は活字の小説は許されるのに活字の手紙にはなぜそんなに冷たく手書きを求めるのでしょうか、など掘り下げると面白そうな話題が沢山出てきそうな気がします。ですが、それはよく考えると、どう

も私の悪筆の悪あがきから出た気持ちだったような気が致します。ご容赦下さい。

(3) 佳作

「川上理容院、でも気持ちは『床屋』」

外山 聖武

市内の古くからある「理容院」について書いた作品です。店の名前は「理容院」なのですが、あえて「床屋」と呼んで店の歴史や客の移り変わりについて、店の御主人にインタビュー形式で聞いた話を紙上再現した形式になっています。

原稿の内容から、インタビューの登場は極力抑えて、店の御主人の話を最大限生かしたまとめ方にしており、とすれば、ご主人の「一人語り」をまとめたような錯覚に陥る面白さがあります。話の内容にも「古き良き時代」の何とも言えない臨場感があつて、うまくまとめていると思います。この「床屋さん」今は母娘二人で行っているといえます。最初に始めた夫はすでに亡くなり、話は店の主人、二代目のおカミさん(作品の中では「和子さん」と呼んで

いた。)にインタビューしているようであった。古い戦後の貧しかった時代の話から始まって、その当時の生活感や正直に生きてきた人生観のようなものが伝わってくる。こんな話をしているので、おカミさんはかなりの御年輩であろう。店は3代目となる娘さんと一緒にいるといえます。娘さんは結婚しているから、店の名前は変わってもよいのでしょうか、昔のまま変えないのだそうです。店は家族で切り回していきまして、とても仲の良い家族のようです。

町内における「床屋」の役割も、まだ大きいものがあるといえます。町内の色々な事件(?)をはじめ、様々な情報を聞きに来る人も多くいます。個人情報ですが、何でも話せるわけではありませんが、地域のつながりが薄れたこのご時勢に、街の「床屋さん」は今も人々の心とところをつなぐ店として残っているのだといえます。とてもやさしい和やかな話題です。作品の構成も先ほど申し上げましたが「二人語り」を思わせるような形式で、新しい視点

から見る事ができる作品のように感じました。

(4) 佳作

「俳句の力」

末永 玲子

ロシアのウクライナ侵攻がますます深刻になる中、地下で息をひそめながら避難している人々が、一日も早く平和が実現するよう祈りながら俳句を作っているという活動がまず紹介されました。その上で次の幕末の旧幕府軍の志士たちが「箱館戦争」の最終戦を前に句会を開いて自分の感情を俳句で表したといひます。俳句を世界の文化遺産にしようと活動している人の話、他にも、俳句甲子園の話題などを交えて、平和への願いを込めて俳句を作り、その交歓の輪を大きく広げていくという、俳句の持てる力を紹介していました。そして執筆者は俳句を書く意義として「日々の気持ちを、自然の移り変わりを、自分史を、戦火の状況を、今日生きる力として」書くことが出来る。といひ「病気で小説や詩は書け

ないけれど、俳句なら出来る」という方もおられると紹介しておりました。

いまや日本の俳句も、世界の俳句となり五・七・五の短い韻文の中に変わらぬ平和への願いを込めた思いが読み込まれ、多くの言語に翻訳されています。今、このような力を持つ俳句をユネスコの「世界文化遺産」に登録しようとする運動が盛り上がりつつあるのだといわれています。

執筆者は、俳句とは世界の調和を取り、聞く人のイマジネーションを膨らませる役割をするものではないかと主張し、本作品の最後に、執筆者の作品であろうか「平和」への願いを込めた英文と和文の句集を添えて、俳句の持てる力を紹介している。

(了)

詩

入選

コンポスト

西野

きぬえ

糠床を作る要領で

今日の喜怒哀楽を

小さく刻んで

コンポストの土に

混ぜ込む

一日の糧は

未だ^ま終わっていない

盛られた料理の

先にあるものを

見たくなつた

生活から生まれた

あらゆる物達に

小さなシャベルで

陽と風を

添加する

痛みや悲しみは

時間が掛る様だ

しかし好気性菌は

ゆつくりと

分解する

全ての物の

在り場所は

生きた時間を

豊かに発酵させ

命を繋ぐ

土壌に在る

負ケナイデネ!! 雨ニモ風ニモ……

梅村 美保

雨、降りヤマズ、雨ハ降り止マズ

雨ハ降ル――

ジツジツジツジツ

ヤガテ、風ト雨ガ猛烈ニ混ザリ合ウ

風神、雷神ニ魂ガ宿リ 踊ル 踊ル

オドル、オドル、オドル

ミサイルモ

ジツジツジツ

侵攻モ

ジツジツジツ

感染症モ

ジツジツジツ

止マラナイ……雨モ風モ存在ヲ高メアウ!

雨ハ風ハ止ムノヲ忘レタカ・・ジツジツジツ

湿気ガ百%ニ達スル程ノ勢イ

仏壇ニ飾ラレテル『向日葵』ガ

ウナダレテル・「水」ヲ下サイト

薄暗イ部屋ノ中デモ目立ツ埃・

花瓶ノ水ヲ取り替エル――

「埃」ヲ払ウ――所要時間・ワズカ……

ナノニ、吹キ出ル汗……

ジツジツジツ

雨ノ日ハ古傷ガチクリチクリギユツギユツ

風ノ日ハスカスカニナッタ日カラ頭皮ガ

サツサツツヒリヒリ痛い・等ト

言イ訳ヲスル弱音吐キ物臭……

『ゴメンナサイ』

日々、変ワル母ノ『遺影』ヲ 見上ゲル

今日ノ母ハ 笑ッテル

静カニ笑ッテル

『シツカリシナサイ！』ト

雨モ、風モドコカ・旅ニ出タ ？？ミタイ――

ジツジツジツジツ

ジツジツジツジツ

ジツジツジツジツジツ

負
ケ
ナ
イ
・
負
ケ
ナ
イ
・
負
ケ
ナ
イ
・
ヨ
!

選 評

鷺谷 みどり

今年度は、十名の方による二十一編の作品が寄せられました。今回も悩んだ末、随筆に近い作風の作品は選外とさせていただきます。随筆的な作品は、総じて真摯で丁寧な日常を捉えようとしている作品が多く、書き手の方の誠実な人となりを感じることができました。しかし、詩には日常の、現実のその先を理性ではなく直感で掴み取ろうとする目が必要であり、読み手に知識ではなく感覚的な驚きを与える強い個性が必要であると私は考えております。その点で今回は西野きぬえさんの作品が頭一つ抜きん出ている印象を受けました。

入選 「コンポスト」

西野きぬえ

西野きぬえさんは五編の作品を送って下さり、そのどれもに光る要素がありましたが、題材の生かし方、「今日の喜怒哀楽を

／小さく刻んで／コンポストの土に／混ぜ込む」という、日常のその先を希求する詩的な態度が「コンポスト」では特に成功を収めており、入選作とさせていただきます。廃棄する食材のぐみを一日生きたあらゆる出来事や感情になぞらえ、それが発酵し別のものへと昇華する様を自然と共に待つうつくしい展開。しかしかたちを変えた「今日の喜怒哀楽」を肥料として添加された土からどんなものが実るのか、期待感が高まる鮮烈な初連／第三連までに比べ、最終連の終わり方はやや肩透かしなものにも感じられました。

西野きぬえさんの別作品「夏至」はコンパクトでありながら初連「ソフトクリームの／てっぺんを頬ばった時／夏至は溶けて／私の五体を／通り過ぎた」に持ち前の立体感のある言語感覚が発揮されており、佳作としかったのですが、最終連「始発は／既に／駅を発った」の唐突感が否めず、選外といたしました。修正前の「冬への始発は／既に／駅を発った」であればテーマを最大限に生かした表現ともに文句

無しの良作であったと思います。これから、その独自の感性を存分に発揮した作品を生み出して欲しいと願わずにいられない才能ある詩人です。

佳作 「負ケナイデネー!!」

雨ニモ風ニモ・・・」

梅村美保

昨年度「ある一日が僕にのこしてくれたもの」でのびやかな筆致により日常のある一点を掬い上げてくださった梅村美保さん、今年度はオノマトペを効果的に用いており、引き出しの多さを感じます。そしてどちらの作品も最後には力強く前を向く語り手に、こちらも勇気づけられる思いがしました。

この作品の面白さはやはりことばの独特で多彩な使い方でしょう。憂鬱な現状を描いているにも関わらず、宿るリズムは軽快ですらあります。繰り返される「ジッジッジ」、進行していく事象を不吉に表し、語り手の脳内で鳴り響く不穏なノイズでもあるようなそれは、最終連では雨後の蟬

の声と解釈できる、立体感のある現実の音として立ち現れて来ており、その反転に言語芸術の妙を見ました。しかし最後の「ジッジッジッ」たちは同時に変わらない現状の陰鬱さも纏っており、その上で「負ケナイヨ！」と自身を奮い立たせる語り手という構図は鮮やかであると言えます。

に完成度の高くなるだろう作品に多く出
会い、菌痒い気持ちになりました。今回見
つけた各作品に見え隠れする感性の原石
を、見事に磨き上げた作品に来年出会える
ことを、楽しみに待っております。

今年度も昨年に引き続きコロナ禍やウ
クライナ侵攻等による社会不安のなかど
う生きるかを模索する作品が多かったよ
うに思います。来年度はこれにガザ地区の
問題も加わるでしょう。しかし詩というジ
ヤナルで忘れてはならないのは、その危機
感、問題意識を一度自身のなかで熟成させ、
他にはない自分自身が捉えた世界の解釈
をことばによって発露するという事です。
詩は短いセンテンスに詩人の固有の感
性を表出する文字であり、そのため一行た
りともありきたりなことを残してはな
らない、必然性と程良い緊張感が必要です。
今年も、もう少しだけ推敲を重ねれば格段

短歌

山縣庸美選

入選

イノセントな少女のやうな真つ白な入道雲を飛び越えてみたひ
喧嘩して夫婦人形吾の位置を少し離してあちらを向かす
つつがなく八十一歳厚切りのパンを心の糧とて喰ふ

清水牧子
柴田泰子
菊地利春

佳作

猫のためエアコン物件に引つ越して結果助かりし今年の猛暑
姑も亡く越後の故郷懐かしむ庭の無花果実りてありや
神社への石段登るに縞栗鼠シマリスが春の日差しに微睡みてをり
当直の一夜が明けて地に足が吸ひ込まれゆく内視鏡室
やうやくに立ちたる吾子は笑顔見せ日にいくたびも立ちてみるなり

三本木 萌
石 寄 章 枝
竹 田 光 彦
水 関 清
清 水 法 雄

選評

山縣 庸美

入選

イノセントな少女のやふな真白な入道雲を飛び越へてみたひ

作者は今も入院されているのであろうか。願望のような、下の句の動き。初句の「イノセント」があつてのこの歌。

喧嘩して夫婦人形^{めおと}吾の位置を少し離してあちらを向かす

夫婦喧嘩の仲直りの一手。ご主人も気が付かれたことでしょう。下の句なかなか微妙な描写ですね。

つつがなく八十二歳厚切りのパンを心の糧として喰ふ

八十一歳を抗うように心の糧として厚切りのパンを喰う。「喰ふ」は気になるが、「食す」では作者の抗う気持ちが弱くなる。

佳作

猫のためエアコン物件引越して結果助かる猛暑の夏

本当に今年の猛暑はきつかった。猫のため、作者自身も助かつて何より。マンションのエアコン付きは意外と少ない。

姑も亡く越後の故郷懐かしむ庭の無花果笑りてありや

年と共に越後の故郷が懐かしくなりますよね。私の亡父も下関恋しやで晩年墓参りに行つてました。下の句によつてこの歌が生きた。

神社の石段行けばシマリスが春の日差しに微睡みてをり

この様な歌も良いですね。暮し向きが落ちつき、職場詠が読めなくなり寂しいです。

当直の一夜が明けて地に足が吸ひ込まれゆく内視鏡室

広く使われている体腔または内臓の内腔を直接観察されるというお仕事をされておられる。当直明けの「地に足が吸ひ込まれゆく」の捉えかたが作者ならではの歌になった。

ようやくに立ちたる吾子は笑顔見せ日

いくたびも立ちてみるなり
お子様が授ずかりおめでとうございませう。生まれたばかりの歌も良いですが、今回は動きのある歌を選んだ。

今回も百一首の応募作品があり、選ぶのに難儀した。五首応募する方が多くなったのは嬉しいが一首一首が勝負。多少添削したが添削するならして見ろ、×を付けれるなら付けて見ろ。此の自信と責任を持たなければ進歩は無い。作った作品を一晚でも寝かせてもう一度読み直して推敲してみるのが良い。

選 者 詠

山 縣 庸 美

疎開地は母の実家の広島にて京都に逃れて原子爆弾に遭はずき

蜘蛛の糸に羽根絡まるも逃げ来しか赤とんぼ一匹低き支柱に

朝々に「今日の予定は」と妻の間ふそれは私が貴女に問ひたし

脳の働き快晴にあらず曇りゐて脳梗塞とは難儀な病

咲き充てる白梅に降りしは黄砂にてゴビ砂漠より日本海を渡りて来しか

俳句

熊澤三太郎選

入選

恩師との別れ儚^{はかな}む春の海

母も去り田の広々と秋の暮

空に立つ茶毘^{だび}の煙や紅葉とき

千葉誠一

清水法雄

斉藤よし子

佳作

徹夜して一等昆布仕上げたり

母の手へ秋桜渡す嫁ぐ朝^{こすもす}

散るさくら羽衣となり母の忌に^{あきしも}

秋灯し傷みはげしき辞書のあり^{ひとこと}

他人事と思ひし我も敬老日

竹田光彦

富樫けんじ

菊地穂草

小坂彩羊

見春妙子

選 評

熊澤 三太郎

入 選

恩師との別れ 儂^{はんな}む春の海

季題の「春の海」は津軽海峡ですね。

どこの「春の海」もおだやかな姿になるけれど、いつぼうでは転勤の季節でもあるのです。「恩師との別れ 儂^{はんな}む」がそれですね。教えを受けた先生との別れを儂いものとしてつくづく思う作者。この「儂^{はんな}む」の語がとてもいいですね。「儂^{はんな}い」の形容詞を「儂^{はんな}む」と動詞にして「春の海」にも強く繋ぎました。

母も去り田の広々と秋の暮

季題「秋の暮」は山本健吉編の歳時記によれば新古今集の三夕^{せきせき}の歌あたりが秋の夕暮れの季感を固定させた。とある。つまり「暮れの秋」の意ではない。その短い薄暮にふと亡き母がいろいろなものを植えていた田畑を思っていたのでした。「田の

広々と」してしまつたその空しさが作者の胸を突いていたのでした。

空に立つ茶毘^{だび}の煙や紅葉^{もみぢ}とき

「紅葉」は秋ですね。「茶毘」は火葬のこと、どなたか、知人の霊を弔う句かそれとも全く知らない人への弔いの句であつたかも知れない。滑らかな口調の良い句となりました。

佳 作

徹夜して一等昆布に仕上げたり

季題は「昆布」。夏の季題で、この説明はいらなんでしょう。綺麗に干し上げて皺もなく一等級にするには、大変な労力を必要とします。単刀直入に五七五と断定した気持ちの良い句になりました。

母の手へ秋桜^{コスモス}渡す嫁ぐ朝

季題の「秋桜」は「コスモス」ですね。水原秋桜子編の歳時記のコスモスをそのまま写してみます。「細い茎の先に、白赤

ピンクの清楚な花を咲かせ、風にゆらぐコスモスの姿は秋の田園風物詩として第一に挙げるべきものであらう。茎も葉も繊細で、花は一重の優美な花が幾十輪と咲くが、どれほどたくさん咲いても賑やかな感じはしない。」
そのコスモスと母と嫁ぐ子の物語のよな句でした。

散るさくら羽衣となり母の忌に

「羽衣」は鳥の羽で作つた薄く軽い衣。天人がこれを着て自由に空中を飛行するという。「母の忌」に「散るさくら」が「羽衣」のように空中を飛行していたのであつた。季題の「散るさくら」と謂うおだやかな表現がいいですね。

秋灯^{あきともし}し傷みはげしき辞書のあり

季題の「秋灯^{あきともし}」がいいですね。「傷みはげしき」の表現も。ただ「辞書のあり」で句の旨みを減少させてしまつたようです。「歳時記よ」とでもしたらどうでしょうか。

人事じんじと思ひし我も敬老日

「敬老日」は国民の祝日のひとつで九月十五日ですね。まこと句の通りですね。私などいつ死がやって来るか、毎日のように思いつつ生きています。

選 者 吟

熊 澤 三 太 郎

吾が狹庭生れ夏蝶うま去つて行く

焼酎も薬も飲んで老いて居り

秋涼しうた転た寝の本ドサと落つ

ふるさともう吾が家やなき墓参り

ちんちろりと老寿を延ばしくれさうな

白井靖孝選

入選

悩みごとさかさに見れば笑い事

年金と小さい幸をすり合せ

作柄の懸念深まる温暖化

石本美恵子

犬石恭子

石岡繁雄

佳作

ごみ収集猛暑の中をありがとう

再会は遠い時間をすぐ忘れ

節電を誓ったはずが消し忘れ

財布まで思い出入れて孫帰る

縄文のロマンひも解く北遺跡

岩本真穂

本間総子

大山徒史子

鍋倉英諒

山館函美

選 評

白井 靖孝

今年度の市民文芸川柳部門への投句は十八名、八十七作品でした。いわゆる時事川柳の当たり年とも思えるほどに、内外いろいろな出来事がありました。が、市民文芸への投句と考えてか、「人」を詠んだ句が多くてとても嬉しかったです。しかも、一句一句が充実していて、選句にはうれしい苦勞をさせて頂きました。今回もたくさんさんの佳句をありがとうございました。

入 選

悩みごとさかさに見れば笑回事

まさに、膝ポン川柳ですね。川柳を詠む時には先ず句材を探しますね。好奇心を全開にして探しますが、この句のように身近にたくさんあります。「あつ、なるほど」と、思わず膝をポンと叩いて納得感心させられます。お見事な一句です。

年金と小さき幸をすり合せ

増えない年金と急速に進む物価高の狭間で懸命に生きている私たちですが、現役時代以上に幸せを求める思いが強くなっています。高望みではなく、あくまでも年金と折り合いをつけながらの小さなき幸せです。中句「小さき」を「小さい」に替えました。

作柄の懸念深まる温暖化

「温暖化」という言葉に慣れてきた頃からさらに気温が上がリ、「沸騰化」なる言葉も使われるようになりました。当然、農作物や漁獲物には大きな変化があるようですが、困るのは作柄が悪くなつて、それが直ぐに値上がりという形で影響することです。でも、サツマイモが豊作で少し癒されます。

佳 作

ゴミ収集猛暑の中をありがとう

全国で温暖化が進む中、函館では観測史上初めての猛暑日を記録しました。クーラーを付けるかどうか真剣に検討する家庭が増えたようですが、そのさなかにも、決められたゴミ収集日に、駆け足で地域を回る作業員の方々には本当に感謝、感謝ですね。

再会は遠い時間をすぐ忘れ

懸命に生きた現役時代も過ぎて昔を振り返る時間が出来ると、ふと、懐かしい顔が浮かんできます。「会いたいね」の話が実現して、昔の顔が列車から降りて来ました。一晩中、枕ならぬ記憶のぶつけ合いになりました。

節電を誓ったはずが消し忘れ

値上がりで一番影響力があるのは電気代でしょうか。便利の対価として払ってきた電気代ですが、節電へと舵を切る

事にしました。そこへ割り込んできたのが最近の物忘れ。直ぐに、消し忘れとして正体を現します。電力会社のほうから「くすつ」という笑い声が聞こえてきます。一晩中、家人と反省会です。

財布まで思い出入れて孫帰る

夏休み恒例の、孫が遊びに来てくれました。一年ごとにぐんぐんと成長する姿を見るのが楽しみで大歓迎していましたが、学年が進むにつれてクラブや塾などで来る機会が無くなるのではないかと、気がかりな祖父母です。ジジはジジで、ババはババで、孫の財布にそつとおこずかいを入れています。

縄文のロマンひも解く北遺跡

渡島半島だけでも様々な縄文遺跡が発掘されています。その最たるものが、国宝に指定されているカックウ土偶ですね。農婦の鍬へ、「ここにいろよ。」と合図を送った土偶。遺跡のロマンを伝えるべく全国を回っています。

選 者 吟

白 井 靖 孝

足りぬまま後期の坂を行く理性

好きに生きなきや途方に暮れる独り

ときめきを探しキヨロキヨロ好奇心

もつたいないが層をなす冷蔵庫

寒の入り腕を布団に退避させ

審査員紹介（*本紙各部門受賞作品の掲載順）

随筆

函館文学学校講師

対馬 俊明

小説・文芸評論

北海道教育大学名誉教授

安東 璋二

ノンフィクション

北海道史研究協議会会員

木村 裕俊

詩

日本現代詩人会会員

鷺谷 みどり

詩誌『雨彦』同人

短歌

新アララギ会員

山縣 庸美

俳句

『ホトトギス』同人

熊澤 三太郎

川柳

はこだて川柳クラブ代表

道新文化センター川柳教室講師

白井 靖孝

あとがき

『市民文芸』第六十三集をお届けします。

今年の各部門の応募作品数は、

随筆十編、小説九編、文芸評論二編、ノンフィクション八編、詩十一編、短歌百一首、俳句百二十六句、川柳八十七句、計三百六十四点となりました。

今年度もほぼ昨年と同様たくさんのお応募がありました。

今年度は新型コロナウイルス感染症の位置づけが5類感染症になるという大きな社会の変化がありました。

市民文芸の表彰式も以前の形に戻るようになりました。

市民文芸が更に市民の皆様幅広く浸透して、来年度の表彰式は一層華やかな場になるよう係として取り組んで参ります。

今回木村裕俊先生が、新たにノンフィクション部門の審査員に加わってくださいました。

これから、どうぞよろしくお願いいたします。

各審査員の先生方には、ご多用中にもかかわらず、厳密なる選考とご講評、貴重なご意見を賜りましたことを心より厚くお礼申し上げます。

函館市民文芸 第六十三集

発行日 令和6年3月16日

編集・発行 函館市中央図書館指定管理者図書館流通センター・マルエ

イヘルシーサービス共同事業体（函館市五稜郭町26-1）

TEL（〇二三八）三五―五五〇〇

題字 木下 順一

表紙 撮影者 元函館市中央図書館長 丹羽 秀人

タイトル 「五稜郭タワーから見た桜と函館市中央図書館」

印刷所 有限会社 日孔社

【 応 募 要 項 】

募集作品

1. 随筆	400 字詰原稿用紙	5 枚以内
2. 小説	同 上	4 5 枚以内
3. 文芸評論	同 上	4 5 枚以内
4. ノンフィクション	同 上	3 5 枚以内
5. 詩	同 上	5 編以内
6. 短歌	同 上	5 首以内
7. 俳句	同 上	5 句以内
8. 川柳	同 上	5 句以内

【 応 募 規 定 】

1. 応募資格は函館市民であること（函館市内の学校に通学している児童、学生、生徒、また函館市内に通勤している者を含む）

2. 原稿は未発表のものであること。

3. 原稿には ①応募部門
②住所
③氏名（ふりがなを必ず付記のこと）
④年齢・性別
⑤職業（児童、学生、生徒は学校名・学年も必ず記載のこと）
⑥電話番号 を明記してください。

4. 400 字詰め原稿用紙に手書き、またはワープロ・パソコン原稿によるもの。
原稿用紙に手書きする場合、ボールペンもしくはインクで誤字脱字のないように、読みやすい字（楷書）で記載してください。

ワープロ・パソコン原稿の書式は、原稿用紙（400 字・20 字×20 行）設定で、規定枚数内であることをご確認のうえ、ご応募ください。

短歌・俳句・川柳は、すべての漢字にふりがな（読み方）を記入してください。

ふりがなについては、作品集掲載の際に表示を希望する箇所に（ ）をしてください。

5. 応募原稿は返却いたしません。

また、入賞（入選・佳作）作品の著作権は、すべて函館市に帰属いたしますので、ご了承ください。

6. 作品の中では個人情報保護に配慮し、個人・団体を誹謗・中傷するような内容の記載はご遠慮ください。

